

沖縄県立博物館

紀要

第31号（2005）

＜考 古＞

- 當眞嗣一 沖縄における鉄器研究について 1
新田重清・比嘉賀盛・島袋春美・仲座久宜 浦添貝塚－第一・二次発掘調査のまとめ－ 13

＜美術工芸＞

- 平川信幸 資料紹介 琉球王国における染織注文書 55

＜民 俗＞

- 松川聖子 猪と人々のくらし－大宜味村を事例にして－ 65

沖縄県立博物館紀要

第31号(2005)

沖縄県立博物館

日 次

CONTENTS

<考古>ARCHAEOLOGY

- 當眞嗣一 沖縄における鉄器研究について 1
Shiichi TOMA

Archaeological Studies on Ironware in Okinawa

- 新田重清・比嘉賀盛・島袋春美・仲座久宜 浦添貝塚－第一・二次発掘調査のまとめ－ 13
Jyusei NITTA, Yoshimori HIGA, Harumi SHIMABUKURO and Hisayoshi NAKAZA
Report on the Excavation of Urasoe Shell Mound

<美術工芸>ARTS AND CRAFTS

- 平川信幸 資料紹介 琉球王国における染織注文書 55
Nobuyuki HIRAKAWA
Notes on Historical Materials for the Order Form of Dyed in the Ryukyu Kingdom

<民俗>FOLKLORE

- 松川聖子 猪と人々のくらし－大宜味村を事例にして－ 65
Seiko MATSUKAWA
Ryukyu Wild Boar and the Life of People in Ogimi Village

沖縄における鉄器研究について

當眞 崑一^{※,※※}

Archaeological Studies on Ironware in Okinawa

Shiichi TOMA^{※,※※}

はじめに

14世紀の中葉、沖縄本島中部一帯の霸者として現在の浦添あたりに察度という人物が現れた。察度は1372年に明の太祖洪武帝の招諭に応じて入貢し、初めて対中国貿易を開いた王として有名である。察度の誕生についての伝承では天女の子として生まれたという天女伝説と結びついている。彼は長じて、近くの牧港に来航した日本の商船から鉄塊を買い入れて農具をつくり、農民に与えたので信望を得、そして浦添按司に推され、やがて中山王となったという。その王統のことを察度王統といっている。

第一尚氏王統を築いた尚巴志王の場合にも、日本の商船から鉄塊を買って農具を作り、農民に与えて大いに人心を得、王位についたという伝承が伝わっている。このように、察度と尚巴志の話からもうかがえるように、琉球王国の成立にとって鉄器は琉球史上重要な役割を果たしたことがわかる。

『琉球の歴史』の著書で知られる仲原善忠は、その著書のなかで「石器を使用して貧弱な生活であった部落を解体させ、一種の社会革命をもたらした」と述べ、また鉄は利器として水田の開拓を拡大し部落は再編成され「従来の権威は転倒し、振興の支配階級である按司が出現してきた」として鉄導入の時期を沖縄歴史発展の大きな画期と捉えた。

このように鉄に関する事象は、沖縄の歴史の上で大きな意味を持ち、研究者の大きな課題にもなっている。ところが、沖縄での鉄器研究についてはいまだ緒についたばかりであり、これから研究に大き

な期待がかかっている。本稿では、鉄に関する諸論考を見ていく中でこれまでの研究成果についてみていくこととする。

鍛冶関連遺物の出土とその遺跡

ところで琉球史の発展にとって大切な論点である鉄関連の調査研究については、近年になってようやく緒についたばかりである。最近では、鍛冶関連遺物の出土例も増えてきており、鉄関連のことについては私が興味を持ちだした1960年代後半からすると、遺物の出土例や関連遺跡の発掘調査の進展は著しく、当時と比べるとまったく隔世の感がする。

県下の鍛冶関連遺物の出土例は、沖縄県立博物館が教育普及書作成のために調査した時期には（沖縄県立博物館『考古資料より見た 沖縄の鉄器文化』1997年3月発行）135遺跡確認されていたものが現在では、150遺跡に増えてきている。

本稿に収録した南西諸島における鉄関連遺物出土の文献一覧は、1996年沖縄県立博物館で筆者を中心とし上原久氏と仲間留美氏の3人でまとめた文献一覧に抜け落ちていたものを追補したものである。沖縄における鉄器研究の基礎資料にもなればということでここに収録することにした。

調査や研究状況について

1960年代の後半以降、今まで明瞭でなかった鍛冶関連の遺跡が各地で発見され、調査された遺跡と、その成果を収録した報告書や研究論文の数も増加の

※ 〒903-0823 那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館
Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan

※※ 現住所 〒903-0111 西原町字与那城309 グスク研究所
Present Address: Institute for Gusuku Sites Studies, 309, Yonashiro, Nishihara, Okinawa 903-0111, Japan

一途をたどっている（第1表参照）。鐵関連の学問研究については承知のようにいろいろな学問分野からのアプローチが可能であり、実際、個別の各専門分野においても数多くの研究成果が蓄積されてきている。さらに、考古学・歴史学・民族（俗）学・地理学・社会学・経済学などの人文社会科学系や冶金学・金属学・鉱物学・地質学などの自然科学系など学際的な研究も進められ、今日では目を見張るほどのすぐれた多くの研究成果が蓄積されつつあるといってよい。

沖縄県内で発掘された関連遺物の金属的調査については、筆者が高等学校に勤務していた1969年当時、同僚の化学の教諭に依頼して実施した伊原遺跡の鉄滓を分析してその成果を発表したのを嚆矢として、1976年の砂川元島遺跡の二次調査で大澤正己が行った鉄滓の科学的分析以降現在までおよそ40近い遺跡でその成果が報告されている。

筆者が同僚に依頼して試みた金属学的調査は、分析器具や装置がまったく不備だった時代の限られた条件下での成果であり、現在の分析結果から見ればまったくもって頼りないものであったが、その方法を沖縄で初めて実施したことでは何らかの意義があったものと思う。その後、鍛冶関連遺物の金属学的調査を精力的におこなってきたのは大澤正己氏である。氏には1978年の渡名喜島遺跡出土の鍛冶関連遺物の調査をお願いしてから今日まで数多くの沖縄出土の鉄滓や鉄器などの金属学的調査をお願いしてきた。その結果については逐次報告され、現在では大澤氏の働きによって数多くの成果が蓄積されつつある。

鉄器研究略史

沖縄の貝塚時代後期の遺跡から石斧を中心とする石器群の出土が極端に少なくなる事実から南西諸島における鉄器使用の開始を考えようとする意見もあるが、今のところ考古学的な出土遺物や遺跡などからはそのことを裏付ける決定打はない。しかし、前にも述べたように鉄に関連する考古学的資料は確実に増加の一途をたどっており、その金属学的調査も蓄積されるなど研究は確実に進展しているといえよう。次に沖縄における鉄関連研究の歴史について、刊行された書物や論文等を中心にしながら時系列で

見ていくことにしよう。

○多和田真淳の調査研究

考古学の視点からの鉄器研究は多和田真淳氏が先鞭をつける。多和田は琉球政府時代の文化財保護委員会に勤務し、1956年から1962年にかけて、奄美大島から沖縄本島および周辺離島、さらに宮古、八重山諸島をくまなく調査して考古学上の遺跡を数多く発見し、それを当時の琉球文化財保護委員会政府発行の文化財要覧に逐一報告した。遺跡の数は120余カ所にのぼる。多和田は、考古学だけでなく、文献資料である「おもろさうし」等にも造詣が深く、考古学やおもろなどの面から鉄関連のことについて考察を行っている。

多和田の論文は次のとおり。

- ・「琉球古代の鉄の輸入」『月刊 考古学ジャーナル』第14号 1967年
- ・「琉球古代の鉄の輸入（その2）」『月刊 考古学ジャーナル』第59号 1971年

○城間武松の研究

1968年、城間武松は金秀鉄工株式会社の創立20周年記念事業の一環として『鐵と琉球』を編集した。この書は沖縄の鉄に関することについて文献資料や伝承、民俗などいろいろな角度から取り上げている。考古学の立場からは、先にあげた多和田真淳の論考「琉球古代の鉄の輸入」を特別寄稿という形で収録している。鉄の研究論文集とはいえないが、まとまった鉄関連の書としては沖縄県で初めて刊行されたのものであり、しかもいろいろな分野からの資料が生に近い形で紹介されているので、伝承などが途絶つつある今日、貴重な書といえる。付録として第二次世界大戦後の鉄工業の概況として「スクラップブルーム」のことや鉄工業者の活躍および業者名簿などが掲載されている。さらに沖縄における鉄関連の歴史年表まで添えられていて研究者にとっては貴重なものとなっているが、限定出版のため今日では入手困難である。

- ・城間武松『鐵と琉球』金秀鉄工株式会社 1968年。

○新田重清の研究

1969年、新田は宇佐浜B貝塚から出土した遺物に

鉄滓が含まれていることを報告した。そのなかで新田は、沖縄における鉄器初現が弥生時代まで遡ることに言及する。当該貝塚は沖縄貝塚時代後期（弥生時代相当期）に属し、古い時代の鉄滓遺物として当時考古学研究者の間でも大きな話題を呼んだ。

- ・「最近の沖縄における考古学界の動向」『琉大史学』創刊号 1969年

○友寄英一郎の研究

1970年、友寄は沖縄の遺跡から出土する弥生土器を調査研究するなかで、沖縄における鉄器の移入や使用開始の時期を弥生相当期の貝塚時代後期と推定し主張した。

- ・「沖縄出土の弥生式土器」『琉球大学法文学部紀要 社会篇』第14号 1970年

○當眞嗣一の研究

1971年、當眞は沖縄本島南部糸満市の伊原遺跡に散布するおびただしい量の鉄滓を発見し、その量の多さと遺跡の広がりに圧倒された。その後、當眞は鉄関連の問題について鉄滓を出土する遺跡の面から接近し、沖縄における鉄器文化に言及した。當眞の論考は沖縄県内でのとくに鉄生産を問題にしたものであり、同僚の化学の先生に依頼して実施した鉄滓の定量分析表を使って鉄滓の性質を明らかにしたことと、鉄製品出土地地名表を掲載したことである。この地名表に載せられた鉄器例は21遺跡、鉄製品の種類は15点であった。

その後、當眞は、鍛冶炉と見られる遺構を伊波後原遺跡（1973）と宮古元島遺跡（1979）、浦添城跡（1982）等でも検出した。

また、1997年には沖縄県立博物館教育普及書作成のなかで、沖縄の鉄器文化について考古資料の研究成果の集大成をおこなった。

- ・「沖縄における鉄滓遺跡と鉄器の諸問題」『琉球史学』第2号 1971年。
- ・『考古資料よりみた 沖縄の鉄器文化』沖縄県立博物館 1997年。

○砂川元島遺跡発掘調査団による鍛冶遺構の検出と鉄滓の科学的分析調査

1975年の12月、青山学院大学の砂川元島遺跡発掘

調査団は砂川元島の第二次調査で鉄滓が多量に散布する場所を発掘し、鍛冶遺構の円形の炉床跡を発見した。炉壁は高さ6cm、幅12cm、内径60cm程のものであった。炉跡の周辺から鉄滓や鉄製品の破片が発見された。鉄滓の分析は大澤正己が実施し、その成果は砂川元島遺跡発掘調査（第二次）の報告書にまとめられている。分析を担当した大澤は、分析結果の「まとめ」で「鍛冶遺跡としての裏付けになり、また鍛冶屋敷の呼名も残っていることから、年代もさほど古くはならないであろう。（中略）今回の調査鉄滓の外観から考えても近世のものではないかと考えられる」と述べている。本格的な鍛冶炉の発掘と鉄滓遺跡の化学的分析調査は沖縄県で初めてのことであった。

1977年3月、青山学院大学のヤマバレー遺跡発掘調査団は石垣市川平に所在するヤマバレー遺跡の第2次調査を実施し、鍛冶炉の遺構と鍛冶工房跡を検出した。炉床の規模は径70cm、周囲を石で囲い、炉床が掘りこまれている。砂川元島との比較では炉の径はほとんど同じだが、周囲が石で囲まれ、炉床が掘り込まれている点に違いがある。遺跡となったこの村落は、14世紀から15世紀にかけて繁栄し、16世紀中頃に終末を迎えたと報告書は記している。この遺跡から出土した遺物の金属学的調査は実施されていない。

- ・『砂川元島遺跡発掘調査概報（第二次）』砂川元島遺跡発掘調査団・青山学院大学 1976・
- ・『沖縄・石垣島ヤマバレー遺跡第2次発掘調査概報』ヤマバレー遺跡調査団・青山学院大学 1980。

○古波津清昇の研究

1983年、古波津清昇は『沖縄産業史～自立経済の道を求めて～』を著した。その第一章で、「古代の琉球と鉄」という章をおき、沖縄の鉄や鍛冶屋のことについて紹介している。このなかで伊原遺跡や浦添城跡、宮古八重山から得られた鉄滓の金属学的調査を窪田蔵郎氏に依頼し、その成果などについて紹介している。そのなかで古波津は、「古代琉球における鉄の生産は試作程度のことはあったとしても、実用に供する程の経済生産がなされたとは考えられない（略）鍛冶技術はかなり進んでいたものと思わ

れる。それは窪田氏も述べているとおり鍋釜の破片を集め、鉄から脱炭して鋼に変える技術があつたかもしれないことが、伊原遺跡の鍛冶溝から推察されているからである」と述べている。

- ・古波津清昇『沖縄産業史～自立経済の道を求めて～』文教図書 1983年。

○福地曠昭の鍛冶屋の調査

沖縄県下各地域を調査し、鍛冶工たちの体験・証言などを精力的に聞き取り調査し、その成果を『沖縄の鍛冶屋』として刊行した。

- ・福地曠昭『沖縄の鍛冶屋』海風社 1989年。

○朝岡康二の研究

1991年2月、朝岡は『南島鉄器文化の研究』を著した。朝岡は鉄器加工（鉄製農具の生産と修理再生）に関わる習俗とそれを担うところの鍛冶職人の技術的な側面の調査研究を通して、日本の伝承的社會における職人と農耕村落との民俗的な相互関係を追求した研究者である。本書は朝岡のライフワークとしての南島におけるそれであり、四年間における沖縄勤務の間に沖縄本島各地域や離島などをくまなくまわり研究した成果を刊行した書であって、沖縄の個別研究の上で近年にない研究成果の一つといえる。

- ・朝岡康二『南島鉄器文化の研究』 溪水社 1991。

○大澤正己による金属学的調査と研究

前述したように大澤は、鉄器や鉄滓などの鉄関連遺物の科学的分析から沖縄の鉄についていろいろと言及している。大澤が分析した関連遺物の金属学的調査は、宮古島の砂川元島の調査以降36余の遺跡において今日では沖縄における鉄器文化の研究に大きな役割を果たしている。大澤が発表した事例は第2表の通りである。

○大城慧の研究

1980年代に入ると沖縄各地で開発に伴う発掘調査が頻繁に行われ、それに伴い鉄関連の遺構や遺物も増加してきている。そういう状況のなかで考古学研究の分野から沖縄鉄器文化を追求しているのが大城である。大城は、グスクから出土した鉄器や鉄滓な

どの遺物の出土地名表をまとめ、さらに鉄関連遺物の集成を行う一方、グスク時代の鉄器文化の様相を鉄器製作の技術的発展段階として捉えるなど勢力的な調査研究を展開している。

- ・「沖縄における鉄関連遺跡と鉄器資料について」(1983)、「沖縄の鉄」(1986)、沖縄グスク時代遺跡出土鉄器・鉄滓出土地名表」(1990)、「沖縄の鉄とその特質」(1997)、「沖縄考古学における鉄器研究の現状と課題」(2004)など、多くの論文を発表している。

研究の成果と今後の課題

鉄および鉄器関連のこれまでの研究成果についてまとめる概ねつぎのとおりである。

1. 沖縄での鉄器使用の開始時期は、宇堅貝塚から出土した板状鉄斧や中川原貝塚出土の袋状鉄斧などの例から沖縄貝塚時代の後期、つまり弥生時代の後期が想定される。
2. 鉄斧などの製品と鉄器の素材どれが先に入ったかといえば製品が先に入ったと考えられる。
3. 宇堅貝塚出土の板状鉄斧は鉱石系の鉄素材が考えられ大陸産と思われる。
4. これまでの鉄関連の遺物や考古学上の遺構および関連遺物の金属学的調査などから鉄生産の主体は鍛冶技術であった。つまり自前の鉄は生産しなかった。ただ、我謝遺跡や浦添城跡出土の鉄滓の一部で高チタン砂鉄系を原料としており、また、牧港貝塚、後兼久遺跡では砂鉄も出土しているので今後の研究がまたれる。
5. 鍛冶溝には、鉱石系と砂鉄系が共存して存在している。その入手先を特定していく作業は今後の大きな課題になっている。
6. グスク時代には大鍛冶や小鍛冶が存在し、材料鉄の輸入を前提とする鍛冶技術の発達が認められるが、その体系化が強く望まれる。
7. 各地のグスクや鉄関連遺跡から鍛冶溝と鉄鍋破片および板状鉄、棒状鉄などが共伴する事実などから、グスク時代にあっては材料鉄から製品を作り上げる技術や鉄鍋等の破片をリサイクルする修理再生加工技術などがかなり発達していたことがわかる。

「南西諸島における鉄関連遺物出土」 文献一覧
(1996年12月現在)

宇佐浜貝塚B地点

多和田眞淳「琉球古代の鉄の輸入（その二）」『考古学ジャーナル』No.59 1971

根謝銘グスク

『大宜味村の遺跡』大宜味村文化財調査報告書第2集 大宜味村教育委員会 1984.3.20

今帰仁城跡

『今帰仁城跡発掘調査報告I』今帰仁村文化財調査報告第9集 今帰仁村教育委員会 1983.3.31

兼次古島遺跡

『今帰仁村の遺跡』今帰仁村文化財調査報告書第10号 今帰仁村教育委員会 1984.3.25

仲尾次貝塚

「今帰仁村の先史時代」『今帰仁村史』今帰仁村役場 1975.7.1

『今帰仁村の遺跡』今帰仁村文化財調査報告書第10号 今帰仁村教育委員会 1984.3.25

平敷ウガン遺跡

『今帰仁村の遺跡』今帰仁村文化財調査報告書第10号 今帰仁村教育委員会 1984.3.25

謝名遺跡

『今帰仁村の遺跡』今帰仁村文化財調査報告書第10号 今帰仁村教育委員会 1984.3.25

ウンジョウハイ遺跡

『今帰仁村の遺跡』今帰仁村文化財調査報告書第10号 今帰仁村教育委員会 1984.3.25

古宇利原遺跡

『古宇利原遺跡発掘調査報告書』今帰仁村文化財調査報告書第8集 今帰仁村教育委員会 1983.3.31

瀬底貝塚

嵩元政秀「グシクについての試論」『琉大史学』創刊号 琉球大学史学会1969.8.23

多和田眞淳「琉球古代の鉄の輸入（その一）」『考古学ジャーナル』No.14 1967

屋我グスク

『名護市の遺跡(2)』名護市文化財調査報告-4
名護市教育委員会 1982.3.25

フガヤ遺跡

『フガヤ遺跡・田井等遺跡・羽地間切番所跡遺跡・仲尾次上グシク遺跡』名護市文化財調査報告-8

名護市教育委員会 1988.3.30

宇茂佐古島遺跡

『宇茂佐古島遺跡』名護市文化財調査報告-10
名護市教育委員会 1992.3.31

松田遺跡

『松田遺跡』沖縄県文化財調査報告書第76集
沖縄県教育委員会 1986.3.24

前原第2遺跡

『前原第2遺跡』宜野座村乃文化財12 1993.3.30
クジチ墓跡

『宜野座村乃文化財(6)』宜野座村教育委員会
1988.3.20

ウェーヌアタイ遺跡

『漢那ウェーヌアタイ遺跡』宜野座村乃文化財
(9) 宜野座村教育委員会 1990.3.31

漢那ヌカンジャー屋跡

『宜野座村乃文化財(I)』宜野座村教育委員会
1981.3.20

漢那福地川水田遺跡

『漢那福地川水田遺跡』宜野座村乃文化財10・11
1993.3.31

金武グスク

大城慧「沖縄グスク時代鉄器・鉄滓出土地地名表」
『文化課紀要』第6号 沖縄県教育委員会 1990.3

熱田貝塚

『恩納村熱田貝塚発掘調査ニュース』沖縄県教育
委員会 1978.3.30

山田グスク

『山田グスク』恩納村教育委員会 1990.6

吹出原遺跡

『吹出原遺跡』読谷村文化財調査報告書第9集
読谷村教育委員会 1990.3.25

座喜味城跡

『座喜味城跡-環境整備事業報告書(II)-』読谷村
教育委員会 1986.3

伊波後原遺跡

當真嗣一「石川市伊波後原遺跡調査概報」『南島
考古』第4号 沖縄考古学会 1975.9.21

伊波グスク

嵩元政秀「グシクについての試論」『琉大史学』
創刊号 琉球大学史学会1969.8.23

- 伊波城跡北西遺跡
『伊波城跡北西遺跡』石川市文化財調査報告書
石川市教育委員会 1996.3.31
- 古我地原内古墓遺跡
『古我地原内古墓』沖縄県文化財調査報告書第85集 沖縄県教育委員会 1987.12.25
- 宇堅貝塚
『宇堅貝塚群・アカジャンガ一貝塚』具志川市教育委員会 1980.3.30
『宇堅貝塚出土の青銅品』『南島考古だより』第42号 1990.6.20
『具志川市の文化財』第1集 具志川市教育委員会 1991.2.8
- 具志川グスク
『具志川グスク発掘調査展』展示会パンフレット 具志川市教育委員会 1996.3
- 喜屋武マープ遺跡
大城慧「沖縄グスク時代鉄器・鉄滓出土地地名表」
『文化課紀要』第6号 沖縄県教育委員会 1990.3
- 平安座貝塚
多和田眞淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」
『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会 1956.6.15
- 浜貝塚
『勝連町の遺跡』勝連町の文化財第17集 勝連町教育委員会 1993.3
- 平敷屋トウバル遺跡
『平敷屋トウバル遺跡』沖縄県文化財調査報告書第125集 沖縄県教育委員会 1996.3.29
- 平敷屋古島遺跡
『平敷屋古島遺跡』勝連町の文化財第13集 勝連町教育委員会 1991.3
- 南風原古島遺跡
『勝連町の遺跡』勝連町の文化財第17集 勝連町教育委員会 1993.3
- 勝連城跡
『琉球文化財調査報告書』琉球政府文化財保護委員会 1965.6.30
『琉球文化財調査報告書』琉球政府文化財保護委員会 1966.11.30
『勝連城跡』勝連町の文化財第5集 勝連町教育委員会 1983.3.18
- 『勝連城跡』勝連町の文化財第6集 勝連町教育委員会 1984.3.19
『勝連城跡』勝連町の文化財第11集 勝連町教育委員会 1990.3
- 勝連北貝塚
『琉球文化財調査報告書』琉球政府文化財保護委員会 1966.11.30
『勝連町の遺跡』勝連町の文化財第17集 勝連町教育委員会 1993.3
『勝連城跡』勝連町の文化財第11集 勝連町教育委員会 1990.3
- 勝連南貝塚
『琉球文化財調査報告書』琉球政府文化財保護委員会 1966.11.30
『勝連城跡』勝連町の文化財第6集 勝連町教育委員会 1984.3.19
『勝連町の遺跡』勝連町の文化財第17集 勝連町教育委員会 1993.3
- 越來グスク
『ぐすく-グスク分布調査報告(I)・沖縄本島及び周辺離島-』沖縄県文化財調査報告書第53集 沖縄県教育委員会 1983.3.31
『沖縄市の埋蔵文化財』沖縄市文化財調査報告書第4集 沖縄市教育委員会 1982.3.25
『越來城』沖縄市文化財調査報告書第11集 沖縄市教育委員会 1988.3.31
- 仲宗根貝塚
『仲宗根貝塚』沖縄県文化財調査報告書第33集 沖縄県教育委員会 1980.3.31
- 比屋根遺跡
『沖縄市の埋蔵文化財』沖縄市文化財調査報告書第4集 沖縄市教育委員会 1982.3.25
- 渡口洞穴遺物散布地
多和田眞淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」
『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会 1956.6.15
- ヒニグスク
『琉球文化財調査報告書』琉球政府文化財保護委員会 1966.11.30
- 石嶺坂石敷道
『石嶺坂石敷道』沖縄県文化財調査報告書第80集 沖縄県教育委員会 1986.3.31

新垣グスク

『中城村の遺跡』 中城村の文化財第3集 中城村
教育委員会 1992.3.31

上津波遺跡

『中城村の遺跡』 中城村の文化財第3集 中城村
教育委員会 1992.3.31

屋宜平原遺跡

『中城村の遺跡』 中城村の文化財第3集 中城村
教育委員会 1992.3.31

屋良グスク

『掘り出された沖縄の歴史-発掘調査10年の成果-』
沖縄県教育委員会 1982.2.14

『屋良グスク』 嘉手納町文化財調査報告書第1集
嘉手納町教育委員会 1994.3.31

砂辺サーク原遺跡

『砂辺サーク原遺跡』 沖縄県文化財調査報告書第
81集 沖縄県教育委員会 1987.3.30

クマヤ一洞穴遺跡

『北谷町の遺跡』 北谷町文化財調査報告書第14集
北谷町教育委員会 1994.3.30

北谷グスク

『北谷城-北谷城第一次調査-』 北谷町文化財調査
報告書第1集 北谷町教育委員会 1984.3.31

『北谷城-北谷城第六次調査-』 北谷町文化財調査
報告書第11集 北谷町教育委員会 1991.3.31

『北谷城-北谷城第七次調査-』 北谷町文化財調査
報告書第12集 北谷町教育委員会 1992.3.30

北谷城第7遺跡

『北谷城第7遺跡』 北谷町文化財調査報告書第2
集 北谷町教育委員会 1985.3.31

安仁屋トウンヤマ遺跡

『安仁屋トウンヤマ遺跡』 沖縄県文化財調査報告
書第105集 沖縄県教育委員会 1992.3.31

喜友名山川原第6遺跡

『喜友名遺跡群』 宜野湾市文化財調査報告書第5
集 宜野湾市教育委員会 1984.3.35

大山富盛原第一遺跡

『大山富盛原第一遺跡』 宜野湾市文化財調査報告
書第22集 宜野湾市教育委員会 1996.3.29

奥間ノロ墓

『奥間ノロ墓』 宜野湾市文化財調査報告書第24集
宜野湾市教育委員会 1996.3.25

牧港貝塚（第二地区）

『牧港貝塚・真久原遺跡』 沖縄県文化財調査報告
書第65集 沖縄県教育委員会 1985.3.31

真久原遺跡

『牧港貝塚・真久原遺跡』 沖縄県文化財調査報告
書第65集 沖縄県教育委員会 1985.3.31

拝山遺跡

『拝山遺跡』 沖縄県文化財調査報告書第83集 沖
縄県教育委員会 1987.9.20

浦添城跡

『浦添城跡第二次発掘調査概報』 浦添市文化財調
査報告書第6集 浦添市教育委員会 1984.3

『浦添城跡発掘調査報告書』 浦添市文化財調査報
告書第9集 浦添市教育委員会 1985.3

内間グスク

『うらそえの文化財』 浦添市文化財調査報告書第
1集 浦添市教育委員会 1980.3

『ぐすぐ-グスク分布調査報告(I)・沖縄本島及び
周辺離島-』 沖縄県文化財調査報告書第53集
沖縄県教育委員会 1983.3.31

我謝遺跡

『掘り出された沖縄の歴史-発掘調査10年の成果-』
沖縄県教育委員会 1982.2.14

『我謝遺跡』 西原町文化財調査報告書第4集 西
原町教育委員会 1982.3

『我謝遺跡』 西原町文化財調査報告書第5集 西
原町教育委員会 1983

『ぐすぐ-グスク分布調査報告(I)・沖縄本島及び
周辺離島-』 沖縄県文化財調査報告書第53集
沖縄県教育委員会 1983.3.31

銘苅遺跡

嵩元政秀「グシクについての試論」『琉大史学』
創刊号 琉球大学史学会 1969.8.23

ヒヤジョー毛遺跡

『ヒヤジョー毛遺跡』 那覇市文化財調査報告書第
26集 那覇市教育委員会 1994.3.15

崇元寺跡

『崇元寺跡』 那覇市教育委員会 1983.3

首里城跡

「平安時代の遺物?-琉大構内から剣出土-」 沖縄
タイムス 1967.5.17

「両刃の古剣を発見-首里城-」 琉球新報 1967.5.17

- 『ぐすぐ-グスク分布調査報告(I)・沖縄本島及び周辺離島-』沖縄県文化財調査報告書第53集
沖縄県教育委員会 1983.3.31
- 『旧首里城正殿跡位置確認調査報告書』沖縄県教育委員会 1986.3.28
- 『首里城跡』沖縄県文化財調査報告書第88集 沖縄県教育委員会 1988.3
- 『首里城-南殿・北殿の遺構調査報告書-』沖縄県文化財調査報告書第120集 沖縄県教育委員会 1995.3
- 中城御殿跡**
- 『旧中城御殿-第一次調査-』沖縄県立博物館 1993.3
- 『旧中城御殿-第二次調査-』沖縄県立博物館 1994.3
- 『旧中城御殿-第三次調査-』沖縄県立博物館 1995.3
- 御細工所跡**
- 『御細工所跡』那覇市文化財調査報告書第18集
那覇市教育委員会 1991.3.31
- 識名園跡**
- 『名勝識名園環境整備事業報告書(1)』名勝識名園環境整備委員会 1977.3
- 那崎原遺跡**
- 『那崎原遺跡』那覇市文化財調査報告書第30集
那覇市教育委員会 1996.3.87
- 長嶺グスク『豊見城村の遺跡』豊見城村文化財調査報告書第3集 豊見城村教育委員会 1988.3.31
- 饒波カニマン遺跡**
- 『豊見城村の遺跡』豊見城村文化財調査報告書第3集 豊見城村教育委員会 1988.3.31
- 豊見城原遺物散布地**
- 『豊見城村の遺跡』豊見城村文化財調査報告書第3集 豊見城村教育委員会 1988.3.31
- 伊良波東遺跡**
- 『伊良波東遺跡』豊見城村文化財調査報告書第2集 豊見城村教育委員会 1987
- 瀬長グスク**
- 『ぐすぐ-グスク分布調査報告(I)・沖縄本島及び周辺離島-』沖縄県文化財調査報告書第53集
沖縄県教育委員会 1983.3.31
- 平良グスク**
- 『豊高郷土史』第2号 豊見城高等学校郷土史研究クラブ 1969.3
- 『ぐすぐ-グスク分布調査報告(I)・沖縄本島及び周辺離島-』沖縄県文化財調査報告書第53集
沖縄県教育委員会 1983.3.31
- 『豊見城村の遺跡』豊見城村文化財調査報告書第3集 豊見城村教育委員会 1988.3.31
- 高嶺古島遺跡**
- 『高嶺古島遺跡』豊見城村文化財調査報告書第4集 豊見城村教育委員会 1990.3.31
- 保栄茂後原遺跡**
- 『豊見城村の遺跡』豊見城村文化財調査報告書第3集 豊見城村教育委員会 1988.3.31
- 保栄茂グスク**
- 『豊見城村の遺跡』豊見城村文化財調査報告書第3集 豊見城村教育委員会 1988.3.31
- 津嘉山古島遺跡**
- 『南風原町の遺跡』南風原町文化財調査報告書第1集 南風原町教育委員会 1993.3.31
- クニンドー遺跡**
- 『クニンドー遺跡』南風原町文化財調査報告書第2集 南風原町教育委員会 1996.3.29
- 安平田遺跡**
- 『南風原町の遺跡』南風原町文化財調査報告書第1集 南風原町教育委員会 1993.3.31
- 宮平遺跡**
- 『昔はじまりや-南風原村宮平遺跡発掘調査報告-』1号 琉球考古学研究会 1975.6.15
- 御宿井遺跡**
- 『南風原町の遺跡』南風原町文化財調査報告書第1集 南風原町教育委員会 1993.3.31
- 大里グスク**
- 『大里村の遺跡』大里村文化財調査報告書第1集 大里村教育委員会 1992.3
- 稻福遺跡**
- 『稻福村落-稻福村落第一次調査報告書-』琉球大学考古学研究会 1971.9.1
- 『稻福遺跡』稻福遺跡考古資料館 琉球考古学研究会編 1974.1
- 『稻福遺跡発掘調査報告書(上御願地区)』沖縄県文化財調査報告書第50集 沖縄県教育委員会

- 1983.3.31
大城グスク
『豊高郷土史』第2号 豊見城高等学校郷土史研究クラブ 1969.3
當眞嗣一「沖縄における鉄滓遺跡と鉄器の諸問題について」『琉大史学』第2号 琉球大学史学会 1971.6.30
佐敷グスク
『佐敷グスク』佐敷町教育委員会 1980.3
糸数城跡
『糸数城跡』玉城村文化財調査報告書第1集 玉城村教育委員会 1991.3
玉城グスク
當眞嗣一「沖縄における鉄滓遺跡と鉄器の諸問題について」『琉大史学』第2号 琉球大学史学会 1971.6.30
ジリグスク
大城慧「沖縄グスク時代鉄器・鉄滓出土地地名表」『文化課紀要』第6号 沖縄県教育委員会 1990.3
八重瀬グスク
『八重瀬グスク』東平風町文化財調査報告書第1集 東平風町教育委員会 1979.3.31
具志頭グスク
『具志頭村の遺跡』具志頭村文化財調査報告書第3集 具志頭村教育委員会 1986.3.31
玻名城古島遺跡
『具志頭村の遺跡』具志頭村文化財調査報告書第3集 具志頭村教育委員会 1986.3.31
阿波根古島遺跡
『阿波根古島遺跡』沖縄県文化財調査報告書第96集 沖縄県教育委員会 1990.3.31
南山グスク
『糸満市の遺跡』糸満市文化財調査報告書第1集 糸満市教育委員会 1981.3.20
『南山城跡第一次緊急発掘調査概要』糸満市教育委員会 1984.5.31
川田原貝塚
「鉄の起源は西暦300年-多和田氏900年説を訂正-」沖縄タイムス 1971.1.27
「沖縄の鉄精錬は起源三百年-川田原貝塚から鉄くず-」琉球新報 1971.1.27
多和田眞淳「琉球古代の鉄の輸入（その二）」『考古学ジャーナル』No.59 1971.
フェンサグスク
『フェンサ城貝塚調査概報』『法文学部紀要』琉球大学法文学部 1969.4.1
伊原遺跡
『伊原遺跡』沖縄県文化財調査報告書第73集 沖縄県教育委員会 1986.3.31
佐慶グスク
『佐慶グスク・山城古島遺跡』糸満市文化財調査報告書第8集 糸満市教育委員会 1994.3
里東原遺跡
『里東原遺跡』糸満市文化財調査報告書第10集 糸満市教育委員会 1995.3.31
里遺跡
『渡名喜島の遺跡』『県立博物館総合調査報告書II』沖縄県立博物館 1981.3.31
具志川グスク大澤正己
「渡名喜島遺跡発見の鉄滓について-沖縄県下出土の鉄滓の調査-」『渡名喜島の遺跡I』渡名喜村教育委員会 1979.3.31
『ぐすく-グスク分布調査報告(I)・沖縄本島及び周辺離島-』沖縄県文化財調査報告書第53集 沖縄県教育委員会 1983.3.31
清水貝塚
『清水貝塚』具志川村文化財調査報告書第1集 具志川村教育委員会 1989.3.31
久米島下地原洞遺跡
上江洲均「久米島下地原洞収集の鍬先について」『沖縄県立博物館紀要』第6号 沖縄県立博物館 1980.3.31
狩俣遺跡
「宮古島狩俣の製鉄遺跡」『郷土』第9号 沖縄大學 1970.12
オイオキ原遺跡
『ぐすく-グスク分布調査報告(II)・宮古諸島-』沖縄県文化財調査報告書第94集 沖縄県教育委員会 1983.3.31
上の頂遺跡
「上の頂（ウイヌツズ）遺跡調査概報」『琉大史学』第4号 琉球大学史学会 1973.6.20
『ぐすく-グスク分布調査報告(II)・宮古諸島-』沖縄県文化財調査報告書第94集 沖縄県教育委員会

- 会 1983.3.31
- 住屋遺跡
『宮古平良市住屋遺跡緊急発掘調査報告』沖縄県文化財調査報告書第39集 沖縄県教育委員会 1981.3.30
『住屋遺跡（俗称・尻間）発掘調査報告』平良市教育委員会 1983.3.31
『住屋遺跡』平良市文化財調査報告書第2集 平良市教育委員会 1992.3
- ミズマ御嶽遺跡
『宮古の遺跡』沖縄県文化財調査報告第54集 沖縄県教育委員会 1983.3
- 与那覇遺跡
『宮古の遺跡』沖縄県文化財調査報告第54集 沖縄県教育委員会 1983.3
- 宮国元島遺跡
『宮国元島』上野村教育委員会 1980.3
- 新里元島遺跡
『宮古の遺跡』沖縄県文化財調査報告書第54集 沖縄県教育委員会 1983.3
- 砂川元島遺跡
『砂川元島遺跡発掘調査概報』（一次）砂川元島遺跡発掘調査団（青山学院大学）1975.3.31
『砂川元島遺跡発掘調査概報』（二次）砂川元島遺跡発掘調査団（青山学院大学）1976.3.31
『砂川元島』城辺町文化財調査報告第4集 城辺町教育委員会 1989.3
- 友利元島遺跡
大城慧「沖縄グスク時代鉄器・鉄滓出土地地名表」
『文化課紀要』第6号 沖縄県教育委員会 1990.3
- 高腰グスク
『高腰城跡』城辺町文化財調査報告書5集 城辺町教育委員会 1989.3.31
- 仲筋貝塚
『仲筋貝塚発掘調査報告』仲筋貝塚発掘調査団 1981.7.1
- ヤマバレー遺跡
『沖縄・石垣島ヤマバレー遺跡発掘調査概報』ヤマバレー遺跡調査団（青山学院大学）1977.3.30
『沖縄・石垣島ヤマバレー遺跡第2次発掘調査概報』ヤマバレー遺跡調査団（青山学院大学）1980.7.31
- 桃里恩田遺跡
『桃里恩田遺跡発掘調査ニュース』石垣市教育委員会 1981.7.13
『桃里恩田遺跡』石垣市文化財調査報告書第5号 石垣市教育委員会 1982.3
- カンドウ原遺跡
『カンドウ原遺跡緊急発掘調査ニュース-1977年度-』沖縄県教育委員会 1978.3.30
『カンドウ原遺跡発掘調査報告（I）』沖縄県文化財調査報告書第49集 沖縄県教育委員会 1983.3.31
『カンドウ原遺跡』沖縄県文化財調査報告書第58集 沖縄県教育委員会 1984.3.31
- フルスト原遺跡
『フルスト原遺跡発掘調査概要』石垣市教育委員会 1983.3
『フルスト原遺跡発掘調査報告書』石垣市文化財調査報告書第7号 1984.3
- 平得仲本御嶽遺跡
『八重山石垣島平得仲本御嶽遺跡発掘調査報告』沖縄県文化財調査報告第3集 沖縄県教育委員会 1976.3.31
- 山原貝塚
『八重山の考古学』『沖縄・八重山』溝口宏編 1960.7.10
- 新里村遺跡
1986～1987年にかけて沖縄県教育委員会により発掘調査
大城慧「沖縄グスク時代鉄器・鉄滓出土地地名表」
『文化課紀要』第6号 沖縄県教育委員会 1990.3
- カイジ浜貝塚
『カイジ浜貝塚』沖縄県文化財調査報告書第115集 沖縄県教育委員会 1994.3.31
- 成屋遺跡
『竹富町・与那国町の遺跡』沖縄県文化財調査報告書第29集 沖縄県教育委員会 1980.3.31
「西表・成屋遺跡発掘調査概報」『青山史学』第9号 1987.3
- 上村遺跡
『上村遺跡』沖縄県文化財調査報告書第98集 沖縄県教育委員会 1991.3

鳩間島中森貝塚

「八重山鳩間島中森貝塚発掘概報」『文化財要覧』
琉球政府文化財保護委員会 1959.6.30

船浦スラ所跡

『船浦スラ所跡』 沖縄県文化財調査報告書第101
集 沖縄県教育委員会 1991.3

船浦貝塚

「鉄ノミなど発見-西表の船浦貝塚から-」 沖縄タ
イムス 1973.8.25

大城慧「沖縄グスク時代鉄器・鉄滓出土地地名表」

『文化課紀要』第6号 沖縄県教育委員会 1990.3

与那良遺跡

『与那良遺跡発掘調査概報』 与那良遺跡発掘調査
団 1982

仲間第一貝塚

多和田眞淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」
『文化財要覧』 琉球政府文化財保護委員会 1956.
6.15

与那原遺跡

『与那原遺跡』 与那国町文化財調査報告書第2集
与那国町教育委員会 1988.3.31

大泊浜貝塚

『下田原貝塚・大泊浜貝塚』 沖縄県文化財調査報
告書第74集 沖縄県教育委員会 1986.3.31

浦添貝塚 —第一・二次発掘調査のまとめ—

新田重清¹⁾・比嘉賀盛²⁾・島袋春美³⁾・仲座久宜⁴⁾

Report on the Excavation of Urasoe Shell Mound

Jyusei NITTA¹⁾, Yoshimori HIGA²⁾, Harumi SHIMABUKURO³⁾ and Hisayoshi NAKAZA⁴⁾

はじめに

浦添貝塚出土資料は、1972（昭和47）～1977（昭和52）年まで、沖縄県立博物館の考古担当学芸員として在籍していた新田重清が、前任地の浦添高等学校において教鞭を執る傍ら、同校の郷土史研究クラブ活動の一環として得た調査資料のひとつである。本資料は、新田が博物館に赴任して以来、今日まで当館の地下収蔵庫に学芸資料として保管され、一部資料については常設展示されてきた。

その他、当クラブの活動により得られた資料には、浦添城跡をはじめ浦添市内の数遺跡で採集された資料のほか、知念村クルク原遺跡の資料がある。これらの資料は、1972（昭和47）年の本土復帰前に得られた貴重なもので、中にはその後の開発等により壊滅し、現在では確認が困難な仲西貝塚・沢戸遺跡等の資料や、浦添貝塚のように遺跡が史跡指定・現地保存の理由となった資料も含まれる。

県立博物館では、当クラブの活動及び調査資料の重要性を鑑み、何らかの形で順次報告を進めていく計画にしており、はじめに浦添貝塚調査資料について整理・報告を行うことになった。

なお、この浦添貝塚の調査成果については、かつて同クラブが発行した機関誌『うらおそい』において、考古班の部員により概要がまとめられたほか（喜屋武ほか1970）、続いて新田により各種学会誌において、調査概要とともに市来式土器出土の意義についても論ぜられた（新田1970・1971）。しかし、これらの報告は時間及び紙幅の制約により、代表的

資料の報告にとどまっていた。

今報告はこれらの論考を基礎として、当時の日誌・メモ類の情報をも付加して構成されるが、その前提として、調査から35年あまりが経過し、その間に県内で実施された発掘調査・研究及び新たな分析法により多くの情報を得ることが可能になったことで、現時点での視点・解釈から再度整理・報告を行う目的で作業を進めた。なお、編集作業は2005（平成17）年2月から、当時の関係者で構成される「うらおそい会」により数回にわたる会合を設け、編集を行ってきたものである。

出土資料の中でも人工遺物については、各執筆担当者により再度実測・撮影・集計が行われ、出土資料の大半を占める貝類については、収蔵資料整理作業の一環として、考古資料整理作業員により分類・計測・集計が行われた。

なお、本資料は調査から35年あまりが経過していることから、資料収納袋が劣化により破損し、一部の資料が他のコンテナに散逸した状態であったが、今回新たに袋詰めがされ、散逸資料に関しても捜索後は注記・種別ごとに収納を行った。これらの資料は今後、展示会や研究資料として内外に公開し、活用していく予定である。

本稿をまとめるにあたり、潮平寛一、津波吉聰、宮城朝光、宜保久技の各氏より資料の提供及び助言を得た。資料整理作業にあたっては、石器の石質同定は大城逸朗氏に、人骨の同定・分析は土肥直美氏に依頼した。また、貝類遺体の分類、計測、集計及

1～4) 沖縄考古学会

Okinawa Archaeological Society

4) 〒903-0823 那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館

Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan

び袋詰め作業は、友利映子、徳村笑里子の両氏に協力していただいた。記して感謝申し上げたい。

調査に至る経緯・経過

浦添貝塚は1959（昭和34）年11月8日に、当時興南高校の教員であった嵩元政秀により発見された遺跡で、翌1960（昭和35）年には、多和田真淳により琉球政府文化財要覧の中で紹介されている（多和田1960）。

その後、浦添貝塚は琉球政府立浦添高等学校の郷土史研究クラブにより、1969（昭和44）年5月3日に表面踏査が実施され、土器や貝製品が採取された。また、その際に遺跡の一部が自然崩壊の危機に瀕していることが確認されたため、同クラブは琉球政府文化財保護委員会の許可を得て、同年8月10日～14日の日程で、浦添高校を宿舎とした合宿形式による試掘調査を実施した（図版14～17）。

その際、発掘道具などの機材はクラブ顧問である新田の自家用車に積み込んで運搬したが、部員である学生は片道約3kmの調査地までの道のりを徒歩で往復していた。

第一次調査は、北西から南東に連なる崖の下端に沿い、1m四方のグリッド合計4ヶ所について発掘を実施した（第2図）。その結果、貝塚の基本層位が把握されるとともに、数種の有文土器や貝・骨製品等の出土遺物を得ることができた。この成果は、同クラブ機關誌『うらおそい』創刊号（喜屋武ほか1970）において、仲西貝塚、浦添城跡の調査成果とともに報告が行われたほか、『南島考古』創刊号にも掲載された（新田1970）。しかし、調査は5日間と短期間であったことから、遺跡の性格を把握するに至らず、翌年に第二次調査を実施することとした。

第二次調査は、1970（昭和45）年7月21日～27日の日程で実施した。今回の調査実習は伊祖公民館を宿舎として合宿を行った（図版18～21）。

調査地点は第一次調査時の地点を基準として、その南東側に第0ピット、北西側に第3～5ピットを設定し、15cmごとの深度で掘り下げを行った。その結果、主体となる土器は第一次調査と同様な構成を見たが、第4ピット第II層下部より、南九州を中心に分布する市来式土器が出土した。この発見は、沖縄初の九州との文化的交流を実証する資料として、

調査直後に新聞報道も行われ注目された（沖縄タイムス社・琉球新報社1970）。また、この成果は市来式土器を中心に『古代文化』にて概要が報告された（新田1971）。この市来式土器の出土により、沖縄土器編年の位置付けが明確さを増し、その作業は加速度的に進展することとなった。

浦添貝塚の保存に至る経過

ちょうどこの時期、沖縄では日本復帰に先行した各種開発が盛んに行われ、多くの遺跡が壊滅の危機にさらされていた。浦添貝塚についても、立地する丘陵全体が削平され、現国道330号線浦添バイパスが建設される計画が浮上していた。

この事態を憂慮した沖縄考古学会では、理事会において貝塚の保存を要請していくことを採択し、保存に向けた運動を展開していった。はじめに、友寄英一郎会長及び新田らが琉球政府文教局、文化財保護委員会、建設局、立法院事務局、立法院文教厚生委員会に赴き、浦添貝塚出土の市来式土器が、九州との交流を物語る貴重な資料であること、さらにこの土器から遺跡の年代が判明したこと、浦添貝塚が研究史的意義を持つ重要な標式遺跡であることを説明した上で、保存要請を行った。

また、貝塚上部の高御墓関係者とも連携し、墓とともに保存要請を行うことを確認しあい、マスコミも新聞紙上をとおしてこの保存運動を支援した。

このような保存運動の高まりの中で、琉球政府文化財保護委員会も浦添貝塚の重要性を考慮し、高御墓とともに琉球政府建設局に現状保存を要請した。

またその一方で、沖縄考古学研究連合会は、貝塚が所在する浦添市伊祖において展示会を催し、付近住民にもその重要性を訴えた。

その後、文化財保護委員会と建設局双方で幾度となく調整が行われ、最終的に工事は当初の計画を大幅に変更することで決着し、遺跡はトンネル工法により保存されることとなった。この設計変更により、総額117万ドルの経費が増設され、235日の工期が延長されることとなった（新田1973a）。

この一件により、浦添貝塚の重要性はさらに注目されるようになり、1972（昭和47）年2月25日には、浦添貝塚が琉球政府指定史跡に、高御墓が特別重要文化財に指定され、同年5月15日の日本復帰に伴い、

それが沖縄県指定史跡及び有形文化財（建造物）として引き続き保護されることとなる。

なお、現在は国道330号線伊祖トンネル上に位置する浦添貝塚を中心に、周辺の広大な敷地が浦添大公園として自然を活かした形で整備され、地域の憩いの場として親しまれている。

調査体制

浦添貝塚の発掘調査は、琉球政府文化財保護委員会の許可により、浦添高校郷土史研究クラブの調査実習を兼ねて二次にわたって行われた。その体制は次のとおりである（氏名は当時のもの）。

第一次調査

期間：1969（昭和44）年8月10日～14日

顧問：新田重清

発掘調査員：〔1年生〕仲嶺盛彦、照屋正賢、
宮城朝光、高里幸、比嘉春美、与座清子、
知念久枝 比嘉サヨ子
〔3年生〕喜屋武元伸、津波古聰、潮平寛一、
照屋治美、豊里英美、金城佳代子

第二次調査

期間：1970（昭和45）年7月21日～27日

顧問：新田重清

発掘調査員：〔1年生〕栗森菊枝、大嶺政子、
比嘉美似子、識名久美子、砂辺節子、
棚原正助
〔2年生〕仲嶺盛彦、古波藏一成、高里幸、
照屋正賢、宮城朝光、比嘉賀盛、比嘉春美、
与座清子、知念久枝、比嘉サヨ子
〔卒業生〕喜屋武元伸、津波古聰、潮平寛一

なお、本稿は浦添高校郷土史研究クラブの元メンバーで構成された「うらおそい会」の新田重清、比嘉賀盛、島袋春美に、県立博物館考古担当学芸員の仲座久宜が加わり、共同で検討し、執筆・編集作業を行った。

位置と環境

浦添貝塚は、浦添市伊祖字真久原に広がる、浦添丘陵と称される石灰岩丘陵の東側斜面、標高約70m

に位置する遺跡である（第1図）。その東側裾野には牧港川が流れ、約2km北側に位置する牧港の海岸へ注ぎ込んでいる。

貝塚が広がる中央付近には、丘陵の基盤を成す琉球石灰岩が露出しており、その岩陰には県の有形文化財として指定されている伊祖の高御墓が築造されている。浦添貝塚はその崖下傾斜地に形成されている。調査はこの断崖に接する堆積土について行われた。

浦添貝塚が立地する浦添丘陵の周辺には、かつては琉球石灰岩土壤に一般的な植生が分布し、東側に牧港川が流れ、その堆積土で構成される沖積地に接するように海岸が広がっていた。浦添貝塚人たちはこのような環境の中で狩猟採集を行い、生業を営んでいたことが、出土する遺物から想定できる。

なお、貝塚上部に位置する高御墓の前庭部からは、貝塚と同様な土器片が採取されていることから、その一帯には貝塚を形成した人々が生活していた居住域が存在する可能性がある。

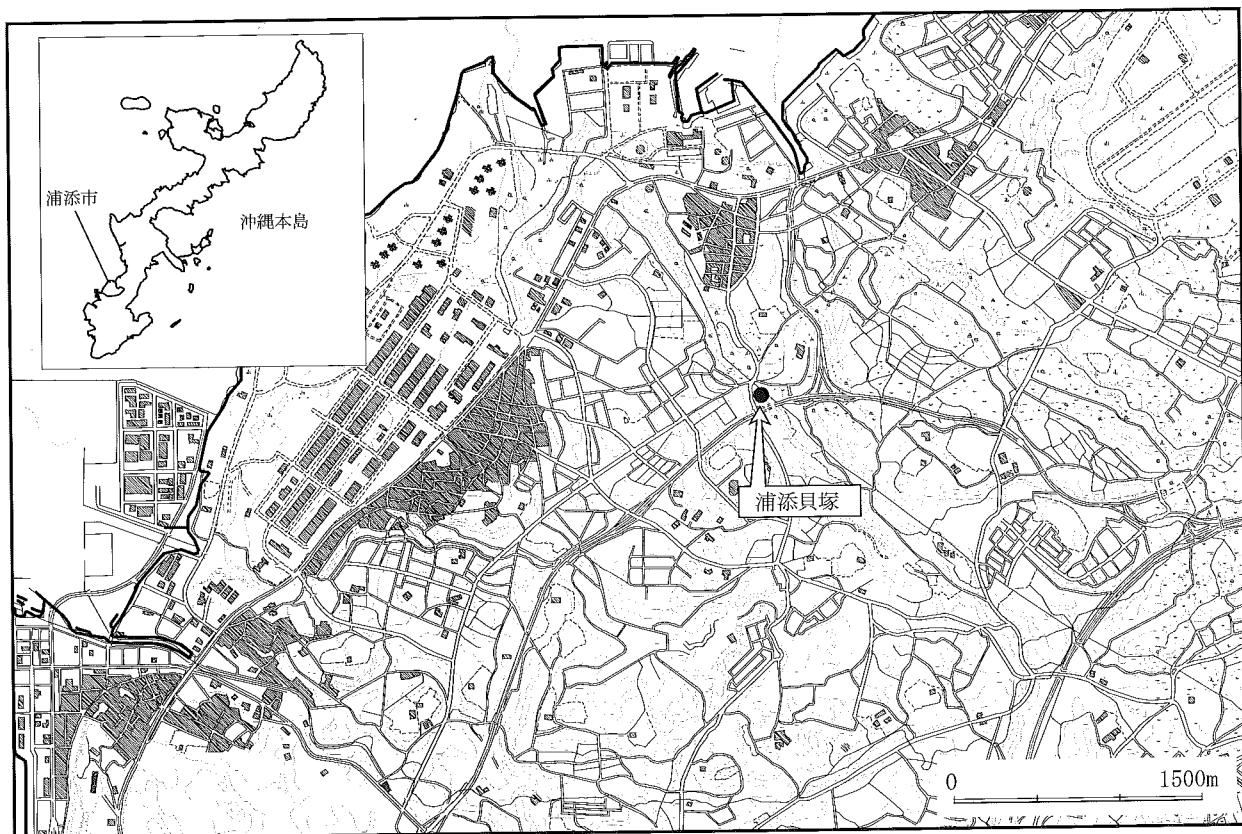
また、貝塚の周辺には、浦添グスクや浦添ようどれ、伊祖グスク、伊祖古島、真久原遺跡等のグスク時代に相当する遺跡や、近現代の古墓群が多く見られる。当地にこのようなグスク期の遺跡が分布するのは、中・南部のほぼ中間に位置するという地理的要因に加え、内外の貿易の中核として機能していたとされる牧港港の存在が起因していると考えられる。このように浦添貝塚周辺は、長きにわたって人々の暮らしが営まれていたことが、遺跡の分布から読み取ることができる。

層序

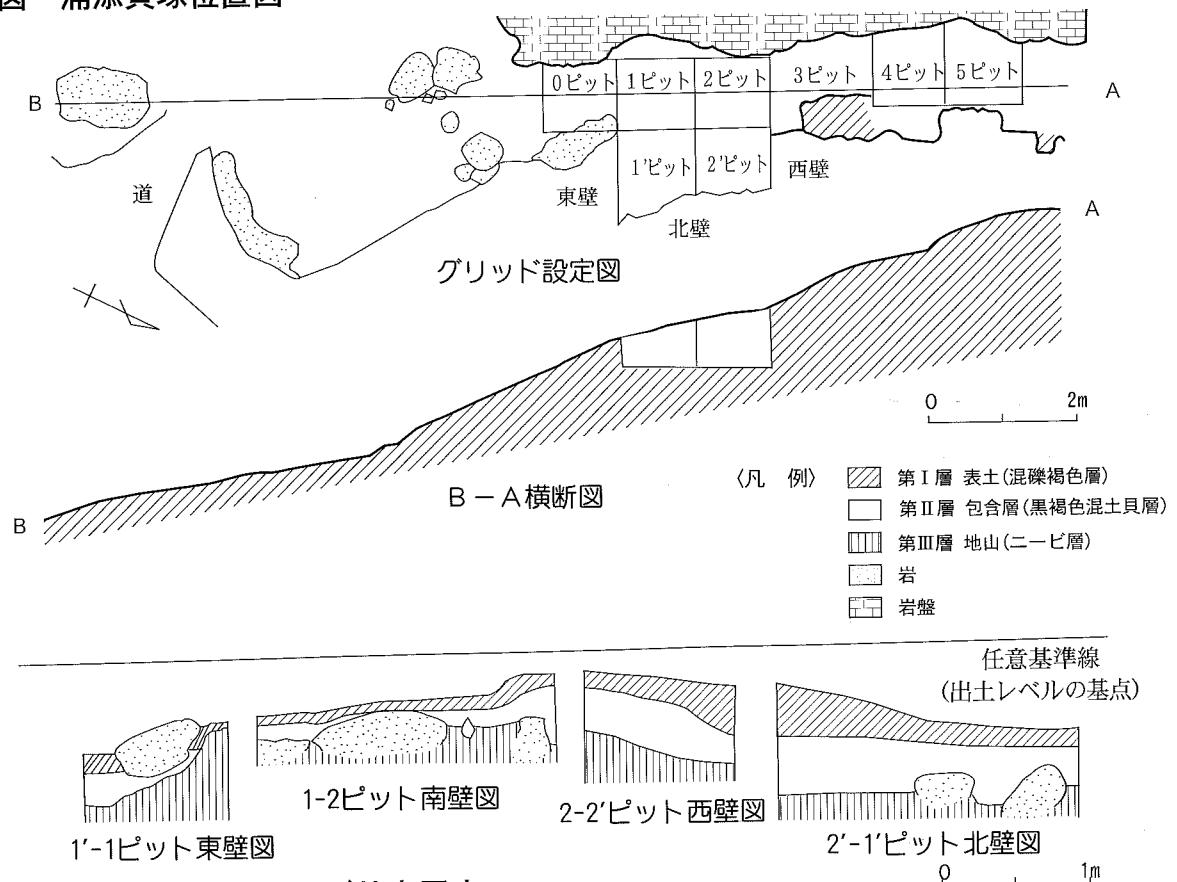
層序は大きく3枚に分層することができるが、調査地は北東から南西にかけて傾斜しているため、層厚は均一でなく、総じて北東側に厚くなる傾向を示している（第2図）。

第I層は表土で、層厚は20～70cmを測る。礫を含む褐色の土層で、第II層と同様な遺物を含む。第II層は遺物包含層で黒褐色を呈す。層厚は40～60cmを測る。第III層は地山で、第三期砂岩質の細粒子の黄褐色砂層である。

なお、各層において琉球石灰岩の礫や岩の混在が確認されているが、これは当該地が崖下にあるこ



第1図 浦添貝塚位置図



第2図 グリッド設定図及び基本層序

とにより、崖上からの崩落等により混入したものと思われる（図版16）。

出土遺物は第Ⅰ層、第Ⅱ層ともに見られ、双方で出土遺物の時期、種別の相違は認められなかった。このことからも、貝塚堆積土は当時の崖上からの投棄に加え、その後の高御墓構築時、または自然崩落による二次堆積により形成されたものである可能性が高い。

出土遺物

ここに掲げた資料は、これまでの概要報告（新田1970・1971）に記載された資料を基に報告を行うが、その他資料についても、今回の整理作業時に報告の必要があると思われた資料については、図化及び写真撮影を行い掲載する。

また、既報告資料の中には、今回の整理作業中において所在が確認できないものが存在するが、これらの資料については、既報告文献に掲載されている写真から分析・検討し、一部資料は写真から図化を試み報告を行う。

なお、ここでは、本報告掲載資料と既報告資料との共通性を保持する目的から、対照する事項を土器については第1表として対照一覧を示し、その他製品は一覧表中に明記した。

土器（第3～7図、図版1～4）

この浦添貝塚の発掘以降、沖縄の土器編年研究は大きく進展した。ここでは今日までの研究の成果を踏まえ、浦添貝塚から出土・採集された土器を再検討してみた。

土器は小片が大半を占めることから、詳細な分類は困難であるが、少なくとも面縄前庭式土器群、仲泊式土器群、宇宙下層式土器群の3群に大別することが可能である。次に、それぞれの特徴を記す。

1) 面縄前庭式土器群（第3・7図、図版1・2）

ここでは凸帯と沈線の組み合わせによる、面縄前庭式土器及びこれに類似する凸帯文土器を一群としてまとめ、合計25点がこの一群に属することを確認した。

第3図1・2は、その右図に示すとおり接合が可能である。嘉徳遺跡（河口1974）ほかの出土例では、

口縁沿いと頸部から肩部にかけて、水平方向に2本の凸帯を貼付するのが基本型であるが、本貝塚出土例では、凸帯を折り返すか湾曲させて貼付する例が目立つ。

第3図9の土器片は、内面に輪積み製法による粘土紐の継ぎ目が残されている。確認された継ぎ高は10.4～11.4mm。器面の残存が良好な部位を観察すると、外面は同図1及び3のようにわずかに条痕が残る例もあるが、ほとんどの表面はなで消しにより平坦に仕上げられている。また、口縁部あるいは口縁近くの破片で内面の残りが良い資料では、内面の条痕が残される例が目立ち、なで消しで丁寧に仕上げられた外面との差が目立つ。

器厚は口縁部で5～7mm、沈線の施された胴部では4mm前後と全体に薄い。第3図9の破片を例に取ると、凸帯近くで6.5mm、その下方で3.7mmとなっている。また、同図15の胴部資料は平均4mmと最も薄く、胴部片の器厚を総じても最大4.6mm、最も薄い部分では3.4mmにとどまる。

胎土混和材は1～3mm大の石英やチャート粒が多く含まれる。本資料が無文であれば、伊波・荻堂式土器との区別が困難なほど近似している。なお、第3図15・17・19の3点には0.5～1mm大の金雲母薄片が見られる。

2) 仲泊式土器群（第3・4図、図版1）

浦添貝塚が発掘された1970年代前半のころ、二枚貝腹縁による施文土器は、市来式土器と深い関わりがあると考えられていた。そのため、1973（昭和48）年に調査が行われたうるま市隅原遺跡の調査概報（高宮ほか1976）では、まだ型式名が設定されていなかった仲泊式土器を「類市来式土器」と称している。また、伊平屋村久里原貝塚（岸本1981）では、型式未設定土器として報告している。

その後の1982（昭和57）年には、前出の土器が仲泊式土器と仮称され型式化される。その特徴として、本型式は尖底ないしは丸底の深鉢型土器で、文様は二枚貝腹縁部を押した貝刻文と沈線を組み合わせる仲泊a式土器及び、沈線だけで構成される仲泊b式土器の2種の存在が報告された（當眞・上原1982）。

次に1983（昭和58）年から翌年にかけては、古我地原貝塚（島袋編1987）の発掘調査が行われ、多数

の仲泊式土器が出土したこと、仲泊式土器の型式名が定着することとなった。

この一群として、肥厚した口縁部に貝殻腹縁を押しつけ、その下方に斜沈線を施文する例が3点得られており、第3図22の1点を図化した。破片は口唇下2cmまでを肥厚させ、継ぎ目のような1~2mmの段差を経て胴部へと至る。器厚は5.3~7.8mmで、混和材は1~3mm大の石英及びチャートである。

第4図Eは第一次調査時の資料で、当時は市来式としても相違ないと考えられていた土器である。肥厚部に貝殻文、その下位に斜沈線が施される。同図Fの土器は口縁沿いに貝殻文、下方に斜沈線様の文様が見られる。

第3図25・26の土器は、仲泊式に相当するとみられる沈線文土器である。25は口唇部と内面の口縁沿いに突き刺すように連点が施されている。同図23・24は混和材に金色の1~2mm大の雲母片を混入し、同図26の資料と同一個体と思われる。

器形については、第3図25の破片から口縁部が内側に傾くことが確認でき、25・26は山形口縁部の頂部を方形に切り込むように成形されている。26を見ると、粘土が軟質な成形時に、籠状の施文具で上部から押しつけたため、切り込み部の下端部が盛り上がるようになる。

第3図27は、肥厚口縁部に押し引きつつ刻文を施している。施文方向は口縁沿いで左から右へ進み、途中で下に折り返すように左方向に施文する。この時点までは本貝塚の「奄美系」と呼ばれていた土器と共に通するが、肥厚部の下に鋸歯状あるいは折帶文状の斜沈線が見られる。

本貝塚出土の「いわゆる奄美系土器」では、肥厚部の段差部分に施文する例はあるが、明確に肥厚部の下位に文様が確認できるのは、本例と後述の一例だけである。本資料は仲泊式と「いわゆる奄美系土器」との関係を検討する一例として本群に含めた。同図28も肥厚部とその下位に沈線が施される資料である。

3) 宇宿下層式土器群（第4~7図、図版2~4）

本群の文様帶は口縁部近くに限られ、施文部位は胴部との段差をつけている。ここでは次の3グループに分けて検討した。

a : 口縁から段差のある部分までが残存

b : 段差が確認できる

c : 段差が確認できない

この中でcグループ中の沈線文だけが施された土器片には、仲泊式に属する可能性のある資料が含まれるが、本貝塚の資料のみでは両者の区別は困難であることから、今回はこの一群に含めた。

このaグループの口縁から段差部までが確認できる土器は10点で、第5図G・H、第7図Iほかを加えても少ない。なお、第5図46~52は同一個体と考えられる。本群は文様の組み合わせで次の二種に大別できる。

(イ) 押引きながら刻む文様だけの例（第4図30~33・35・38~42、第5図46~52）。

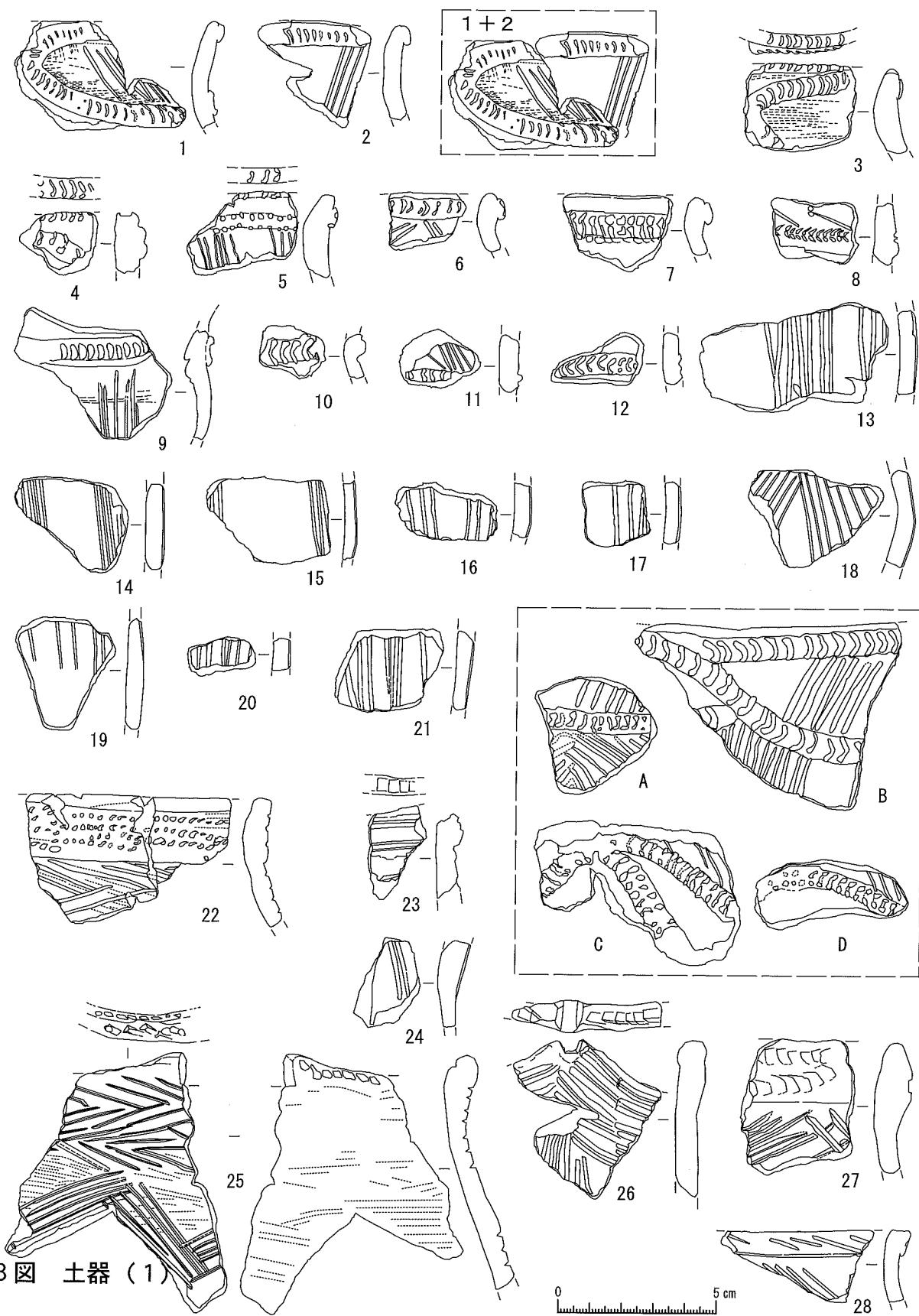
第4図30~33の土器は同一個体と判断される資料である。この中で32・33は外面の摩耗が激しいが、割口は多少角が取れた程度である。上面観は口縁部角がほぼ直角に折れて方形を呈すことから、市来式土器と同じ形状を持つことが確認できる。口縁部分の断面は、第4図33の断面図Aでは胴部との段差が明瞭だが、角部以外では断面図Bのように、文様帶と無文の胴部との段差は1mm程度と浅い。第4図34の口縁部は、口唇上部に文様が確認できないが、摩耗の程度が30~33の土器と類似するため、同一個体の可能性が高い資料として、並列して図示した。

(ロ) 前者の文様と沈線を組み合わせた例（第4図36・37）。

文様帶と無文胴部の段差はわずかで、第4図36が1mm、同図37でも2mm弱である。37は内外面において成形時に籠でなでたような痕跡が見られ、文様を押し引いた部分には、植物質の施文具と思われる痕跡が残されている。

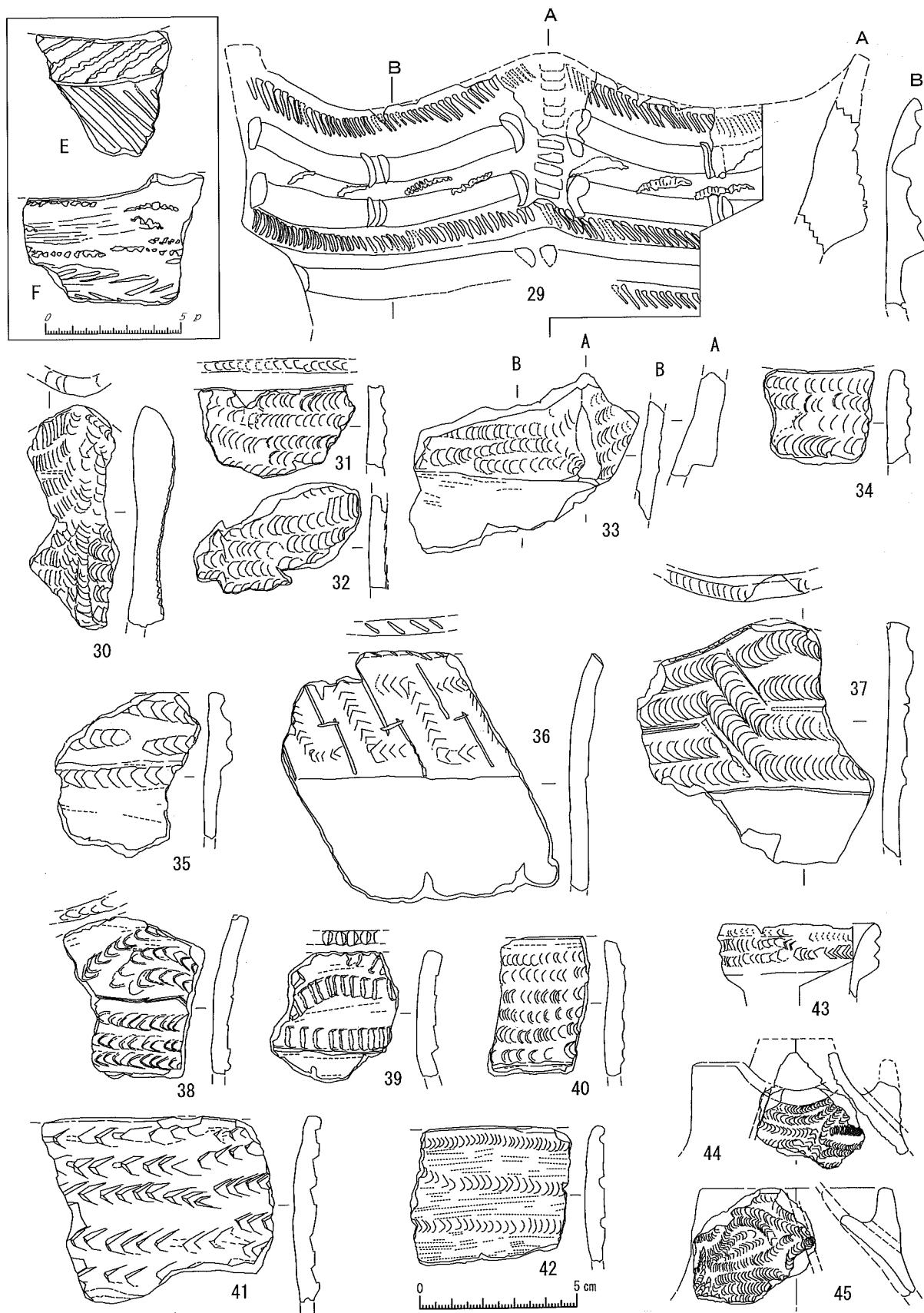
次に段差が明瞭な資料の文様について観察すると、(イ) 押引きながら刻む文様単独の資料、(ロ) 押引刻文と沈線文の組み合わせ、(ハ) 沈線文のみ、の3種に大別される。段差部の断面形状は、第5図53の土器が「く」の字状で、他は1~3mmの段差のみである。

次に段差が見られない資料においても、(イ)(ロ)(ハ)の3種があるが、この中で第6図103・104・108などは断面を見ると、破片上部がやや内湾する



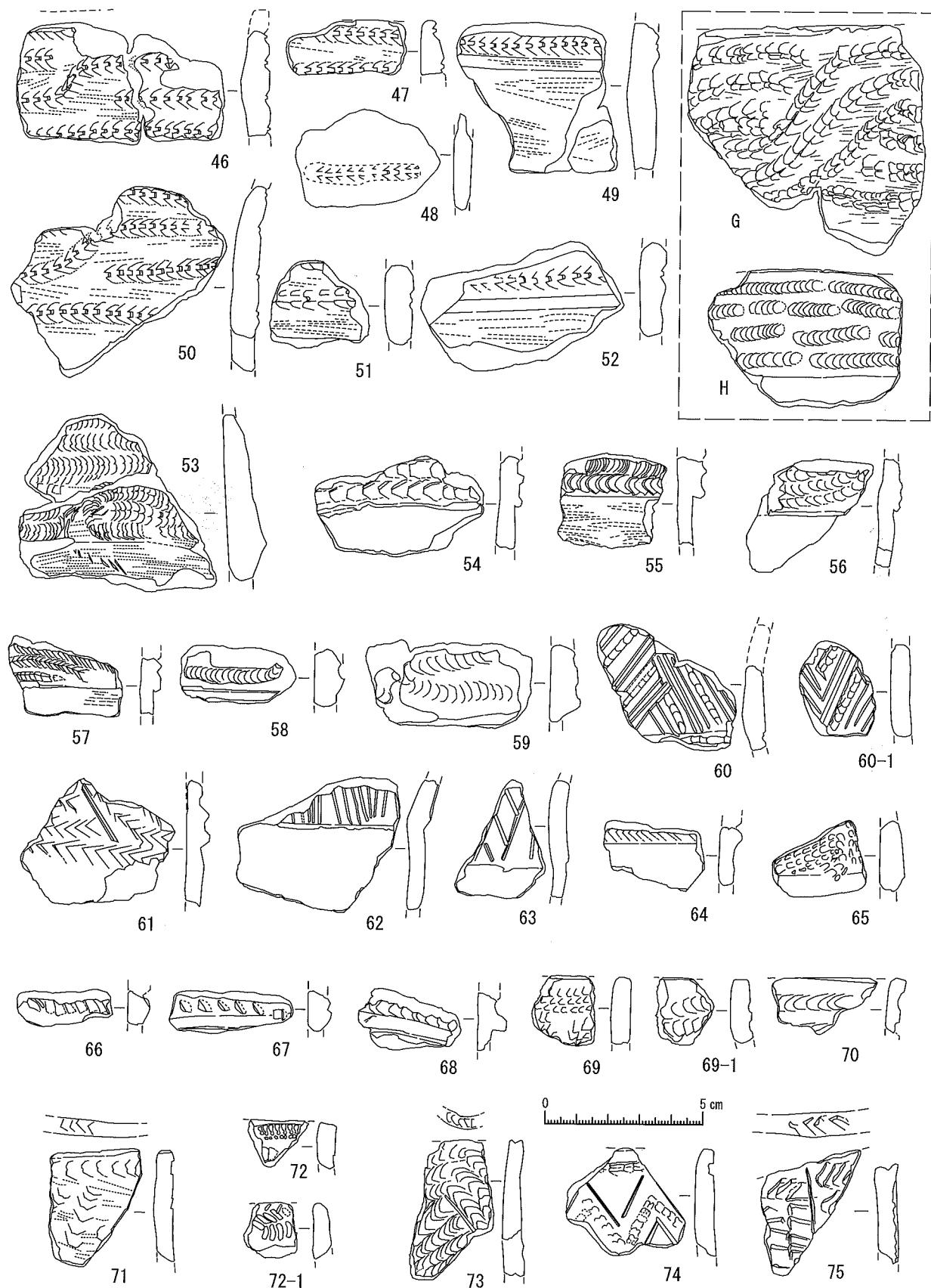
第3図 土器(1)

面縄前庭式土器群 (1~21・A~D)、仲泊式土器群 (22~28)

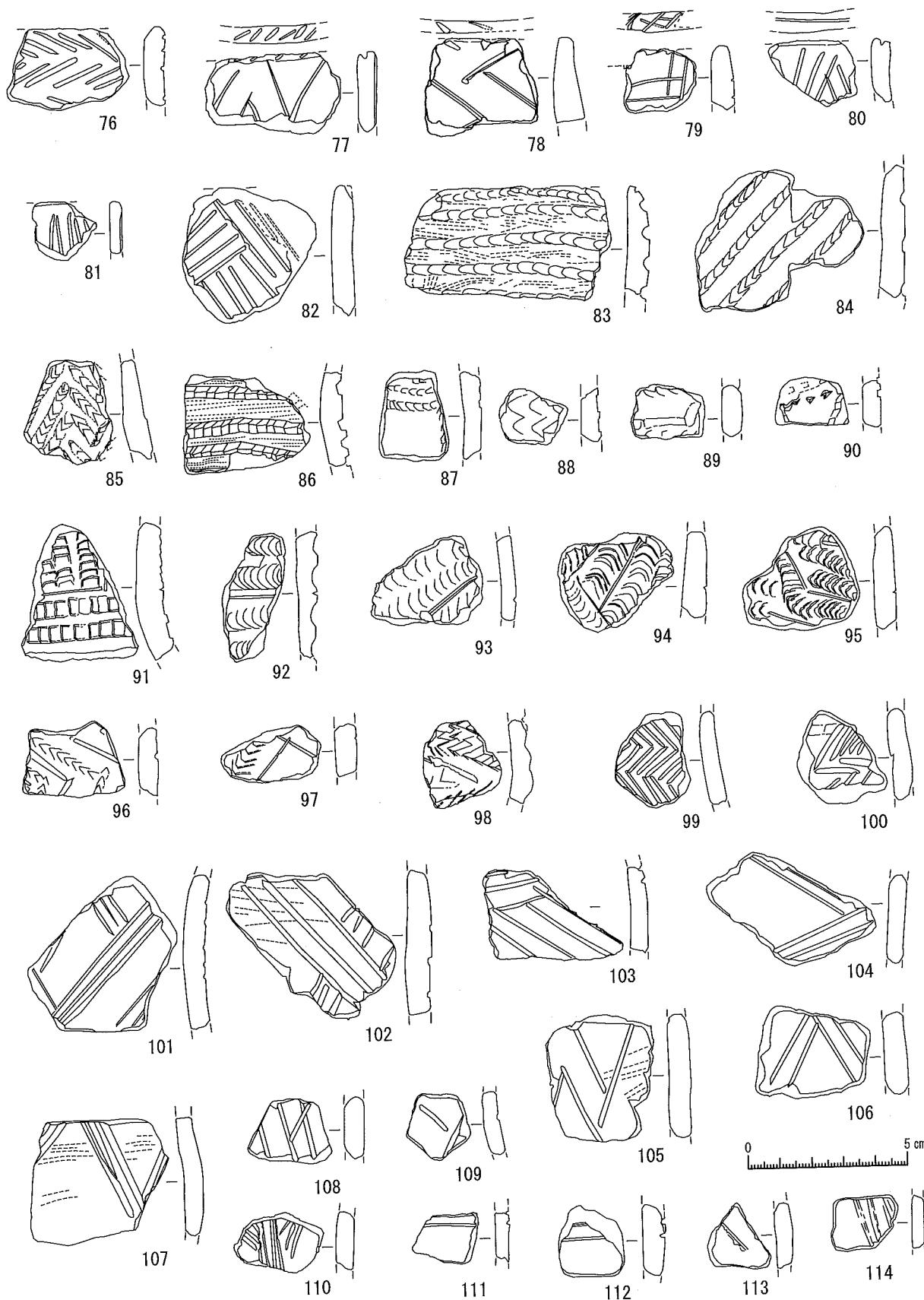


第4図 土器(2)

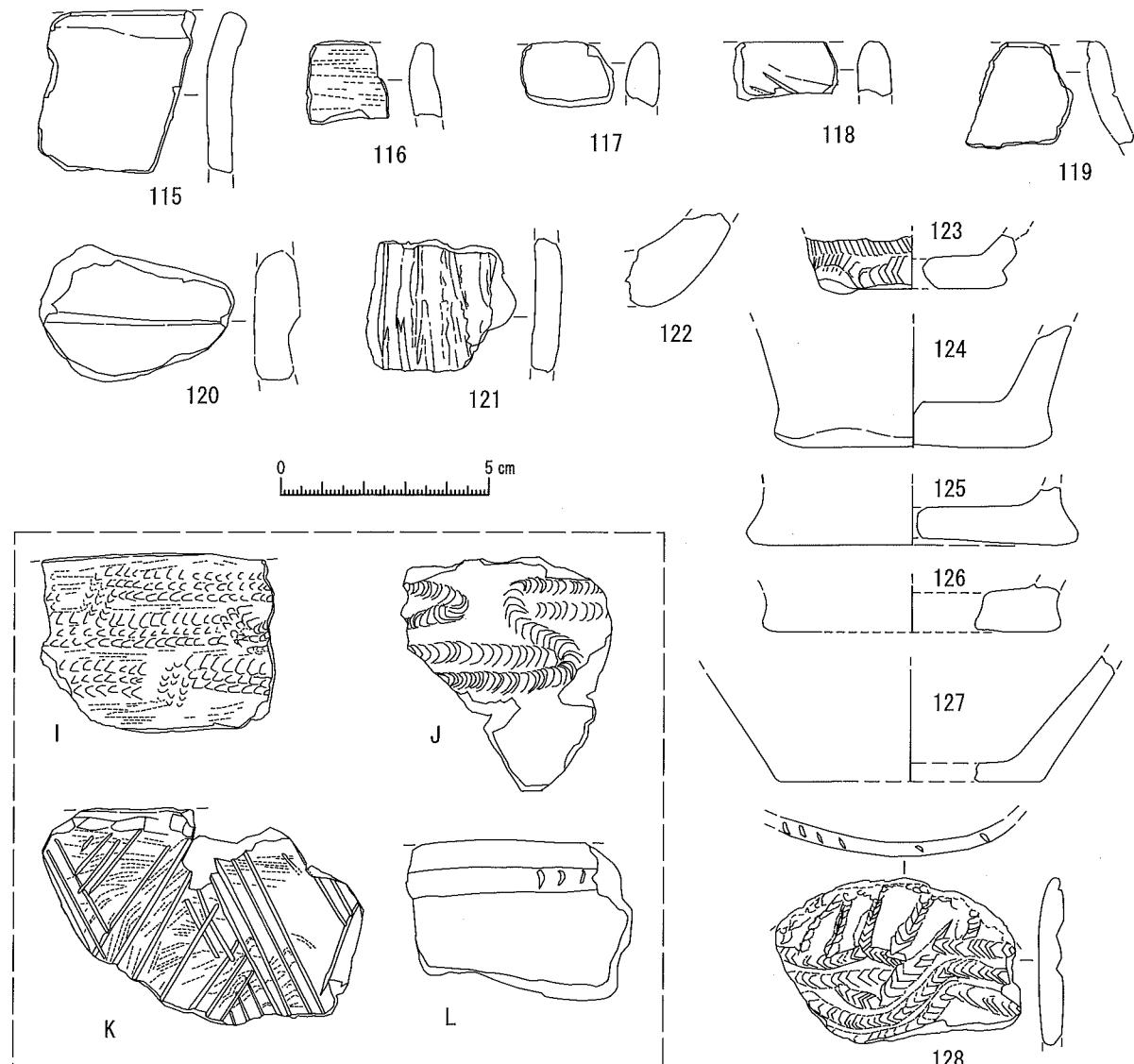
仲泊式土器群(E・F)、市来式土器(29)、宇宿下層式土器群(30~45)



第5図 土器（3）宇宿下層式土器群(46~75)



第6図 土器(4) 宇宿下層式土器群(76~114)



第7図 土器(5) 無文土器(115~121)、底部(122~127)、宇宿下層式土器群(128・I~K)、面縄前庭式土器群(L)

第1表 土器対照表『南島考古』・『古代文化』

本稿		南島考古		古代文化	
図	図版	図	図版	図	図版
第1図1	図版1-1			図版第十・5	
第1図3	図版1-3			図版第十・9	
第1図5	図版1-5	第4図13		図版第十・14	
第1図7	図版1-7	第4図9		図版第十・11	
第1図9	図版1-9			図版第十・10	
第1図14	図版1-14	第3図24		図版第九・6	
第1図22	図版1-22	第3図2		図版第十・6	
第1図25	図版1-25	第3図15?		図版第九・11	
第1図27	図版1-27	第3図5			
第1図A	図版1-A	第4図11		図版第十・8	
第1図B	図版1-B			図版第八・9	
第1図C	図版1-C	第4図12		図版第十・7	
第2図29	図版2-29	第3図1		図版第八・1	
第2図30	図版2-30			図版第十・2	
第2図31	図版3-31			図版第八・5	
第2図36	図版4-36			図版第十・3	
第2図37	図版5-37			図版第八・4	
第2図39	図版6-39			図版第九・14	
第2図41	図版7-41	第3図9		図版第八・11	
第2図42	図版8-42	第3図11			
第2図43	図版9-43			図版第十・15	
第2図E	図版10-E	第3図3		図版第八・2	
第2図F	図版11-F			図版第九・10	
第3図50	図版12-50			図版第八・10	
第3図53	図版13-53	第3図5		図版第九・4	
第3図54	図版14-54			図版第十・12	

本稿		南島考古		古代文化	
図	図版	図	図版	図	図版
第3図55	図版3-55				図版第十・13
第3図63	図版3-63	第4図8			
第3図64	図版3-64	第4図4			
第3図76	図版3-76	第3図7			
第3図77	図版3-77	第3図13			
第3図G	図版3-G	第3図8	第3図8	図版第九・3	
第3図H	図版3-H	第3図3		図版第九・2	
第4図79	図版4-79	第3図17			
第4図80	図版4-80	第4図1			
第4図81	図版4-81	第3図18?			
第4図85	図版4-85	第3図20			
第4図87	図版4-87	第4図87			
第4図88	図版4-88			図版第八・3	
第4図89	図版4-89			図版第十・1	
第4図94	図版4-94	第3図14		図版第九・15	
第4図102	図版4-102	第3図21		図版第九・13	
第4図104	図版4-104	第4図5			
第4図105	図版4-105	第4図6			
第4図108	図版4-108	第4図2			
第4図109	図版4-109	第4図3			
第4図110	図版4-110	第4図14		図版第九・5	
第5図118		第4図15			
第5図123				図版第十・17	
第5図131				図版第八・6	
第5図K		第3図19		図版第九・8	
第5図L				図版第十・16	

ことから、これらの部位は口縁直下か胴部であると考えられる。本資料の位置付けは、本群土器の文様帶が口縁段差部から上位に施文される例からすると問題はあるが、ここでは本群に含めた。

第4図43は壺形土器の口縁部で、口径48mm、先端が三角に尖る施文具で押引きながら文様を刻んでいる。文様は左から右に施文し、途中で階段状に下る部分が2ヶ所見られる。

第4図44・45は同一個体で、発掘直後は44の右位に45の破片が接合されていた。しかし、今回検討してみると、かつての接合とは左右逆位置になるが、上部からの穿孔部位が一致する可能性が考えられた。これを確認しようと試みたが、接合面が剥離しているため不可能であった。本資料は嘉徳遺跡出土の二重口縁土器と類似する例であろう。

4) 市来式土器（第4図、図版2）

第4図29に示した市来式土器は、第4ピット第II層下部からの出土である。出土部位は、口縁を含む胴上部の一部である。

口縁部は四隅が突出し、上面観は方形を呈す。また、その断面は「く」の字状に肥厚しており、文様帶は肥厚口縁部及びその直下まで分布している。肥厚部角では、上下にかけて刻文が施され、肥厚部文様帶の上下縁辺に沿い、籠状の施文具により斜沈線を左から右に細かく連続して刻文する。この上下の斜沈線間には、幅約1cmの太い凹線が2段あり、両凹線の起点・中央・末端には、三日月状の鮮明な刺突文がある。この2段の凹線間には二枚貝腹縁を押しつけたとみられる文様が、一面につき横位に4ヶ所ずつ施されている。

この肥厚部直下には、肥厚部と同様な凹線が肥厚部角間の範囲で1条引かれ、両端に三日月状の刺突を施す。続いてその下位には斜沈線を左から右に連続して細刻している。

外器面には細かなひび割れが見られ、混入物として2~4mmの石英、チャート及び1~2mm大の金雲母薄片が目立ち、他の土器と異なる印象を与える。この混和材の量は、本貝塚出土土器で最も多い。

口縁部角の破片は3ヶ所確認できる。これらを接合後、石膏復元（図版3-29-1）した方形口縁部の対角線距離は、203mm及び206mmで、残存する側面部2

面の幅は、120mm及び111mmである。この数値から対角線距離を算出すると、約170mm及び157mmの数値が得られた。この値を基にすると、対角線距離は現況より約3cm縮小したサイズになる。

5) 無文土器（第7図）

第7図115~121はいずれも小破片であるが、無文土器になる可能性がある資料である。同図120は、表面に残された付着物が浦添貝塚の出土資料と明らかに異なるため、保管時に他遺跡の資料が混入した可能性がある。同資料は肥厚した断面形状と石灰岩質の粒子が混和材の主体であることから、カヤウチバンタ式土器と判断される。

6) 底部（第7図）

第7図123は、図上復元による底径は46mmで、先端が三角形状に尖る施文具で押し引くように文様を刻み、内外面ともに丁寧に研磨されている。同図124~126は断面図のみを見ると、アカジャンガ一貝塚（金武ほか1980）などのくびれ平底と近似しており、混和材にも2mm以下の赤褐色の粒が見られる。本貝塚が奄美系土器主体の遺跡でなければ、後期土器の底部と見まがうほど酷似する。同図127の底部は、伊波・荻堂式の底部と類似する。その他、底部資料の中に削り成形の見られる小破片が確認されている。

石器（図版5）

石器は合計19点が出土しており、その内最も多く得られたのは敲打器類である（第2表）。

図版5-6・8・9は側縁を両面から打割したもので、6は幅49mmと扁平を呈すことから、打製石斧の軸部と思われる。敲打器は8点出した。石器中最も多く、その大半は同図版1~4のように小振りである。

図版5-10は、石杵と報告（新田1971）されているものである。表裏面及び側面の4ヶ所に敲き痕、裏面上部に数回の剥離がみられる。磨り石であろうか。

図版5-11は石皿の破損品で、中央部に大きな凹みが認められる。この凹みの広がりから当初の大きさを想定すると、大型の石皿になると思われる。石質は細粒砂岩製で、両者は3ピットからセットされ

第2表 石器観察一覧

No.	種類	石質	状態	サイズ (mm)			重量 (g)	観察事項	出土地点		注記	図版	対照		
				縦	横	厚			グリッド	レベル(cm)			古代文化	南島考古	
1	敲き石	砂岩	完形	66	54.5	37	209	平面: 楕円。横断面: やや方形。側縁に敲き、他は研磨。石英脈が斜めにあり。	4	75~90	—	5-1	—	—	
2	敲き石	砂岩	完形	77.5	53.0	56.5	46.2	平面: 椭丸方形。横断面: 方形。加工: 表裏・側面に敲き、裏面が敲きは強い。他は研磨。	3b	130	—	5-3	—	—	
3	敲き石	砂岩	4/3 △61.6	52.7	39.7	156	平面: 楕円。加工: 敲き。		3	150~165	—	5-2	—	—	
4	敲き石	片状砂岩	4/3 △10.4	91.8	30	432	平面: 楕円、裏面は打損後、側面に打割。加工: 表の中央に敲き。		4	75~90	—	5-7	—	—	
5	敲き石	石灰質砂岩	完形	68	55.5	32.5	164	平面: 不定形。加工: 周縁は打割。中央および側面に敲き、表面は研磨。裏面は自然。	5	120~135	—	5-9	—	—	
6	敲き石	安山岩	破損			113	加工: 一部研磨。		—	—	—	—	—	—	
7	敲き石	石灰質砂岩	完形	76.5	45.5	29	150	平面: 縱楕円。加工: 側縁は打割後剥離。他は研磨。鐘乳石?		—	—	U-433	5-4	—	—
8	敲き石	輝緑岩	完形	99	66.8	35.3	389	平面: 若干くびれた楕円。加工: 中央・側縁に敲き特に片側は敲きが強くくびれる。他は研磨。		—	—	U-377	5-5	—	—
9	円盤状	片状砂岩	完形	71	57.2	19	95	平面: やや台形。加工: 周縁打割。二次利用か。		—	—	U-377	5-8	—	—
10	磨り石	砂岩	完形	178	107	81	2600	平面: 縱楕円。加工: 全面の中央に敲き。表裏面の上方は剥離後研磨。		—	—	—	5-10	図版 11-2	—
11	石皿	細粒砂岩	破損	197	195 (174)	105 (64)	6000	平面: 台形。加工: 凹みあり、表面は深く裏面は浅い。		—	—	—	5-11	図版 11-2	—
12	石皿	片状砂岩	完形	△100	△54	33.5	142	平面: 不定形。横断面: 扁平。加工: 一部研磨。	4a	127~150	—	—	—	—	—
13	石斧		細片	△	△	△	4	刃部、片刃か。加工: 刃部周辺研磨。	4a	127~150	—	5-12	—	—	
14	打製	片状砂岩	破片	△	△	△	111	加工: 周縁打割。		—	—	—	—	—	—
15	打製	輝緑岩	破損	△24	49	15.7	40	打製石斧の軸部か。横断面: 扁平。 加工: 周縁打割。U-378。		—	—	U-378	5-6	—	—
16	打製	片状砂岩	破損	61.7	35.8	12.1	40	横断面: 扁平。加工: 周縁打割。		—	—	U-378	—	—	—
17	破片	砂岩	5/1	△65.5	△32.5	△23.7	52	平面: 不定形。横断面: 三角形。加工: 一部研磨。	4	75~90	—	—	—	—	—
18	破片	輝緑岩	細片	△	△	△	4	横断面: 扁平。加工: 一部研磨。	4	135~150	—	—	—	—	—
19	破片	砂岩	細片	△	△	△	1	小破片、詳細不明。	3	—	—	—	—	—	—

第3表 石製品一覧

No.	種類	石質	状態	サイズ (mm)			重量 (g)	観察事項	出土地点		注記	図版	対照	
				縦	横	厚			グリッド	レベル(cm)			古代文化	南島考古
1	ノミ状製品	千枚岩	完形	31.4	10.4	2.8	1.7	平面: 長方形、横断面: 扁平。加工: 両端に付刃、両面研磨。刃こぼれあり。	—	—	U-4	6-1	—	—
2	有孔製品	サンゴ	破損	28	21	30	22.4	平面: 椭丸方形。加工: 中央に穿孔。孔の周縁に敲きの痕。孔径6.8mm。	—	—	U-247	7-4	—	—
3	有孔製品	サンゴ	完形	52.8	20	9.2	14.1	平面: 長楕円。加工: 自然。加工: 上方に穿孔。形は楕円、両面穿孔。	—	—	U-459	7-5	—	—

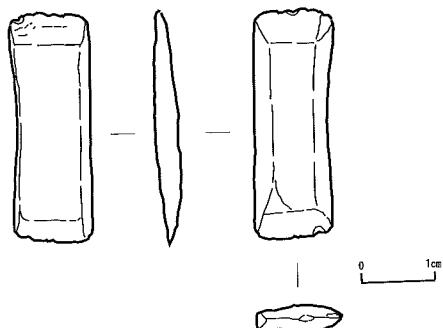
た状態で出土している（新田1971）。

石質においては、砂岩質の石器が占める中、県内に産しない輝緑岩製の敲き石ほか2点が含まれております。今後産出地の特定が望まれる。

石製品（第6図、図版6-1・7-4・5）

石製品は3点出土している。第3表に観察一覧を示した。

第6図・図版6-1は両端に附刃するものでノミ状石製品と仮称する。類例はシヌグ堂遺跡（金武ほか1985）などの縄文晩期の遺跡で出土しているが、これらは本貝塚出土資料より少々大きめである。また、本資料は図版6-2・3の貝製品に大きさ及び端部が薄くなる点で共通していることから、同様な用途が想定される。



第6図 石製品（ノミ状石製品）

第3表に示すように、サンゴ製品は2点出土しているが、それぞれ種が異なる。図版7a-5は灰褐色を呈す軟質のサンゴで、4はキクメイシサンゴに穿孔したものである。前者は津堅島キガ浜貝塚（比嘉1978）、後者は笠利町用見崎遺跡（中山1995）の出土資料に酷似する。

チャート（図版5-12～25）

チャート片は19点得られ、その大きさは0.29～5.8gの範囲のものである。重量による分布をみると、0.9g台7点、1.0g台4点、2.0g台1点、3.0g台1点、4.0g台2点、5.0g台1点で、全体に小型のサイズが多い。2点の石鎌未製品（図版5-18・24）が出土し、剥片も多数見られることから、石鎌を当地で製作していたことが想定できる。また、この中には石鎌には不向きな石英が貫入したもの（図版5-22）

や節理面を有するもの（図版5-14）も見られるが、本貝塚出土土器の混和材にチャートが確認されていることから、一部は混和材として使用していた可能性も考えられる。

貝製品（図版6・7a）

貝製品は合計14点出土した。内訳は第4表のとおりで貝鏃3点、スイジガイ製利器1点、ホラガイ有孔製品1点、メンガイ有孔製品1点などの実用品が6点、サラサバティラとメンガイ製の貝輪が各1点、貝玉2点、札状製品2点、ソメワケグリ有孔製品1点などの装飾的なものが合計7点、イトマキボラの穿孔貝製品が1点である。これらの貝種から、サンゴ礁の岩礁に棲息する貝が製品として用いられていることがわかる。

図版6-6・7は貝鏃で、真珠層を持つ貝を二等辺三角形状に加工し、底辺側のほぼ中央に孔を施したものである。古代文化で3点が報告されているが（新田1971）、今回確認できたのはその内2点である。6はヤコウガイ、7はクロチョウガイである。

札状製品は、アンボンクロザメなどの大形イモガイの体層部を縦位に切り取り、板状に加工したものである。図版6-2・3の2点が得られた。3は完形で、イモガイの肩部を利用している。2は破損しているが、3よりも若干厚手で下端は刀状に薄くなる。広田遺跡ほかで出土する貝札とは異なるため、「札状製品」と仮称した。類例は古我地原貝塚で出土している。本製品は、図版6-1の石製品に大きさや形状が酷似していることから、同様な機能が想定される。

貝玉はマガキガイや小・中型のイモガイの螺塔部を円盤状に加工し、研磨したものである。図版6-4・5の2点が得られた。いずれも螺塔及び裏面がかなり研磨され、側面との間に研磨による稜線が明瞭に見られる。また、螺塔にアバタが数個見られることから、海浜に打ち上げられた貝を利用したと思われる。本品は奄美・沖縄諸島において多数出土する製品であるが、研磨が顕著な製品は少ない。

図版7a-2はスイジガイ製利器の刃部片で、1点が得られた。本製品は上原分類（上原1981）による突起①の部分で、横刃一平刃に相当する。加工は附刃部分のみで、顕著に研磨が施されている。

第4表 貝製品一覧

No.	種類	製品	状態	サイズ (mm)			重量 (g)	観察事項	出土地点		注記	図版	対照		
				縦	横	厚			グリッド	レベル(cm)			古代文化	南島考古	
1	カバミナシ	自然	完形?	5.3	3.1		7.1	外唇付近。殻表は風化氣味で周縁摩耗。孔あり。黒住耐二確認。	—	—	U-92	6-8	—	第5図-12	
2	ヤコウガイ	自然	破片	4.8	1.4		3.9	体層。殻表あり。周縁は自然の割れ。自然貝の可能性が高い。	—	—	U-297	7-3	—	—	
3	メンガイ類	貝輪	破片	7.3			8.5	外輪の幅8mm。外縁、内縁とも摩耗。	—	—	U-2	6-11	—	第5図-3	
4	イモガイ	貝札	完形	62	11.7	2.5	3.7	外唇利用。短冊状で研磨顯著。	—	—	U-2	6-3	図版11-14	第5図-7	
5	イモガイ	貝札	破片	31	8.2	3.4	2.1	外唇利用。研磨顯著。	—	—	U-22	6-2	図版11-13	第5図-8	
6	マガキガイ?	玉	完形	17	18.2	8	2.7	殻頂利用。研磨顯著。殻表にアバタが数個見られる。孔径5.5mm、内→外に穿孔。	—	—	U-2	6-4	図版11-12	第5図-9	
7	マガキガイ?	玉	破片	15	—	3	0.5	殻頂利用。表裏面とも研磨顯著。肩部角は明瞭。孔は中央部は自然か。径4.5mm、殻軸の摂理。	—	—	U-97	6-5	—	第5図-5	
8	ヤコウガイ	貝繖	破片	△33	19	2.2	1.7	体層利用。研磨顯著で中央は稜をなす。裏面は平らで、基部側は殻口利用。孔径2mm、両面穿孔。	—	—	U-2	6-6	図版11-4	第5図-2	
9	クロチョウガイ	貝繖	破片	△22	18	—	1.1	研磨顯著。表面は中央に稜をなし、裏面は平らである。孔は3mm、両面穿孔。	—	—	U-8	6-7	図版11-5	第5図-4	
—	クロチョウガイ	貝繖	破片	—	—	—	—	遺物未確認。	—	—	—	—	図版11-6	—	
10	サラサバティラ	貝輪	破片	63	12	10.9	8.5	内縁は打割、外殻は研磨顯著。内殻は自然。	1a	105~120	U-25	6-10	—	—	—
11	ホラガイ	有孔	破片	280	100.4	80	276	体層のみ残。殻全体にアバタ多し、風化著しい。殻頂は円味。孔は内層側と体層側にあり。孔形は楕円。孔①30×23.2、孔②26.2×21。	—	—	—	7a-6	—	—	—
12	ソメワケグリ	有孔	完形	32	33	—	5	右殻。殻全体摩耗、アバタ有。外殻から研磨、穿孔、楕円、孔径3.5×2.8。	4b	105~120	U-467	6-9	—	—	—
12	メンガイ	有孔	完形	59	59	—	25	左殻。殻全体摩耗。穿孔、孔縁はシャープで自然か。孔径19.8×15.6、内→外。不定形。	3	105~120	U-434	—	—	—	—
13	イトマキボラ	有孔	完形	187	81	—	158	貝殻の突起を若干破損。体層に穿孔するが、自然の可能性が高いが、何らかの利用の可能性も否定出来ない。孔径18.3×13.3、外→内穿孔。不定形。	—	—	—	7a-7	—	—	—
14	メンガイ	有孔	破片	84	—	—	27	左殻。アバタ有、打割2回、製作途中か。孔径40mm、内→外。	—	—	U-462	—	—	—	—
15	スイジガイ	利器	破片	41.5	16.5	19.0	14.5	突起①を両面研磨。	—	—	—	7a-2	—	—	—
16	ヤクシマダカラ	有孔	破片	65.9	—	26.2	19.1	内唇のみ。外唇、外殻にも研磨痕。色残、光沢有。孔は外→内に穿孔。	3	—	U-3	7a-1	—	—	—

第5表 骨製品一覧

No.	種類	部位	形状種類	状態	サイズ (mm)			重量 (g)	観察事項	出土地点		注記	図版	対照			
					縦	横	厚			グリッド	レベル(cm)			古代文化	南島考古		
1	イノシシ	左下顎犬歯	装飾	破損	89	17	7.2	8.9	先端～両面穿孔。	—	—	—	8-2	図版11-10	—	—	
2	イノシシ	左下顎犬歯	装飾	破損	58	17.2	8.8	13.9	基部と犬歯のエナメル質部分およびその境面に研磨。孔は基部(6.8mm)と先端部は両面に穿孔(4mm)。いざれも両面穿孔。	3a	—	U-105	8-3	—	第5図-6	—	—
3	イノシシ	下顎犬歯	装飾	破損	36.8	6.5	3.2	1.1	イノシシの犬歯の内縁を半裁し、研磨を施し、基部側を内面から穿孔。径6mm。	—	—	U-466	8-1	—	—	—	—
4	クジラ	—	骨輪	完形	—	—	—	—	半環状、横断面は円形(16mm)。両端に孔有。孔径(外径8mm、内径3mm)穿孔方向は外→内方向。	—	—	—	—	図版11-11	第5図-1	—	—
5	クジラ	—	骨輪	完形	—	—	—	—	半環状。両端に孔。	—	—	—	—	図版11-9	—	—	—
6	クジラ	椎体か	板状	破損	62	48	12~5	32.9	平面:方形。一边に幅23mmの突起か。厚さは不均一。加工:研磨は顯著、表面一細かく、裏面～海綿組織が残る。	—	—	—	8-7	図版11-3	第5図-B	—	—
7	イノシシ	四肢骨	板状	完形	55	16	4	3.6	弧状、両面研磨、加工有り、半裁、研磨、両端研磨。	—	—	—	8-5	—	—	—	—
8	イタチザメ	歯	有孔	完形	15.5	23	4.8	—	加工:歯冠は摩耗しエナメル質がはげる。全面とも研磨は顯著で光沢がある。中央に孔。外径5mm、内径2mm。孔縁に抉り、紐ズレか。両面穿孔。	—	—	U-5	—	図版11-7	第5図-11	—	—
9	クジラ	—	刺突具	完形	104	7.5	7.8	6.7	棒状。両端とも尖る。片側を削り、平坦となる。	—	—	—	8-8	—	—	—	—
10	クジラ	—	刺突具	破損	—	—	—	—	先端尖る。横断面:円形(径16mm)、加工:顯著で光沢。	—	—	—	—	図版11-8	第5図-10	—	—
11	クジラ	肋骨か	未製品	破損	33.5	13.4	10.8	6.0	先端欠損、基部は楕円(7×9mm)。加工:全面に荒削り、基部～横位に削りの痕。	—	—	U-230	8-6	—	—	—	—
12	イノシシ	腓骨	—	破損	26.2	5.9	3.2	0.6	棒状。光沢は研磨によるものか。	—	—	—	—	—	—	—	—

図版7a-6のホラガイ有孔製品は、内唇部分に2ヶ所の粗孔を施すもので、体層から外唇にかけて破損する。貝殻は全体的に脆いが、破損は被熱が原因と思われる。また、表面にはアバタが目立つ。

図版7a-7はイトマキボラに穿孔するものである。腹面の突起部分に穿孔するもので、孔は一回の打割で開けられている。また、一部外唇も破損しているが、これが意図的か偶発的なものか決めかねる資料である。

図版7a-1はヤクシマダカラの前端と後端に、径8mmの孔を外面から磨って穿孔するものである。破損品で外唇側のみが残存する。後端部の研磨は外縁部分までおよぶ。

図版6-9はソメワケグリの殻頂部分を磨り、小孔を有するものである。外殻の中央付近にアバタが見られる。

貝輪は図版6-11のメンガイ及び図版6-10のサラサバティラがある。前者は貝の成長線に沿うように輪状になる。外殻はアバタが顕著である。後者は体層の角の部分を利用する。内縁に打割の痕が見られ、外殻も一部磨かれている。

その他、未加工品であるが、図版7a-3のようにヤコウガイの貝殻片も出土する。

骨製品（図版8）

骨製品は16点出土しているが、ここでは13点を報告する（第5表）。骨の種類別にみると、クジラ骨製刺突具2点、未製品1点、板状製品5点、イノシシの四肢骨を用いた板状製品1点、腓骨製棒状製品1点、牙（犬歯）製品3点、サメ歯有孔製品1点である。

この中で南島考古（新田1972）及び古代文化（新田1971）掲載分で確認できなかった遺物は、クジラ製骨輪2点、尖頭器1点である。個別の観察は第4表に示し、未確認の製品についての計測は、前記文献の図から数値を起こした。

全体の特徴としては、クジラ骨を用いた製品が多い。図版8-8はクジラ椎体のような大型の骨を加工した未製品である。実用品では両端を削ったヤス状の製品や、径が16mmもある刺突具があり、狩猟や漁撈具として用いられたものと思われる。

そのほか、サメ歯有孔製品（図版8-6）やイノシシ犬歯の有孔製品（図版8-1～3）は装飾品と

考えられる。イノシシ犬歯は、基本的に両端に穿孔するものと、犬歯を環状に半裁し、さらに加工を施したもののが出土している。このような加工は古我地原貝塚（島袋編1987）にも見られる。

貝類遺体（図版9・10）

貝類は本貝塚から最も出土量の多い遺物である。集計はグリッド及び種別に第6・7表で示した。第9表のグリッド別出土量から、第1・4・5ピットにおいて貝の出土が多いのは、調査地が琉球石灰岩のフッシャーになっていたため、のちに陸産貝が流れ込んだためと思われる。

発掘は包含層を15cmごとに掘り下げ、他の遺物と同様に肉眼で確認できるものを取り上げた。

集計は完形・殻頂・殻底・破片に分け、個体数の算出方法は、宜野湾市新城下原第二遺跡（島袋2006）に、棲息地分類は古我地原貝塚（黒住1987）に準じて分類し、分類内訳は第8表に示した。

巻貝は、24科59種で破片数3,580点、個体数1,914個体、二枚貝は12科28種で破片数2,073点、個体数789個体が出土した。総数は破片数5,653点、個体数は2,703個体の出土である。

第11表グリッド別数出土状況をみると、多い順に第4ピット1,894個体、第3ピット1,148個体、第1ピット691個体、第5ピット484個体である。次に深度別に最も出土量の多い第4ピットでみると、70～135cmの下部に集中する。貝の種類は巻貝かオキナワヤマタニシなどの陸産貝が多いが、それ以外にサラサバティラやマガキガイが見られ、二枚貝はヒメジャコ、ヒレジャコ、オキシジミ、イソハマグリなどが多いようである。

第8表の黒住分類による第12表の棲息地別には、V陸産で844個体と最も多い。その中でもオキナワヤマタニシが628個体を占める。IV淡水産は560個体で、カワニナが557個体である。この貝は図版14のように凝集も確認されている（新田1970）。IIIマングローブ域の貝では、シレナシジミが128個体出土している。この貝は時期は下るが、牧港川を隔てた対岸のチヂフチャ一洞穴遺跡（下地ほか1988）でも出土している。貝の大きさ（殻長）をみると、25mm～75mmに収まり、特に45mm～55mmが多い（第9表）。これを他の遺跡と比較すると、新城下原第二遺跡で

第6表 貝類遺体出土状況I（巻貝）

No.	科	種類	出土地 生息地	表 採		0aピット			1ピット			1aピット			2ピット			2aピット			3ピット			4ピット			4aピット			5ピット			不明		合計				
				完形	殻頂	殻底	破片	完形	殻頂	殻底	破片	完形	殻頂	殻底	破片	完形	殻頂	殻底	破片	完形	殻頂	殻底	破片	完形	殻頂	殻底	破片	完形	殻頂	殻底	破片	総合計	個体数						
1	ツタノハガイ科	不明	—													1															1	0							
2	ミミガイ科	不明	—																												1	1							
3	アマオブネガイ科	アマオブネ	I-1-b																												4	4							
4	アマオブネガイ科	マルアマオブネ	I-1-b	1																											3	2							
5	アマオブネガイ科	イシダタミアマオブネ	III-0-a																												1	1							
6	アマオブネガイ科	イトマキアマガイ	I-1-a																												2	2							
7	アマオブネガイ科	カバクチカノコ	IV-0-e																												4	2							
8	アマオブネガイ科	ドングリカノコガイ	IV-1-c																												1	1							
9	アマオブネガイ科	カノコガイ	III-1-e																												1	1							
10	ニシキウズガイ科	ギンタカハマ	I-4-a														5	2	5											3	1	1	2	41	24				
11	ニシキウズガイ科	オキナワイシダタミ	II-1-b	1	6												1	7	19	3	3	4	14	2	2	24			1	0									
12	ニシキウズガイ科	ウラウズガイ	I-2-a														1	2												1	1	4	93	28					
13	ニシキウズガイ科	ウズイチモンジ	I-2-a															1	1	2	2									6	5								
14	ニシキウズガイ科	ニシキウズガイ	I-2-a																											7	5								
15	リュウテンサザエ科	オオウラウズガイ	I-2-a																												1	1							
17	リュウテンサザエ科	チョウセンサザエ	I-3-a	1	3																										55	18							
18	リュウテンサザエ科	チョウセンサザエ蓋	I-3-a																												25	23							
19	リュウテンサザエ科	カンギクガイ	II-1-b	1																											2	0							
20	リュウテンサザエ科	ヤコウガイ	I-4-a																												8(同)	0							
21	オニツノガイ科	オニツノガイ	I-1-a																												1	29							
23	オニツノガイ科	ウミニナガニモリ	I-1-c																												1	1							
24	オニツノガイ科	ミツガドガニモリ	I-1-c																												1	1							
25	カワニナ科	カワニナ	IV-5・6	13		5	5																								5	18	1	216	1	234	35	645	557
26	ウミニナ科	キバミニナ	III-0-c																													1	1						
27	スイショウガイ科	マガキガイ	I-2-c	2	3	2	1																									209	183						
28	スイショウガイ科	ベニソデガイ	I-2-c																													1	1						
29	スイショウガイ科	クモガイ	I-2-c																												46	35							
30	スイショウガイ科	スイジガイ	I-2-c																													4	0						
31	スイショウガイ科	ラクダガイ	I-2-c																													1	1						
32	スイショウガイ科	不明	—																													3	0						
33	タカラガイ科	ハナマルユキダカラ	I-3-a																														3	2					
34	タカラガイ科	ホシダカラ	I-2-c																													2	4						
35	タカラガイ科	ハチジョウダカラ	I-1-a																													1	0						
36	タカラガイ科	ホソヤクシマダカラ	I-2-a																													1	1						
37	タカラガイ科	マクシマダカラ	I-2-a																													1	0						
38	タカラガイ科	不明	—																													1	0						
39	フジツガイ科	ホラガイ	I-4-a																													27	0						
40	フジツガイ科																																						

第7表 貝類遺体出土状況II(二枚貝)

No.	科	種類	出土地 部位 棲息地	表採			0aピット			1ピット			1aピット			2ピット			2aピット			3ピット			4ピット			4aピット			5ピット			不 明			合 計		
				完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	R	L	破片	個体数					
				R	L	R	R	L	L	R	R	L	R	R	L	R	R	L	R	R	L	R	R	L	R	R	L	R	R	L	R	L							
1 フネガイ科	リュウキュウザルボウ	II - 2 - c																																1	2	2	2		
2 タマカギ科	コタマカギ	I - 2 - c																																0	1	0	1		
3 フネガイ科	エガイ	I - 1 - a																																2	1	0	2		
4 フネガイ科	カリガネエガイ	I - 2 - c																																1	0	0	1		
5 フネガイ科	ベニエガイ	I - 2 - a																																0	1	35	1		
6 ウグイスガイ科	クロチョウガイ	I - 4 - a																																3	5	0	4		
7 ウミギクガイ科	ウミギク	I - 2 - a																																0	1	0	1		
8 ウミギクガイ科	ダンドクメンガイ	I - 2 - a																															1	1	0	1			
9 ウミギクガイ科	スンガイ	I - 2 - a																															0	2	0	2			
10 ウミギクガイ科	ミスイリショウジョウ	I - 2 - a																														9	11	4	10				
11 ウミギクガイ科	不明	I - 2 - a																														1	2	2	2				
12 ウミギクガイ科	不明	I - 2 - a																														4	3	5	4				
13 イタボガキ科	マガキ	—																														2	1	0	2				
14 ザルガイ科	リュウキュウザルガイ	II - 2 - c																														0	1	0	1				
15 ザルガイ科	ハナザルガイ	II - 2 - c																														134	113	18	116				
16 シャコガイ科	ヒメジャコ	I - 2 - a	2	4																											6	4	1	5					
17 シャコガイ科	ヒレジャコ	I - 2 - c			1	1																								3	10	5	9						
18 シャコガイ科	シラナミ	I - 2 - a																												1	14	6	2						
19 シャコガイ科	不明	I - 2 - c																												2	12	1	15						
20 シャコガイ科	シヤコウ	I - 2 - c																												1	1	1	1						
21 チドリマスオガイ科	イソハマグリ	I - 1 - c	9	18	1																									34	30	4	6						
22 バカガイ科	リュウキュウバカガイ	II - 2 - c																												1	0	0	1						
23 シジミ科	シジミ	—																												1	0	0	1						
24 シジミ科	シレナシジミ	III - 0 - c	3	3		12																							15	9	11	10							
25 マルスダレガイ科	ヌノメガイ	II - 1 - c																												1	1	1	1						
26 マルスダレガイ科	アラスジケマンガイ	III - 1 - c																												5	2	3	4						
27 マルスダレガイ科	ユウカゲハマグリ	II - 1 - c																											7	10	3	1							
28 マルスダレガイ科	スダレハマグリ	II - 1 - c	1	1	1	1																							19	12	2	5							
29 マルスダレガイ科	リュウキュウアサリ	II - 1 - c	4	1	1	2																							0	20	19	7							
30 マルスダレガイ科	オキシジミ	II - 1 - c	8	1	1	1																							0	14	21	12							
31 マルスダレガイ科	ハマグリ	II - 1 - c																											1	1	1	1							
32 マルスダレガイ科	不明	II - 1 - c																											1	0	0	1							
33 オキナガイ科	ヒロクシトオリガイ	—																											1	0	2	0							
34 イタボガキ科	不明	—																											0	0	57	0							
35 二枚貝	合計		16	26	5</td																																		

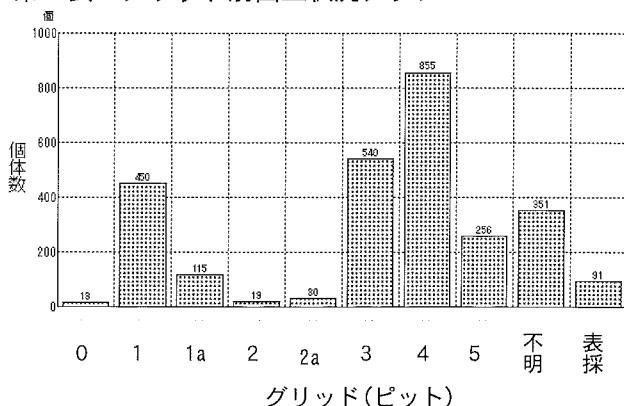
は65mm～85mm、チヂフチャ一洞穴遺跡（貝塚後期）では50mm～70mmが多く出土し、本貝塚出土のものはこれらの遺跡のものに比べて小さいようである。

外洋・サンゴ礁域では、I-2-a（以下、第8表参照）の245個体が得られ、その中でヒメジャコ116個体、シラナミ75個体、ウラウズガイ28個体が出土している。

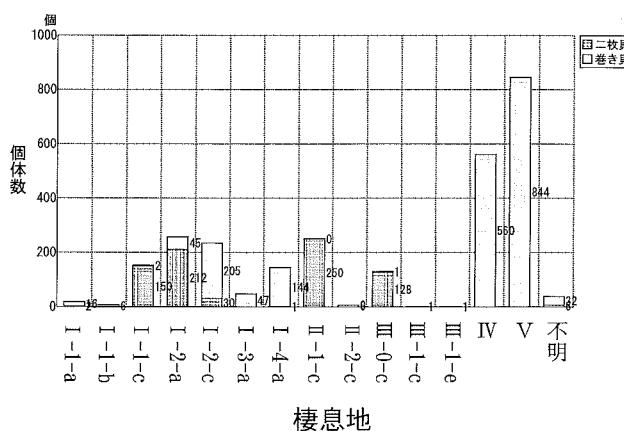
I-2-cは225個体が得られ、マガキガイ183個体が多く出土しているが、クモガイの破片153個も無視できない出土量である。この貝は新城下原第二遺跡でも同じような出土を示しており、マガキガイと並んで西海岸地域の特徴的な貝種のひとつとして位置付けられるようである。

I-4-aは145個体得られた。主な貝はサラサバティラの120個体、ギンタカハマの24個体である。

第11表 グリッド別出土状況グラフ



第12表 棲息地比率グラフ（棲息地分類は第8表参照）



サラサバティラの大きさは殻高84mm×殻径101(82)mmで、殻頂～次体層部分の殻表が剥離する。殻高49mm×殻径58(54)mm殻底近くの殻表が剥離する。

I-3-aは47個体得られ、主な貝はチョウセンサザエである。蓋23点、殻18個体、破片数55点で、蓋の数が多い。また、破片数が多いことから、殻を打ち割り採食していたと思われる。

内湾・転石域ではII-1-cの250個体が得られ、貝種ではオキシジミ171個体、イソハマグリ150個体、スダレハマグリ68個体などが出土している。また、少量ではあるが、焼け痕が見られる貝種は、イソハマグリ、ヒメジャコ、シレナシジミ、オキシジミ、カリガネエガイ、エガイ、リュウリュウサルボウ、チョウセンサザエ殻・蓋、クモガイ、ウラウズガイ、カワニナ、ホラガイ、オニノツノガイ、マガキガイなどが見られた。成因は加熱によるものと思われる。なお、貝種に差異は認められない。

また、近年の移入種であるアフリカマイマイが1個体混入していた。

脊椎動物遺体（図版12～14）

動物遺体の採取も貝類と同じで、15cmごとのピックアップ法によるものである。集計表については紙幅の都合もあり、グリッド・レベルは関係なくまとめた。ただし、出土量の少いものは一覧で示し、グリッド・レベル・注記についても表記し、あわせて図版番号も示した。

動物遺体の個体数の算出は、魚類は前上顎骨・歯骨に分け、多い方を個体数とした。

イノシシは各部位ごとに分け、近位部（心臓に近い関節部）、骨体（骨の中央）、遠位部（心臓に遠い関節部）に分け、数的に多い方、更に部位の中で多い方をとり個体数とした。以下、それについて略述する。

甲殻類ではウニ・カニ類が出土した。ウニは殻の破片が2点（U-420）確認され、カニはハサミの破片が得られた。

魚類では硬骨魚綱のブダイ科・ハタ科・フエフキダイ科・ヘダイ科・ハタ科・ハリセンボン科などが得られた。ブダイ科はナンヨウブダイとイロブダイ、フエフキダイ科ではハマフエフキが確認できた（第13表）。出土した魚類はいずれも岩礁に棲息する魚種である。骨の大きさをみると、ナンヨウブダイ下咽頭骨の幅は、7.8mm、9.5mmと小さい方である。ベラ科下咽頭骨の歯幅は、エナメル質部分が42.8mm、

第13表 魚骨出土一覧表

科	種	部位	点数			備考	図版
			右	左	破		
サメ目		椎骨		1		椎径21mm	11-1-12
フエキダイ科	ハマフエキ	上顎骨	2	1		28.5mm 37.5mm	11-1-1
フエキダイ科	ハマフエキ	歯骨	2	1	1	25.5mm	11-1-2
ベラ科		咽頭骨			1	歯幅542.8mm、ア65mm	11-1-11
ブダイ科		上顎骨	1		2		
ブダイ科		上顎骨	1		1	26mm	
ブダイ科	イロブダイ	上顎骨	1				11-1-3
ブダイ科	イロブダイ	歯骨	1	1			11-1-4
ブダイ科	イロブダイ	咽頭骨	1				11-1-7
ブダイ科	ナンヨウブダイ	咽頭骨			2	幅7.8mm、9.5mm	11-1-13
ハタ科		上顎骨	1			参考1;46.5mm	11-1-5
ハタ科		歯骨	1		2		11-1-6
ハリセンボン科		歯骨			2		11-1-10
不明		上顎骨					11-1-8
種不明		主上顎骨			2		
種不明		他					
他					35	方骨(1)、鋤骨(1)	
棘					2		
椎骨					20	径3.6, 13, 2.5, 11, 13.5, 10, 12, 9, 7, 4mm	
合計			11	3	67	3	

歯骨幅が65mmで大きい方である。椎骨の大きさは2.5mm~13mmを測り、平均して10mm台が多いようである。

ウミガメ科は2点の破片が確認され、リクガメ科は12点が出土した。部位が確認できるものは、上腕骨、背甲板（縁甲板・頂骨板・肋甲板）、腹甲板（下腹板）で、個体数は頂骨板から3個体が推定される（第14表）。

また、そのほとんどは第4ピット105~120cm及び135~150cmの深い地点から出土している。

第14表 ウミガメ・リクガメ出土骨一覧

種	部位	左右	点数	出土地点		注記	図版
				グリッド	レベル(cm)		
ウミガメ	背甲か腹甲板		2				11-4-1
	上腕骨		1			U-240	11-4-2
リクガメ	背甲板	縁甲板	1			U-240	11-4-5
			1	4	135~150		11-4-3
	椎骨板尾		2	4	105~120	U-466	11-4-7
	肋甲板		1	4	60~75	—	11-4-4
リクガメ	腹甲板		8				
	不 明		1			U-532	
	不 明		1			U-466	11-4-8
	下腹板	左	1	4	105~120	U-466	11-4-8
合計			19				

ヘビ目では椎骨が第1ピット30~40cmで出土している。鳥類は6点出土したが、種類は明瞭でない（第15表）。

第15表 トリ骨出土一覧

種類	部位	左右	部位a	点数	出土地点		注記	図版
					グリッド	レベル(cm)		
トリ				1	3a	90~105	U-230	11-3-6
トリ	四肢骨	不	骨体	1	4	105~120	U-466	11-3-4
トリ	四肢骨	不		1	0a	75~90	U-407	11-3-5
トリ	上腕骨	不	~遠位部	1	4	60~75	—	11-3-3
トリ	尺骨	右	~遠位部	1	b	30~40	—	11-3-2
トリ	大腿骨	左	近位部~遠位部	1	4	105~120	U-466	11-3-1
合 計				6				

哺乳類では海獣類、ネズミ類、イノシシ、イヌなどが出土している。

クジラ類は骨質が密なことから、肋骨と思われる破片が9点出土している。その中には加工痕らしきものが見られる資料も含まれる（第16表）。

ジュゴンは3点で、そのうちの1点は動物解剖学の北條暉幸によって報告された左上腕骨の完形で、全長195mm、重さ460gを測るものである（北條1976）。肋骨は1点で、第3ピット123cmで出土した。横断面の径は30.2×18.4mmを測る。

第16表 海獣骨出土一覧

種類	部位	左右	状態	点数	出土地点		注記	図版	備考
					グリッド	レベル(cm)			
ジュゴン	上腕骨	左	完形	1	—	—	—	12-8	北條1976
ジュゴン	頭骨?	—	破片	1	—	—	—	11-54	
ジュゴン	肋骨	—	ほぼ完形	1	3b1	123	—	11-5-5	径30.2×18.4mm
クジラ	肋骨	—	破片	2	—	—	—	11-5-2	
クジラ	肋骨	—	破片	1	—	—	—	—	
合 計				6					

ネズミは4点確認できた（第17表）。出土部位は下顎犬歯、脛骨、大腿骨である。この内、図版11-2-3・4の大転骨は、その大きさからケナガネズミ (*Diplothrix legata*) のものと思われる。

第17表 ネズミ骨出土一覧

種類	部位	左右	状態	点数	出土地点		注記	図版	
					グリッド	レベル(cm)			
ネズミ	犬歯	上顎	完形	1	—	—	U-320	11-2-1	
ネズミ	大腿骨	近位部	左	破片	1	4	105~120	U-466	11-2-4
ネズミ	大腿骨	P~d	右	1	—	—	—	11-2-3	
ネズミ	脛骨	骨体	不	1			—	11-2-2	
合 計				4					

イヌ骨では下顎骨第二後臼歯が1点確認された。歯冠長は19.3mmを測る。

イノシシ骨はリュウキュウイノシシのものである。出土骨では最も多く、264点が出土した。特に第3ピット90~105cm、第4ピット105~120cmで多く見られる（第10表）。最小個体数は、肩甲骨の数から7個体と考えられる。

また、四肢骨の計測値を比較すると、本貝塚出土のものは小型であることから、幼獣が多いことがわかる（第18表）。リュウキュウイノシシの各部位の状況をみると、頭骨・下顎骨は成・幼獣が見られるが、いずれも破片が細かい傾向がある。

下顎骨では成獣で M_3 の前、幼獣では dm_4 の前で割れているものが数点見られる。この傾向から、尖る前頭骨と後頭骨の部分を目安に解体していたものと思われる。この事象については、他の遺跡にも共通しているのか興味深い。下顎犬歯は雄5点、雌2点が出土した（第19表）。

次にイノシシ四肢骨の計測値を示す。計測の部位は平敷屋トウバル遺跡（金子1996）を参考にされたい。

上腕骨は12点出土した。最小幅SDの計測値は、6.0mm、6.4mm、7mm、70mm、7.3mm、19mm×12.7mm、13.4mmで、新城下原第二遺跡（金子・久貝2006）の最小5.7mm、最大13.1mm、平均10.4mmの値を参考に比較すると、小型の個体である傾向が見てとれる。

尺骨は8点出土した。計測値はSDO11.5mm、20.5mm（新城下原第二：最小15.7mm、最大22.8mm、平均15.7mm）で前者は小さく、後者は焼けて黒～灰色を呈する。他に幼獣と思われる破片が2点出土している。

大腿骨は12点得られた。最小幅SDの計測値は、8.5mm、8.7mmである。

脛骨は10点出土している。最小幅SD計測値は7mm、6.6mm、6.3mm、6.0mmである。腓骨は3点出土した。

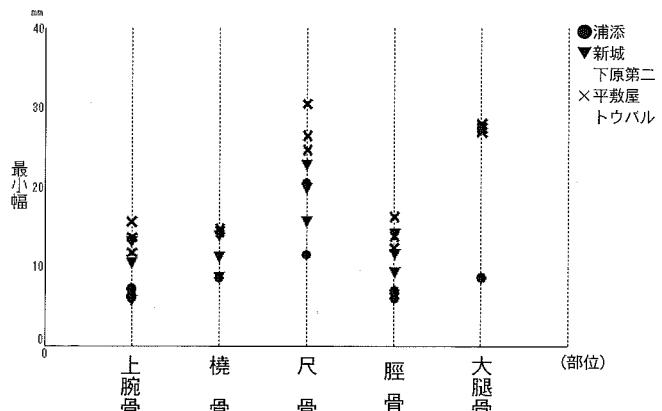
肩甲骨は14点出土した。そのほとんどが骨体～遠位端で、左7点、右2点が出土している。この集計から、イノシシの最少個体数は7個体と考えられる。骨の大きさも様々である。計測値は次の①～③に示した。

①SLC11.8mm、GLP26mm、SD21mm

②SLC14.3mm、7.5mm

③SLC10mm、13.5mm

第18表 イノシシ四肢骨（SD）比較



第19表 イノシシ咬耗度一覧

種類	部位	部位a	新城下原 第二遺跡	出土地点	
				注記	グリッド レベル(cm)
イノシシ	下顎 左	$dm_4(+,-,-)<M_1>$	I-1	U-466	4 105~120
	下顎 左	$dm_4(+,-,-)<トジ>$	I-1	U-466	4 105~120
	下顎	$p_2(-), p_3(-), dm_4(+,+,-), M_1(<欠>)$	I-1		
イノシシ	下顎 左	$M_3(+,-,-)$	III-3:2才	U-466	4 105~120
	下顎 左	$M_2(+++,+)$	V-2:4·5才	U-466	4 105~120
	下顎 左	$M_2(+++,+)$	V-2:4·5才	U-466	4 105~120

寛骨は2点出土した。臼部の計測値はSC18.3mm×11.1mm、橈骨はSD8.5mm（新城下原第二：最小8.7mm、最大13.9mm、平均11.2mm）、脛骨はSD6.0mm、6.5mm、6.6mm、7mm（新城下原第二：最大9.3mm、14.2mm、平均11.6mm）であった。また、距骨が1点出土している。

そのほか、ヒトの右腓骨片が1点含まれる（図版7b）。本資料は筒状のため、腓骨の中央付近と思われる（図版7b人骨部位図）。

考 察

以上、浦添貝塚から出土した資料の報告を行った。考察に際し、あらためてまとめてみたい。

浦添貝塚は、浦添丘陵と称される石灰岩丘陵崖下、標高約70mの傾斜地に形成された遺跡である。その崖上の岩陰には、英祖王の父、恵祖世主のものとされる高御墓が構築されている。この墓の前庭部からは、貝塚出土土器と同型式の土器片が採取されていることから、貝塚上部には浦添貝塚を残した人々の居住域が存在していた可能性が考えられる。

貝塚はその直下で帶状に分布しているため、この堆積物は崖上の居住域から投棄されたものと考えた方が自然であるが、出土遺物からは第Ⅰ層・Ⅱ層間に差異が認められなかつたため、堆積の原因是自然崩落によるものか、あるいは高御墓構築時に人為的に落とされた二次的要因も考えられる。

貝塚の時期については、出土土器のバリエーションからある程度の年代幅を持つと思われるが、遺物包含層は単一で、遺構は確認されていない。次に出土遺物について記す。

土器はすべて破片資料のため全形を窺うことはできないが、文様は先端が三角形あるいは半円状の施文具による押引文が主体となる。また、二枚貝腹縁による貝殻文が施されている資料も出土している。これらの特徴から判明している型式名を羅列すると、奄美諸島において宇宿下層式土器（河口1957）として包括される面縄前庭式、面縄東洞式、嘉徳Ⅰ式A土器のほか、沖縄島を中心に分布する仲泊a式・仲泊b式土器、南九州の市来式土器及び大隅諸島を圏内とする一済式土器に類似した資料も含まれる。

このような土器形式の概念は、調査時点において、県内では類例に乏しかつたため、その系譜についても判然としない点が多かったが、その後発掘例は増加し、徐々にその様相が明らかになってきた。その一例として挙げると、報告された当初（新田1970・1971）に爪形隆線条痕文土器と仮称していた土器は面縄前庭式土器に、爪形文・刺突文土器は、面縄東洞式及び嘉徳Ⅰ式A土器となり、また、口縁断面の形状から市来式系統とされていた土器は、仲泊式土器として型式名が設定されている。

そのほか、特殊な例として壺形及び二重口縁の面縄東洞式も見受けられる。底部資料の出土は少ないが、尖底及び平底両者の存在が認められる。

これらの土器の胎土混入物には石灰岩粒が見られず、石英、チャート、角閃石、金雲母等が見られること及び、器面調整においても伊波式・荻堂式に見られる櫛目状の擦痕が確認できない。また、沖縄市仲宗根貝塚（嵩元ほか1980）での上層（第V層）から伊波・荻堂式が出土し、下層（第VI層）から面縄東洞式及び嘉徳Ⅰ式土器が出土しているという層位的事実からも、浦添貝塚出土土器は、伊波式・荻堂式に先行するものとして押さええることができる。こ

のような状況から、本貝塚の中心となる時期は縄文後期前半であることが考えられる。

さらに、この胎土混入物のひとつであるチャートに関しては、粒子の角が丸く、破碎したような鋭い剥片でないことが確認できた。このことからチャート粒子混入土器は、北谷町以北のチャートを産出する地域周辺で焼成されたか、あるいは原料となる土を携えた集団が移動して製作した可能性も考えられる。

次に、今回の調査成果において最大の目玉といえる市来式土器は、口縁部のみの出土であったが、鹿児島県草野貝塚（河口1952）の事例から、その断面形状が「く」の字を呈する点及び、文様が複雑・華麗且つ施文範囲が広いという点で、市来式の新しいタイプに位置付けられる（河口1957・本田1994）。この発見により、市来式土器の分布域がより広範に及ぶことが実証されるとともに、文化的に沖縄・九州間をつなぎ、双方の土器編年の対比が可能となつた。

なお、この市来式土器については発見後、南島の土器とのつながりを模索し、肥厚口縁を理由にカヤウチバンタ式土器の源流をなすものとして考察された時期もあったが（高宮1974）、現在では面縄東洞式との関係が深いという見解に達している（河口1979）。

また、浦添貝塚の土器組成は、いわゆる奄美系土器を主体としていたことから、うるま市隅原遺跡の事例（高宮ほか1976）とともに、南下奄美人のコロニ一形成の可能性を想起させる材料となった（高宮1987）。

次に、石器は総数で19点が得られている。第3ピットで石皿と磨石が近接して出土したほか、小型の敲石が数点出土している。これらの石器は堅果類の粉食加工に用いた可能性が考えられ、食料加工の一端を示している。また、千枚岩を薄く研磨した小型のノミ状石製品も出土している。その他チャート片が19点含まれており、石鏸等の製品加工の可能性を示している。

これらの石材に関しては、県内において産出しない輝緑岩製の敲き石ほか2点が含まれており、市来式土器とともに北方地域からもたらされた可能性が考えられる。今後、本石材の産出地を特定すること

により、移入ルートが割り出せるものと思われる。

貝製品は総数で13点が出土している。その種別は、クロチョウガイ及びヤコウガイ製の殻、イモガイ製の玉及び札状の製品、ウミギクガイ科の貝輪、有孔ホラガイ、スイジガイ製利器等が得られている。

骨製品はイノシシやクジラ、ジュゴンの骨を利用した製品のほか、イノシシ牙及びサメ歯に穿孔した製品が主体をなし、用途は腕輪や垂飾品等の装身具及び、鈸等の実用品とに分けることができる。

自然遺物では貝類が大部分を占めており、その他イノシシや魚類の骨が出土している。これら自然遺物の出土は、第1及び第3～5ピットにかけて岩の間に多く見られるが、これは貝塚が崖に接しているために、その裂け目か落石の隙間に集中して堆積したものと思われる。

貝類は陸産貝が量的に最も多く、ほかに外洋・珊瑚礁域、河口干潟・マングローブ域産の順で得られている。この棲息域の状況及び貝種は、当時の自然環境及び狩猟採集時の行動範囲を如実に物語るものであるが、これらの貝類は、同様な種が現在も当地周辺において採取されることから、部分的視野で見ると、周辺環境は当時からさほど変化していないということができる。この中でシレナシジミについては計測を行い、数遺跡と比較を行った。

動物骨ではイノシシが260点と最も多く、他にネズミ、ジュゴン、鳥類、は虫類、魚類の骨が得られている。イノシシ骨では、乳歯が出土している点及び、四肢骨に見られる骨端癒合の程度から幼獣が多く、小型のイノシシも補食していたことがわかる。なお、この中で骨錐に多用される尺骨の出土は少ない。

魚はハマフエフキ、ハタ類等の岩礁域に棲息する魚類が多く、狩猟時の行動範囲を推測する上で興味深い。

また、出土骨で最大のジュゴン上腕骨については、国立科学博物館所蔵のジュゴン骨格標本と照合し、ジュゴンの成獣左上腕骨であるとする解剖学的分析を行った上で、人類学的観点から、他の検出例や先島及び南洋諸島周辺の民俗事例を参考にした論考が提出されている（北條1976）。

これらの食料残滓の構成から、浦添貝塚人は、遺跡周辺の陸・海・河川すべての環境において採取で

きる動植物を巧みに利用しながら、生活を営んでいたことが窺える。出土貝類の種別からすれば、特に河川（牧港川）への依存度が高い傾向が見られ、周辺の遺跡分布状況からも見えるように、牧港川は長きにわたり、人々の生活の中で重要な位置を占めていたことが理解できる。

以上、これまで概観した浦添貝塚に見られる資料の構成は、近年になり調査事例が増えつつあるが、特にうるま市石川に所在する古我地原貝塚（島袋編1987）の事例は、その立地や周辺環境も含めて符合する要素が多数見受けられることから、両遺跡は同時期に類似する文化を共有していた可能性を考えられる。このような例も考慮し、今後様々な観点から奄美圏をも含めた広範な比較検討を行い、この時期の文化について解明していく必要がある。

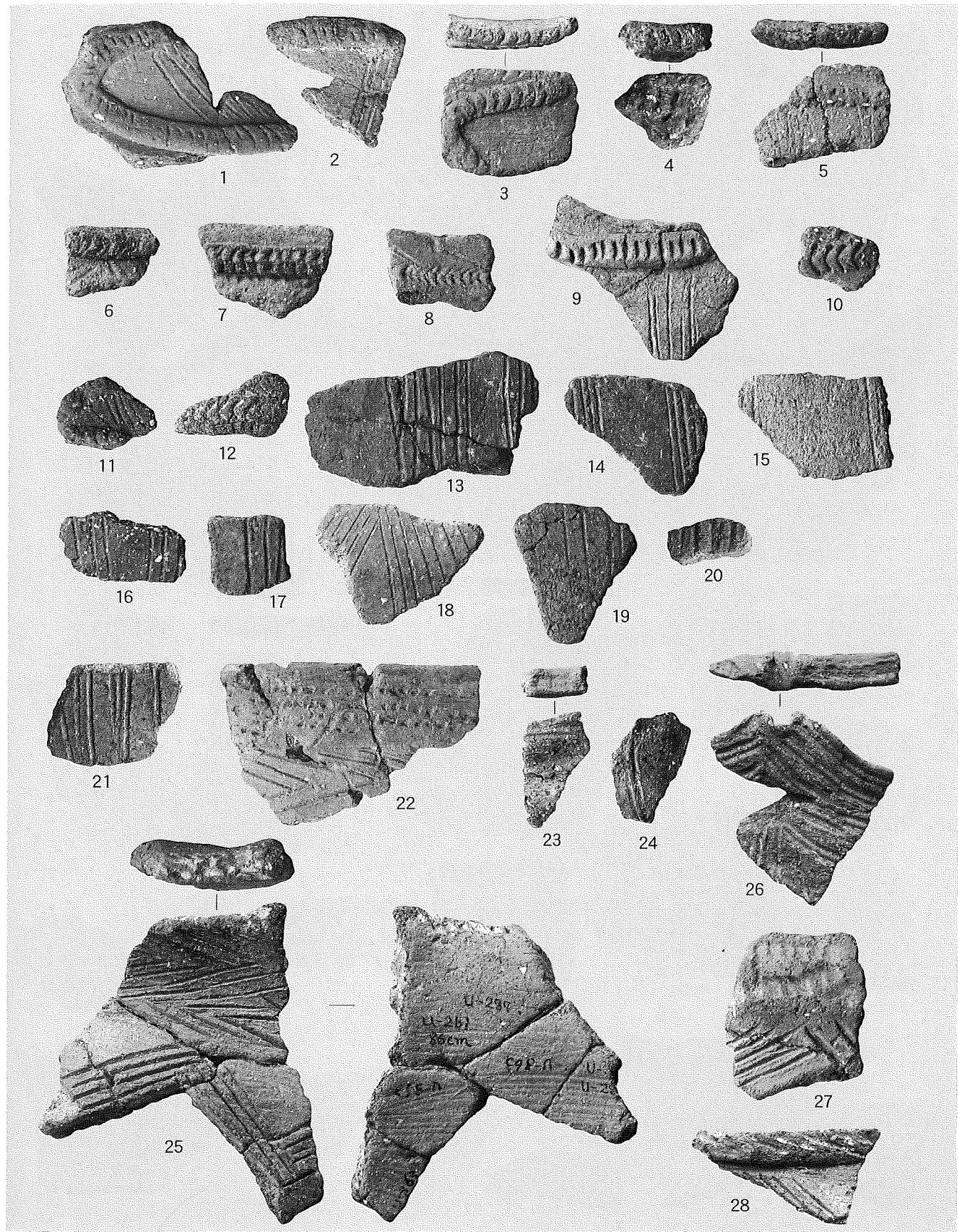
さいごに、浦添貝塚の調査が行われた当時の沖縄は、日本復帰直前の各種運動が盛んな時期で、そのころ行われた発掘調査もそれに共鳴するように、沖縄県（琉球政府）民として、あるいは自己のアイデンティティーを発掘するという意識で調査を行っていたような感がある。

浦添貝塚の調査も例外でなく、調査に携わった浦添高校郷土史研究クラブのメンバーも、そのような風潮の中で、学生なりの哲学をしつつ日々を過ごし、調査に臨んでいたのではないだろうか。浦添貝塚の調査成果は、このような混沌とした時期において、まさにタイムリーといえる結果となった。市来式土器の発見である。この発見は、沖縄考古学の編年作業にあらたな指標を与えるとともに、日本との考古学的つながりを確信させるものとなった。このことは、その数年後に読谷村渡具地東原遺跡で発見された曾畠式土器によりさらに広がりを見せることとなるが、浦添貝塚の調査は、その出発点として記念すべきものとなっている。

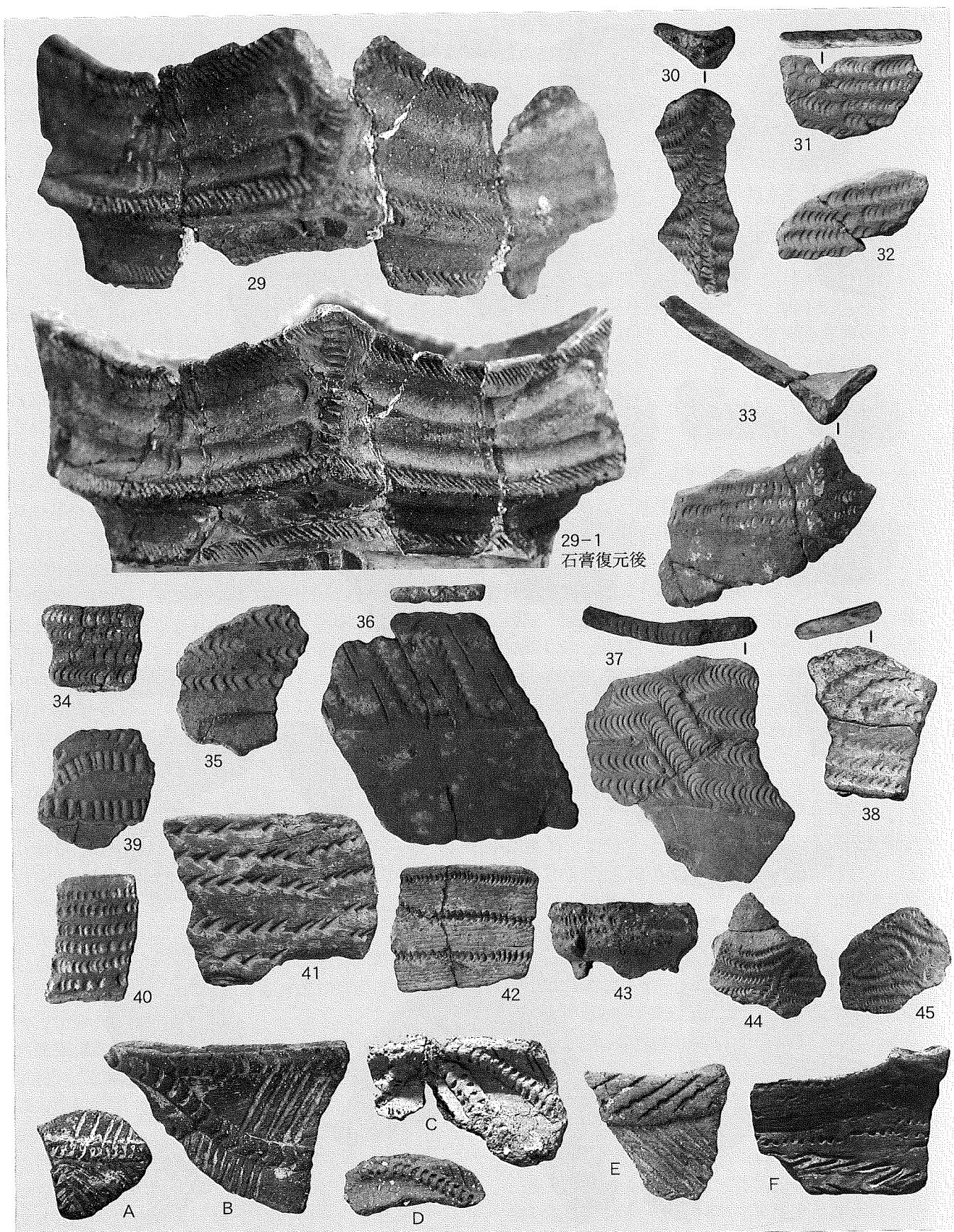
さらには、このような地道な活動が結果的に世論を動かし、遺跡を現地保存するはこびとなり、史跡指定という保護措置を執るまでに至ったことは、最大の成果といえよう。

引用文献

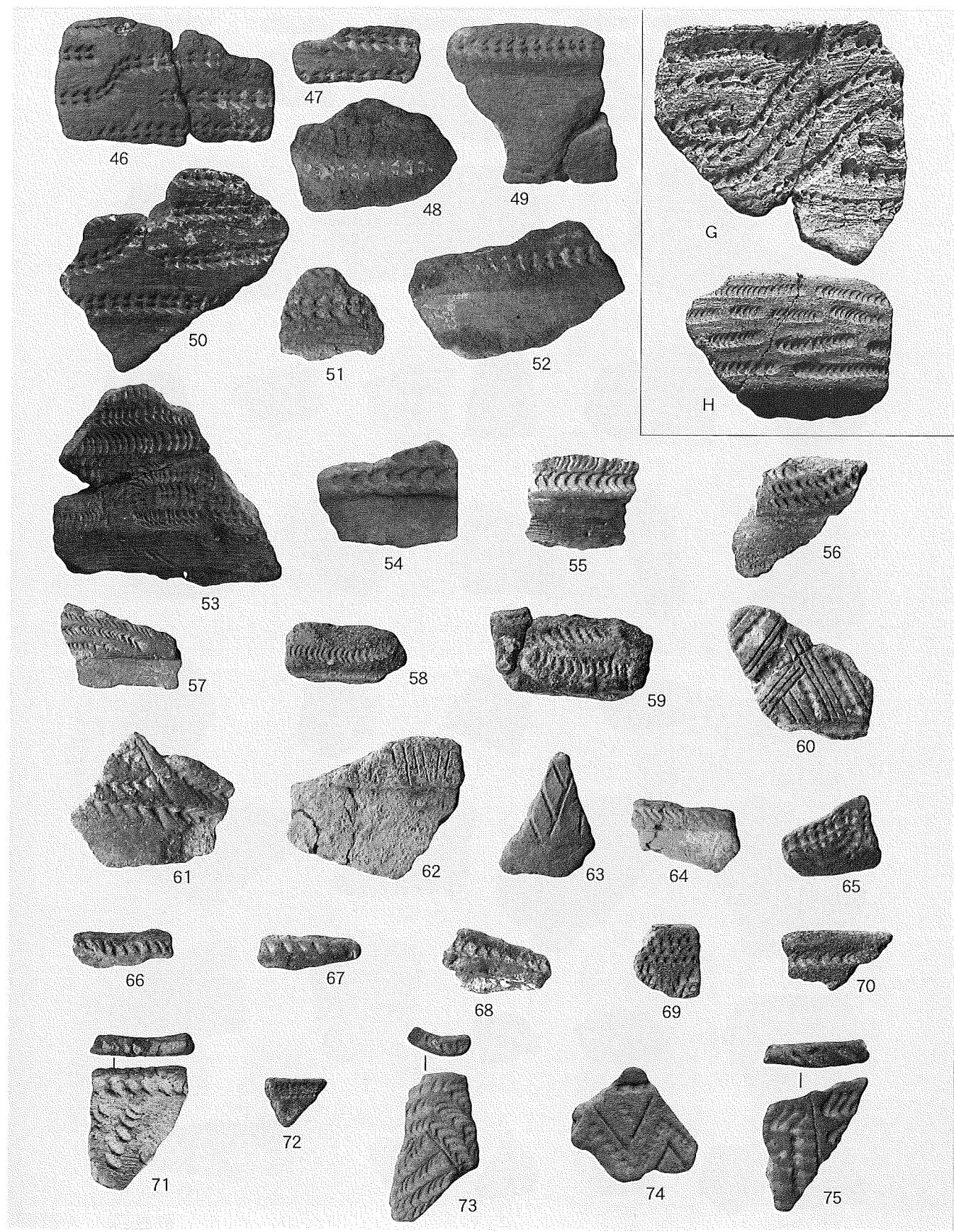
- 河口貞徳. 1952. 「草野貝塚発掘報告」『鹿児島県考古学会紀要第1号』鹿児島県考古学会
- 河口貞徳. 1957. 「南九州後期の縄文式土器」『考古学雑誌第42巻第2号』日本考古学会
- 国分直一・河口貞徳ほか. 1959. 『奄美大島の先史時代』九学会連合奄美大島共同調査委員会
- 多和田真淳. 1960. 「琉球列島の貝塚分布と編年の概念 補遺(一)」『琉球政府文化財要覧1960年版』琉球政府文化財保護委員会
- 沖縄タイムス社. 1970. 「市来式土器を発見、本土との文化的交流を実証、浦添高郷土研究クが発掘」『沖縄タイムス(7/28)』沖縄タイムス社
- 琉球新報社. 1970. 「浦添貝塚から縄文土器—浦添高郷土研が発見—鹿児島との交流新資料」『琉球新報(7/28)』琉球新報社
- 喜屋武ほか. 1970. 「浦添貝塚」『うらおそい創刊号』浦添高校郷土史研究クラブ
- 新田重清. 1970. 「浦添貝塚発掘調査概報」『南島考古創刊号』沖縄考古学会
- 新田重清. 1971. 「沖縄浦添市浦添貝塚出土の市来式土器について」『古代文化 第23巻第9・10号』財団法人古代学協会
- 新田重清. 1972. 「浦添貝塚の保存をめぐって①～④」『琉球新報夕刊(3/14～17)』琉球新報社
- 新田重清. 1973a. 「浦添貝塚の保存をめぐって『南島考古だより11・12号』沖縄考古学会
- 新田重清. 1973b. 「特集・1972年の考古学界の動向(7) 南西諸島(沖縄県)」『考古学ジャーナル臨時増刊号No.81』ニューサイエンス社
- 高宮廣衛. 1974. 「いわゆるカヤウチバンタ式土器と宇佐浜式土器について」『沖縄国際大学文学部紀要2-1』沖縄国際大学
- 河口貞徳. 1974. 「嘉徳遺跡—大島郡瀬戸内町嘉徳砂丘遺跡の調査—」『鹿児島考古第10号』鹿児島考古学会
- 高宮廣衛ほか. 1976. 「具志川市隅原遺跡発掘調査概報」『沖国大考古第1号』沖縄国際大学文学部考古学研究室
- 北條暉幸. 1976. 「浦添貝塚出土ジュゴンの上腕骨の同定と解剖学的ならびに人類学的考察」『人類学雑誌 第84巻第2号』日本人類学会
- 金武正紀編・比嘉春美. 1978. 「石製品、土製品」『沖縄県文化財調査報告書第17集 津堅島キガ浜貝塚発掘調査報告書』沖縄県教育委員会
- 河口貞徳ほか. 1979. 「宇宿貝塚」『鹿児島県笠利町文化財調査報告書』笠利町教育委員会
- 嵩元政秀ほか. 1980. 『仲宗根貝塚—第1・2次発掘調査概報一』沖縄県教育委員会
- 金武正紀ほか. 1980. 『宇検貝塚群・アカジヤンガ貝塚発掘調査報告』具志川市教育委員会
- 上原靜. 1981. 「いわゆる南島出土の貝製利器について」『南島考古第7号』沖縄考古学会
- 當眞嗣一・上原靜. 1982. 「伊武部貝塚発掘調査について」『南島考古だより25号』沖縄考古学会
- 金武正紀ほか. 1985. 『沖縄県文化財調査報告書第67集シヌグ堂遺跡—第1・2・3次発掘調査報告一』沖縄県教育委員会
- 高宮廣衛. 1987. 「うるまの島じま」『地方文化の日本史(1)－光は西から－』文一総合
- 島袋洋編. 1987. 『沖縄県文化財調査報告書第84集 古我地原貝塚—沖縄自動車道(石川～那霸間)建設工事に伴う緊急発掘調査報告書』沖縄県教育委員会
- 黒住耐二. 1987. 「遺跡出土貝類の棲息場所類型化の試み」『沖縄県文化財調査報告書第84集 古我地原貝塚—沖縄自動車道(石川～那霸間)建設工事に伴う緊急発掘調査報告書』沖縄県教育委員会
- 下地安弘ほか. 1988. 『浦添市文化財調査報告書第12集 チヂフチャーダン穴遺跡範囲確認調査報告書』浦添市教育委員会
- 本田道輝. 1994. 「市来式土器」『縄文文化の研究4 縄文土器II』雄山閣
- 中山清美. 1995. 『笠利町埋蔵文化財発掘調査報告書第20集 用見崎遺跡』笠利町教育委員会
- 金子浩昌. 1996. 「動物遺体」『沖縄県文化財調査報告書第125集 平敷屋トウバル遺跡—ホワイトビーチ地区内倉庫建設工事に伴う緊急発掘調査報告書』沖縄県教育委員会
- 島袋春美. 2006. 「貝類遺体」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第35集新城下原第二遺跡—キャンプ瑞慶覧内整備工場建設に係る緊急発掘調査報告一』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 金子浩昌・久貝弥嗣. 2006. 「動物遺体」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第35集新城下原第二遺跡—キャンプ瑞慶覧内整備工場建設に係る緊急発掘調査報告一』沖縄県立埋蔵文化財センター



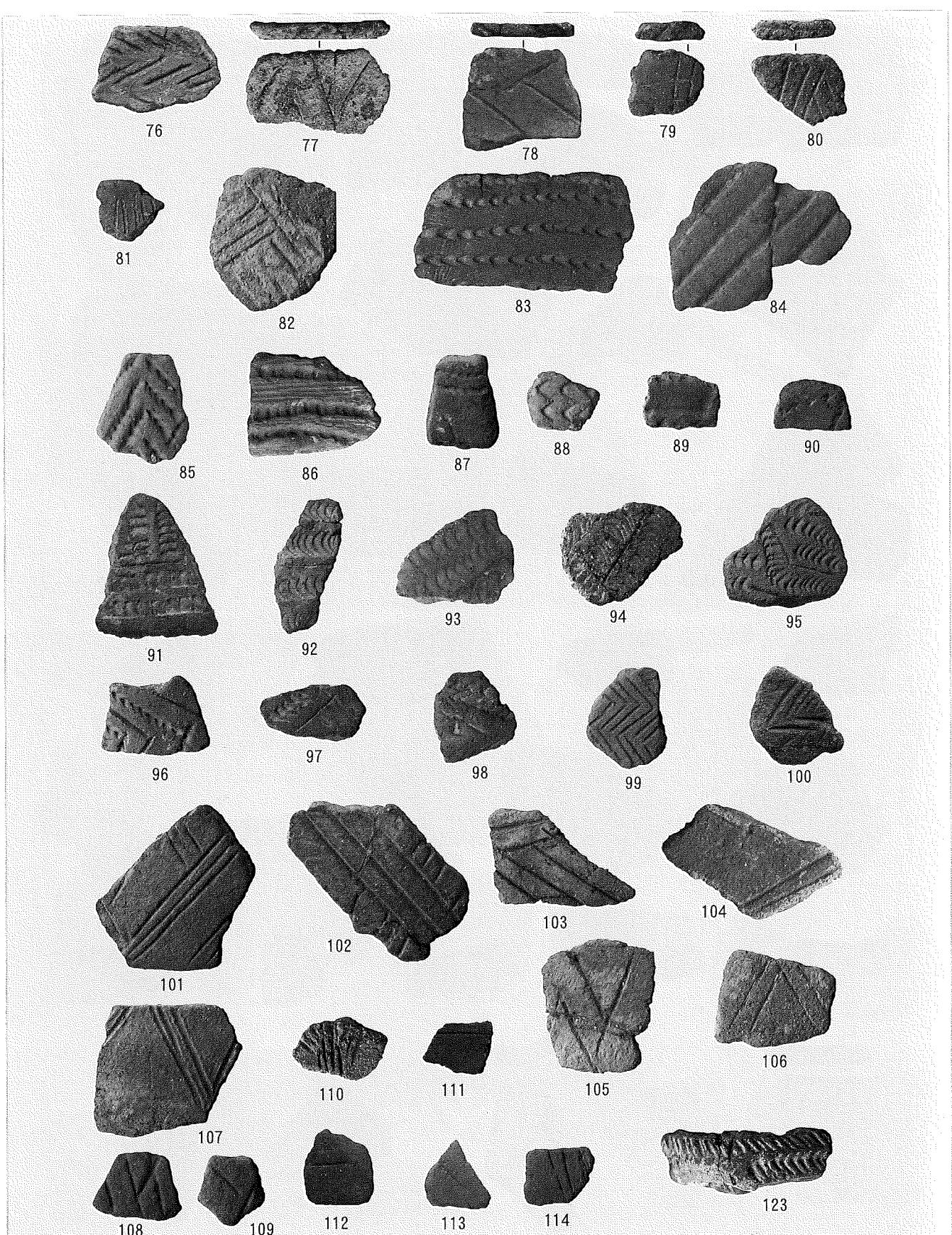
図版1 土器（1）面縄前庭式土器群（1～21）、仲泊式土器群（22～28）



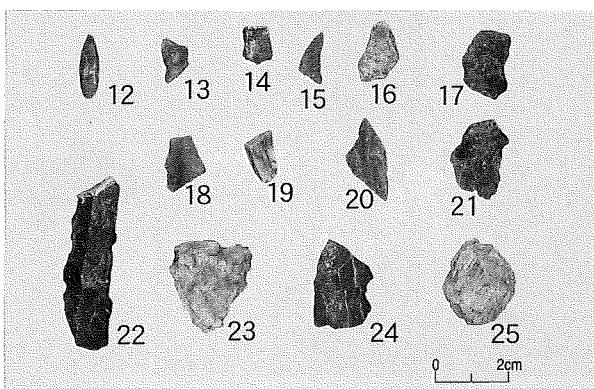
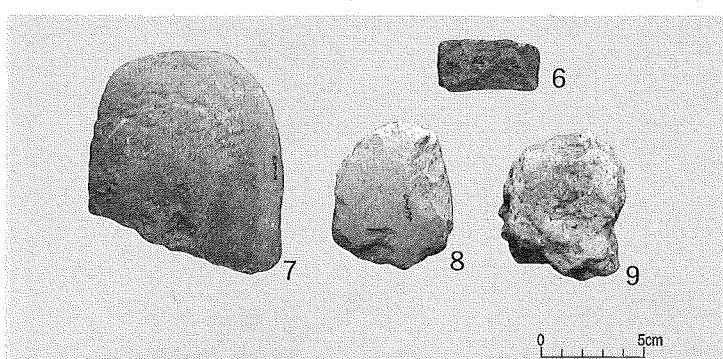
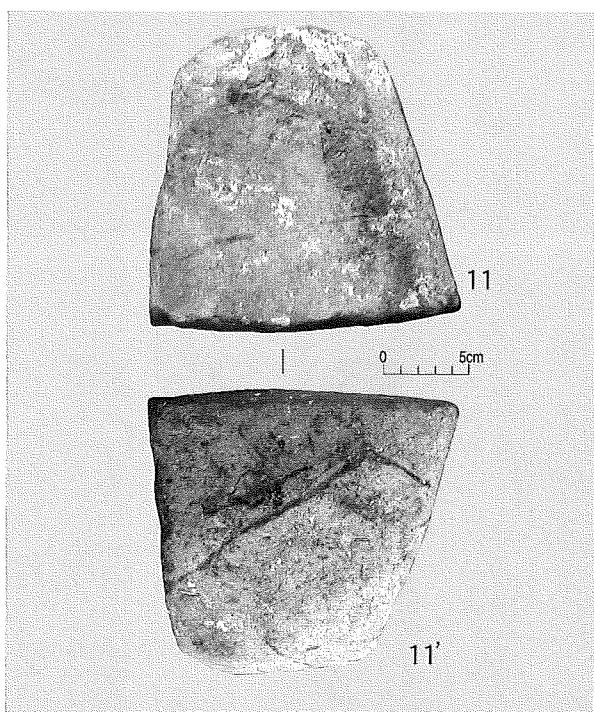
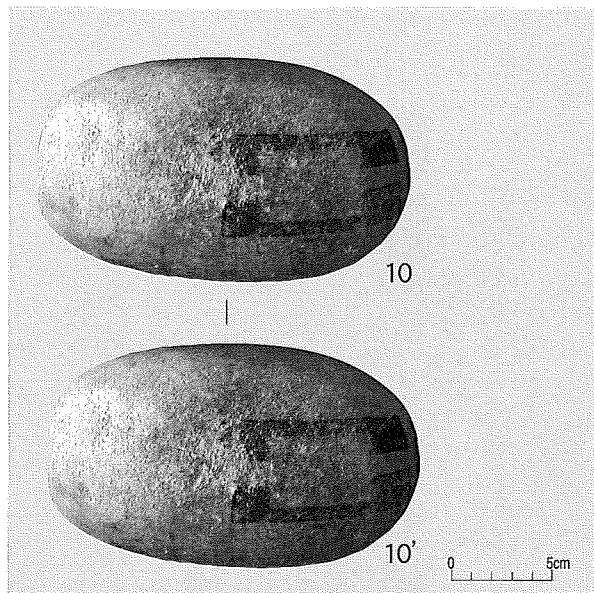
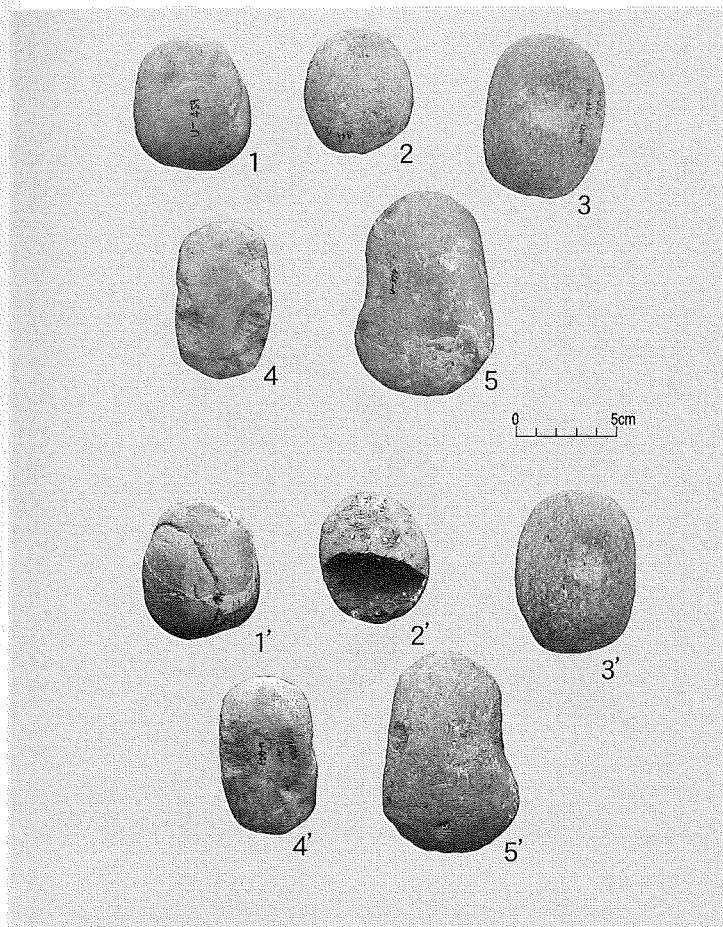
図版2 土器(2) 市来式土器(29)、宇宿下層式土器群(30~45)、面繩前庭式土器群(A~D)、仲泊式土器群(E・F)



図版3 土器(3) 宇宿下層式土器群(46~75, G・H)

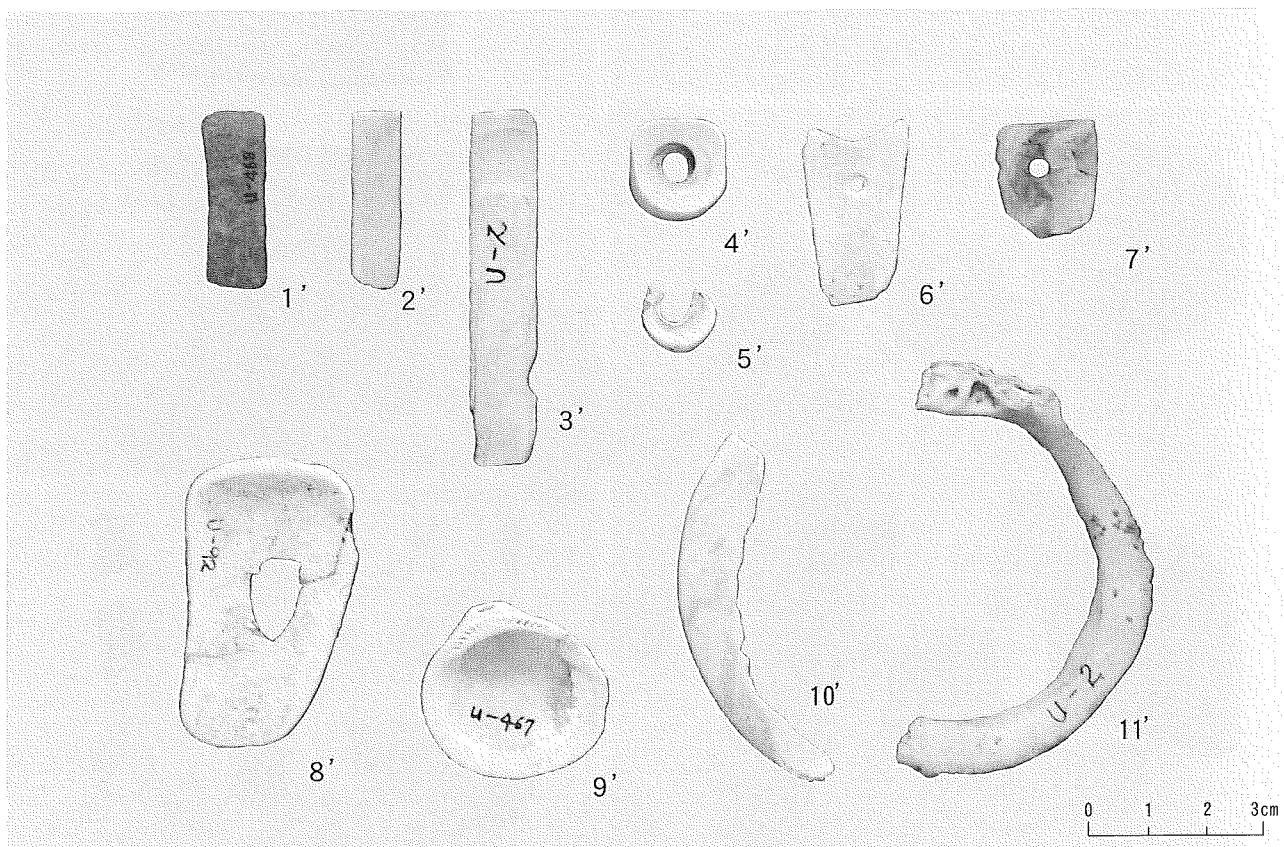
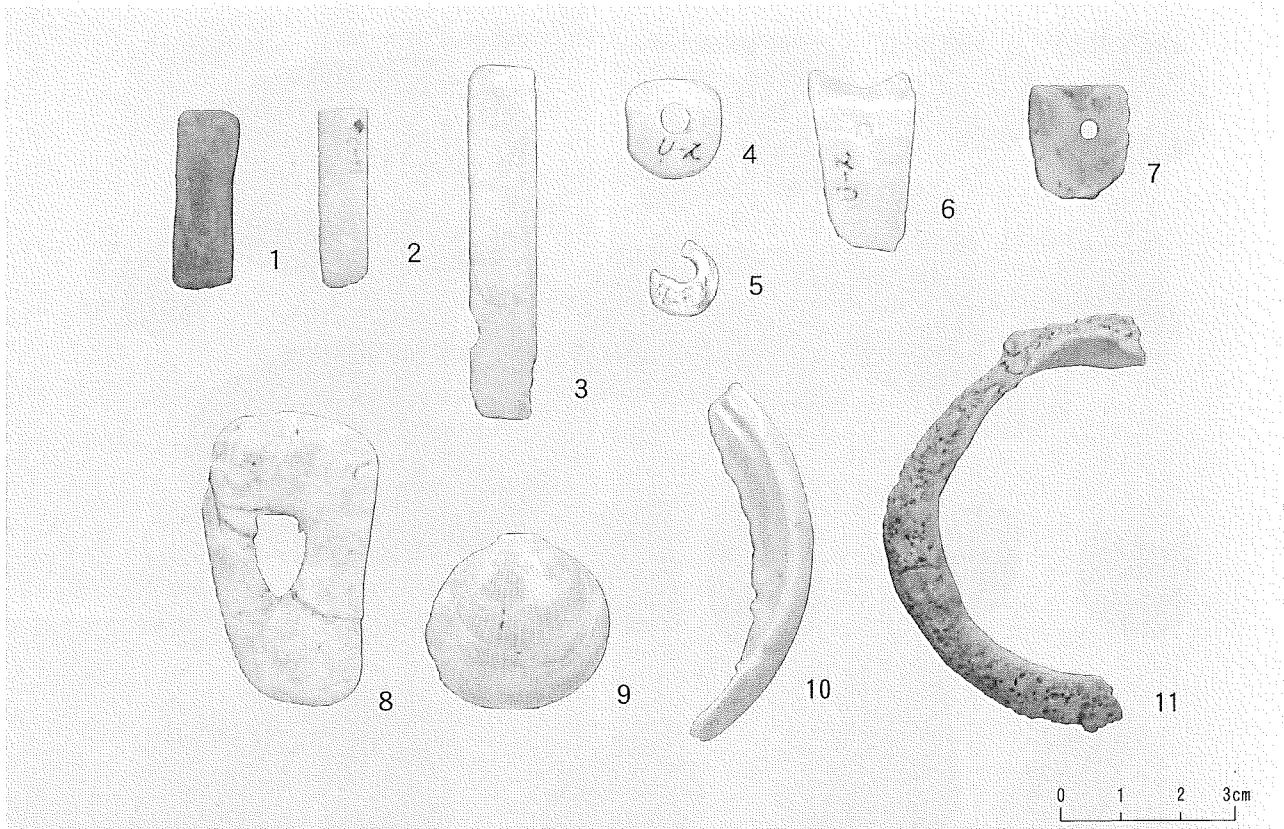


図版4 土器(4) 宇宿下層式土器群(76~123)



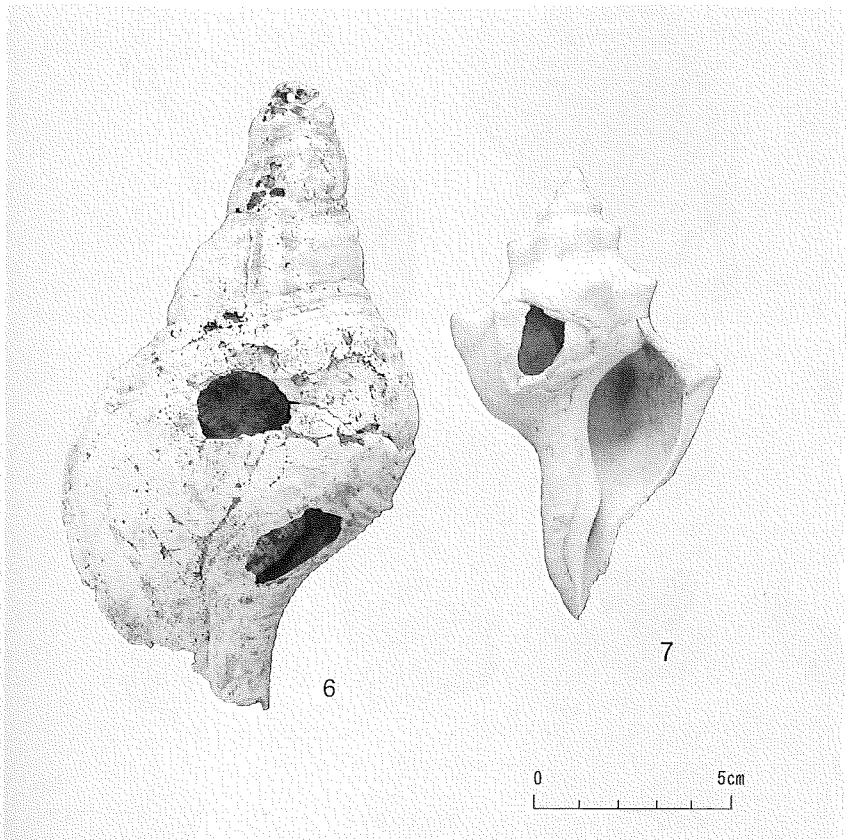
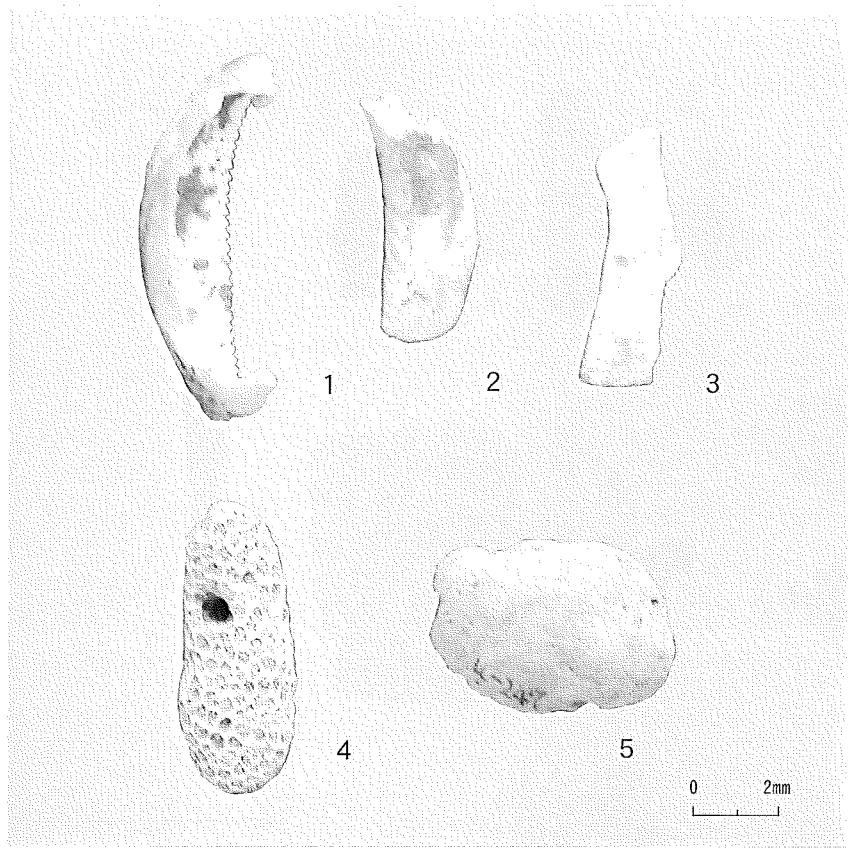
図版5 石器類

敲打器類(1~5・7~9)、打製石器(6)、磨石(10)、石皿(11)、チャート(12~25)



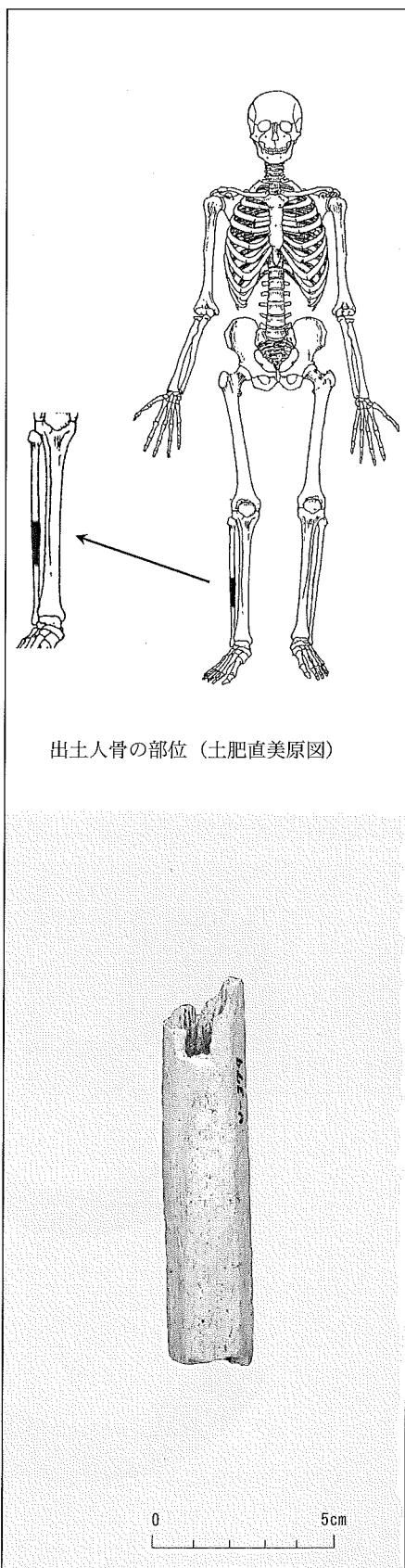
図版6 石・貝製品（1）

1：石製品（ノミ状製品）、2・3：札状製品、4・5：貝玉、6・7：貝鏃、8：カバミナシ、
9：ソメワケグリ有孔、10：サラサバティラ貝輪、11：メンガイ類貝輪

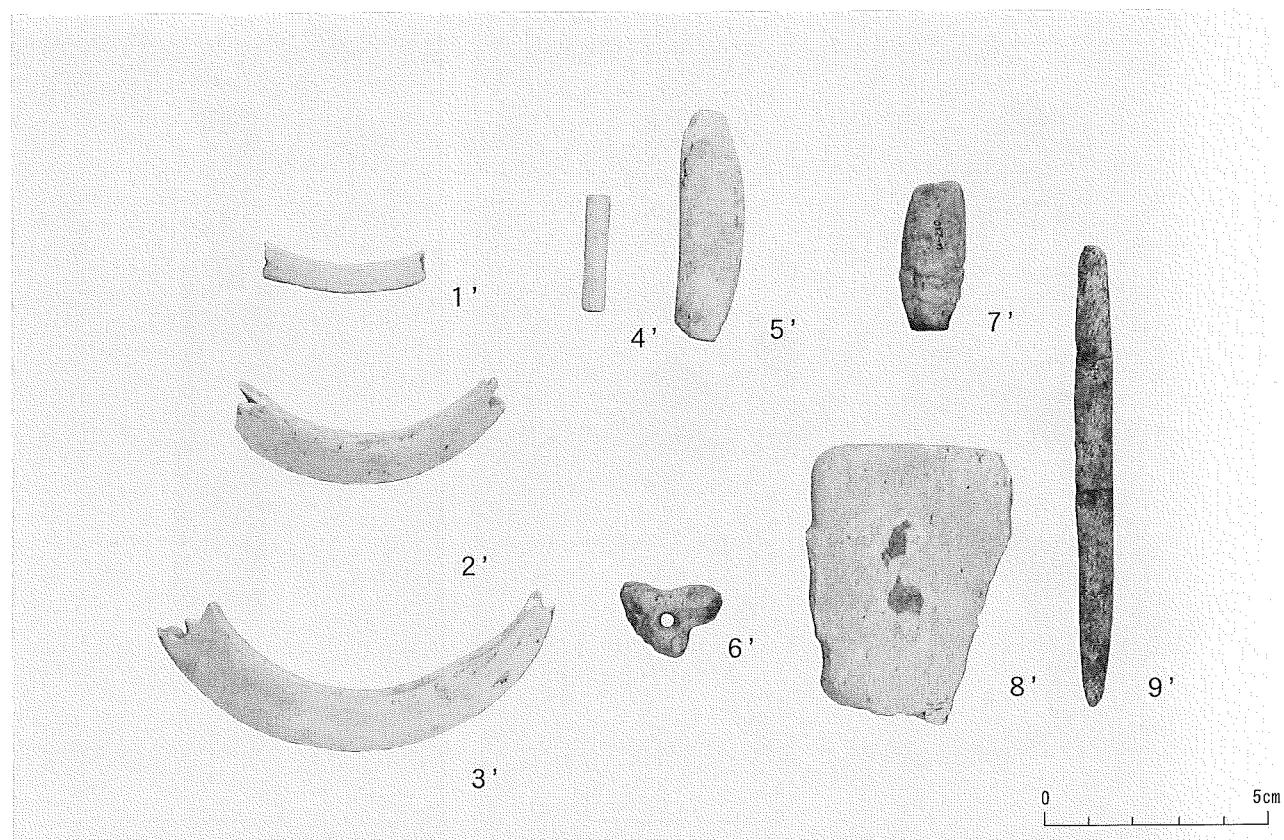
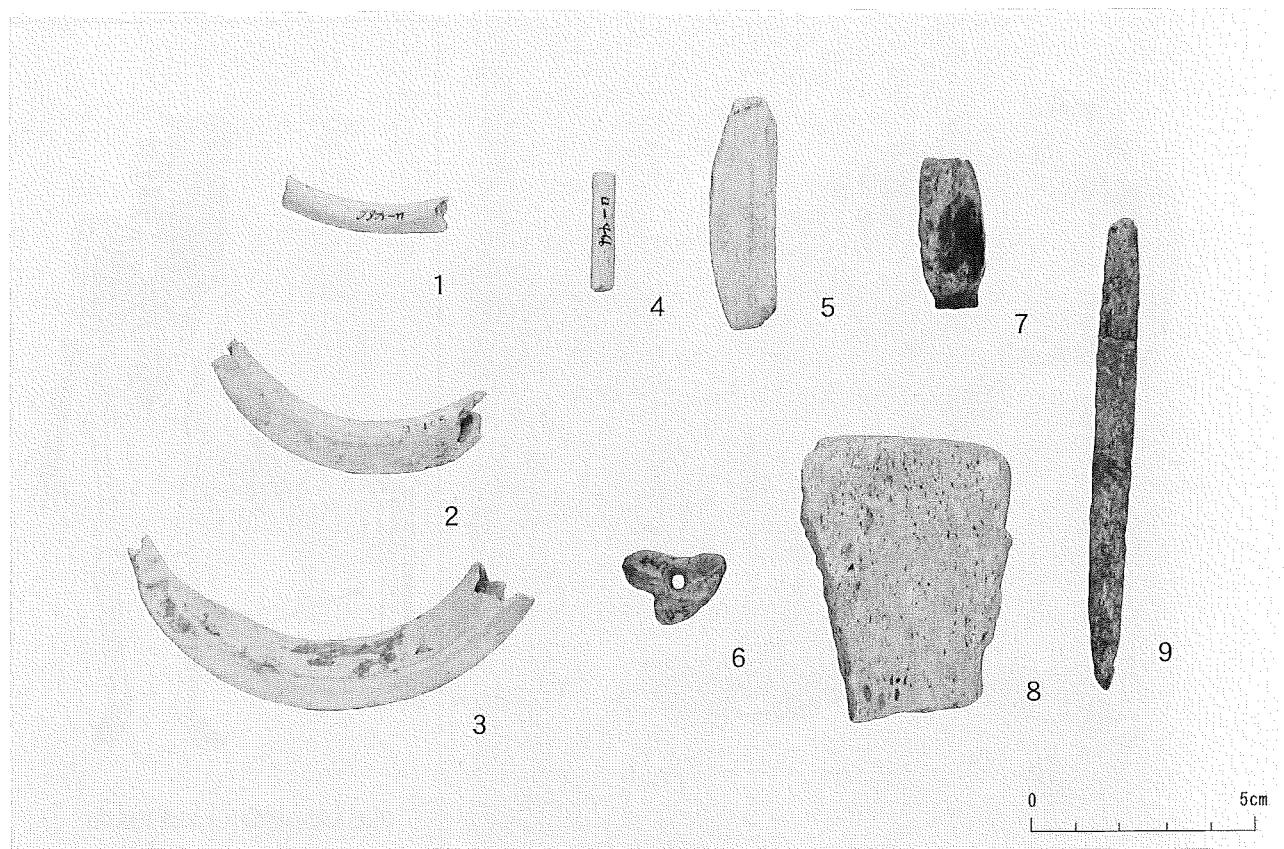


図版7 a 石・貝製品(2)

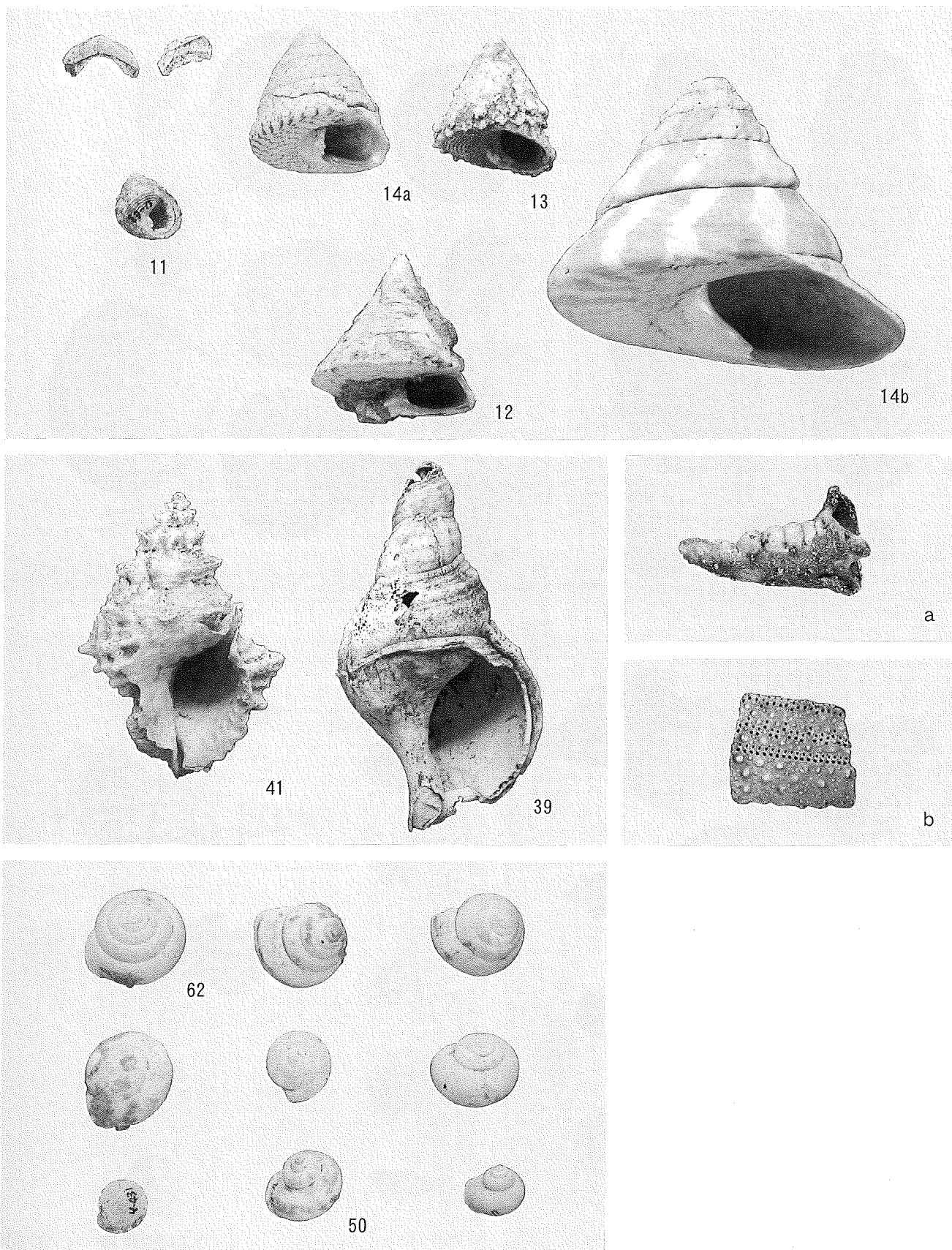
1 : ヤクシマダカラ有孔、2 : スイジガイ利器、3 : ヤコウガイ自然、4・5 : サンゴ有孔、
6 : ホラガイ有孔、7 : イトマキボラ有孔



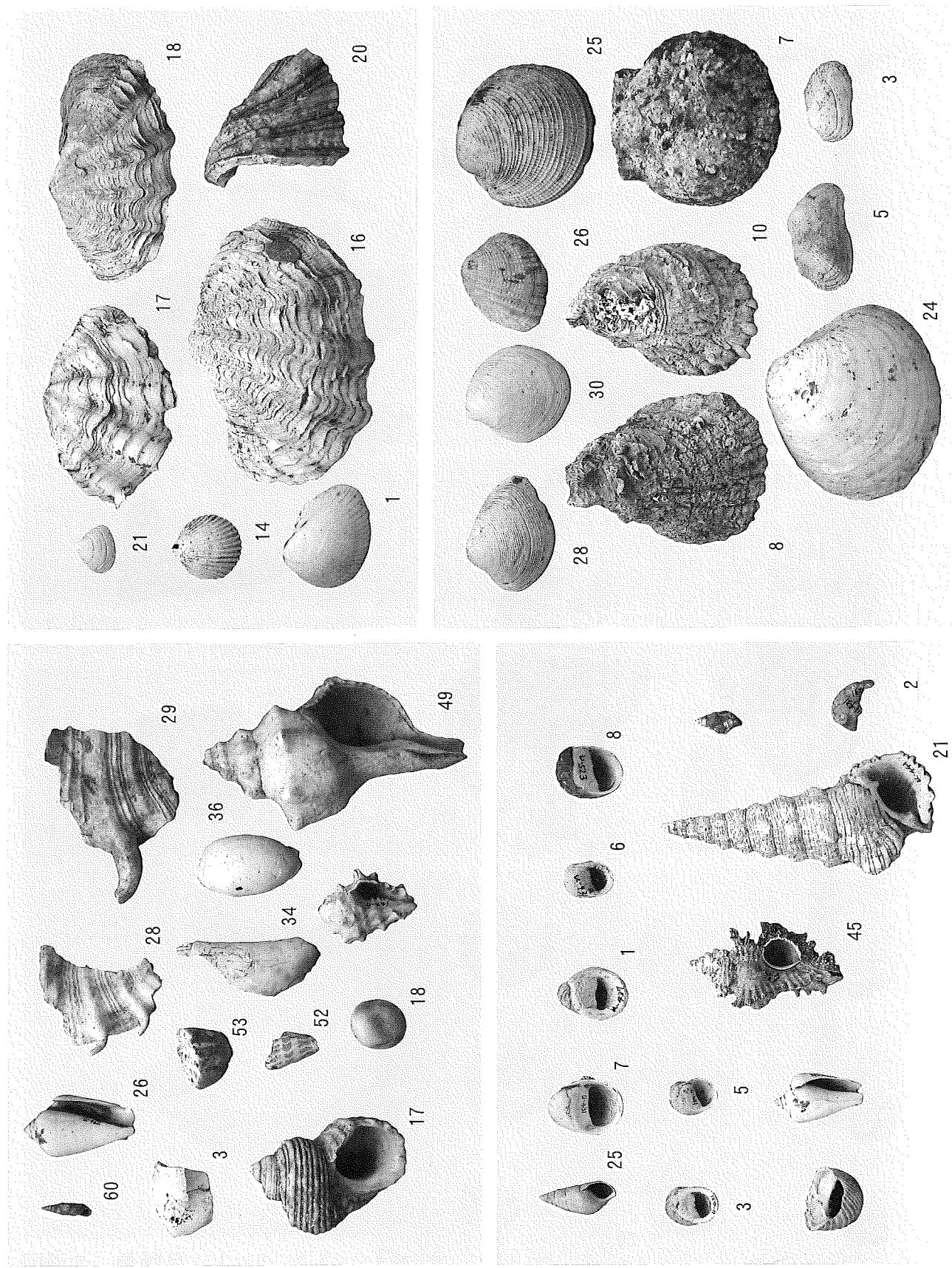
図版7 b 人骨



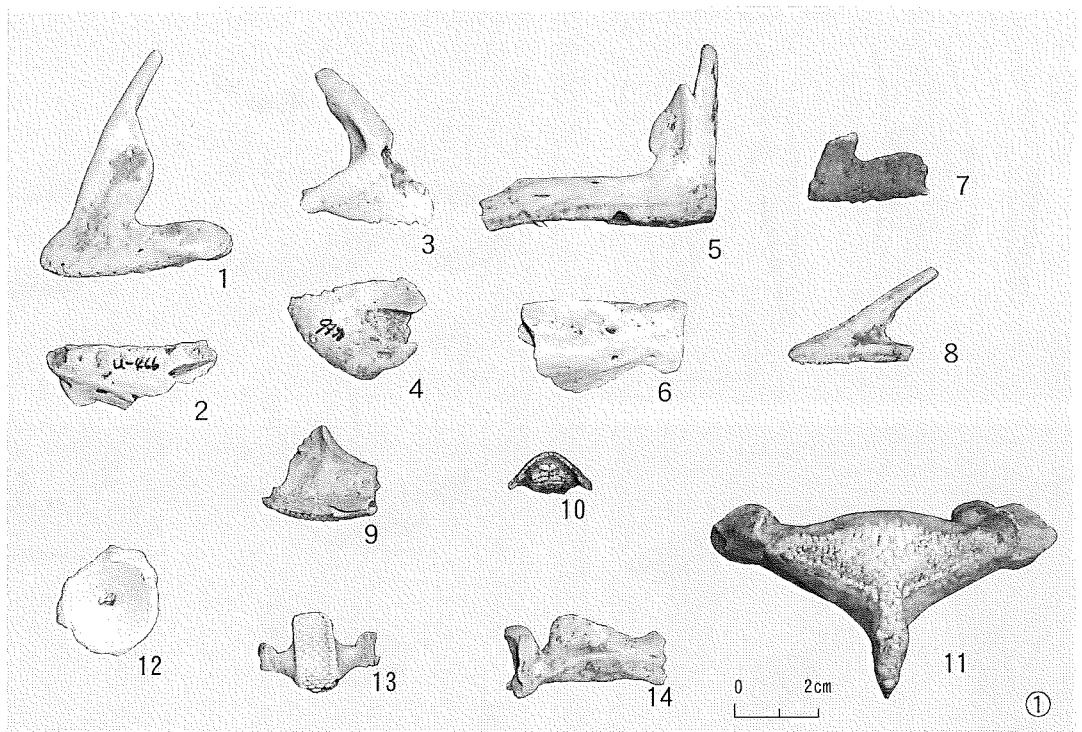
図版8 骨製品 1～3：イノシシ下顎犬歯（オス）、4：イノシシ腓骨、5：イノシシ四肢骨、
6：サメ歯有孔、7～9海獣骨



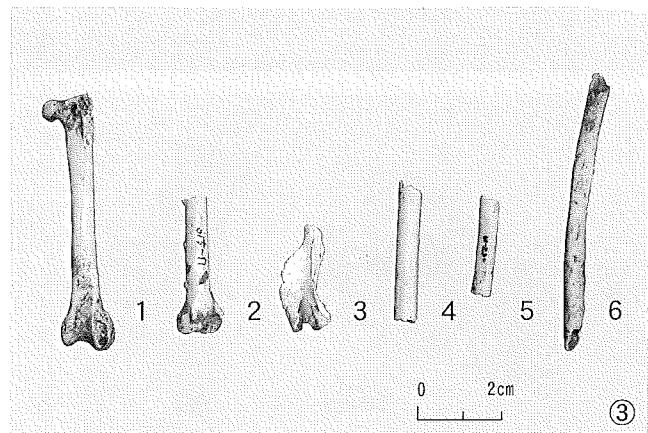
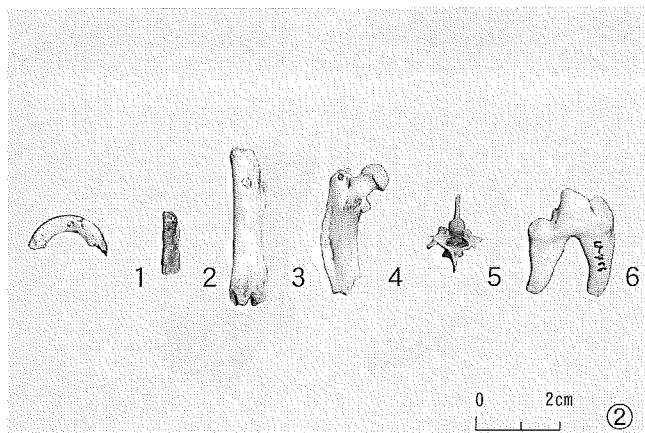
図版9 貝類 (番号は第6・7表の集計表と一致)・動物遺体 (a:カニ、b:ウニ甲羅)



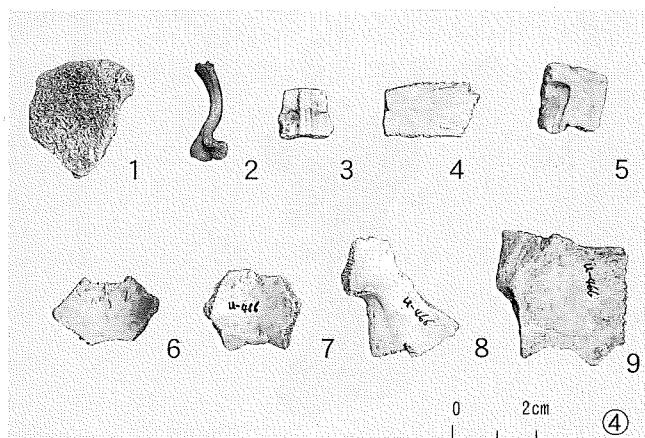
図版10 貝類遺体 (番号は第6・7表の集計表と一致)



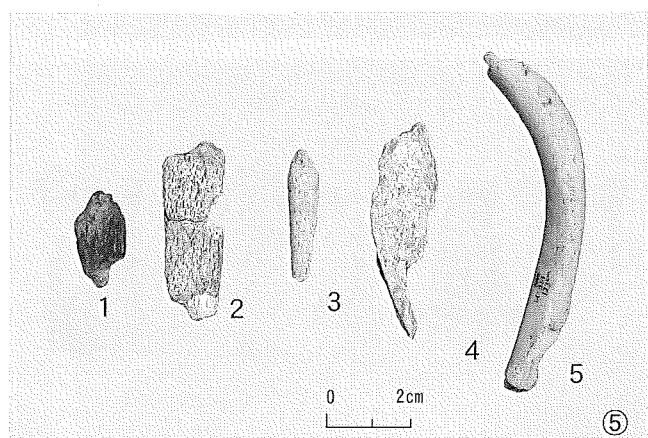
①



②



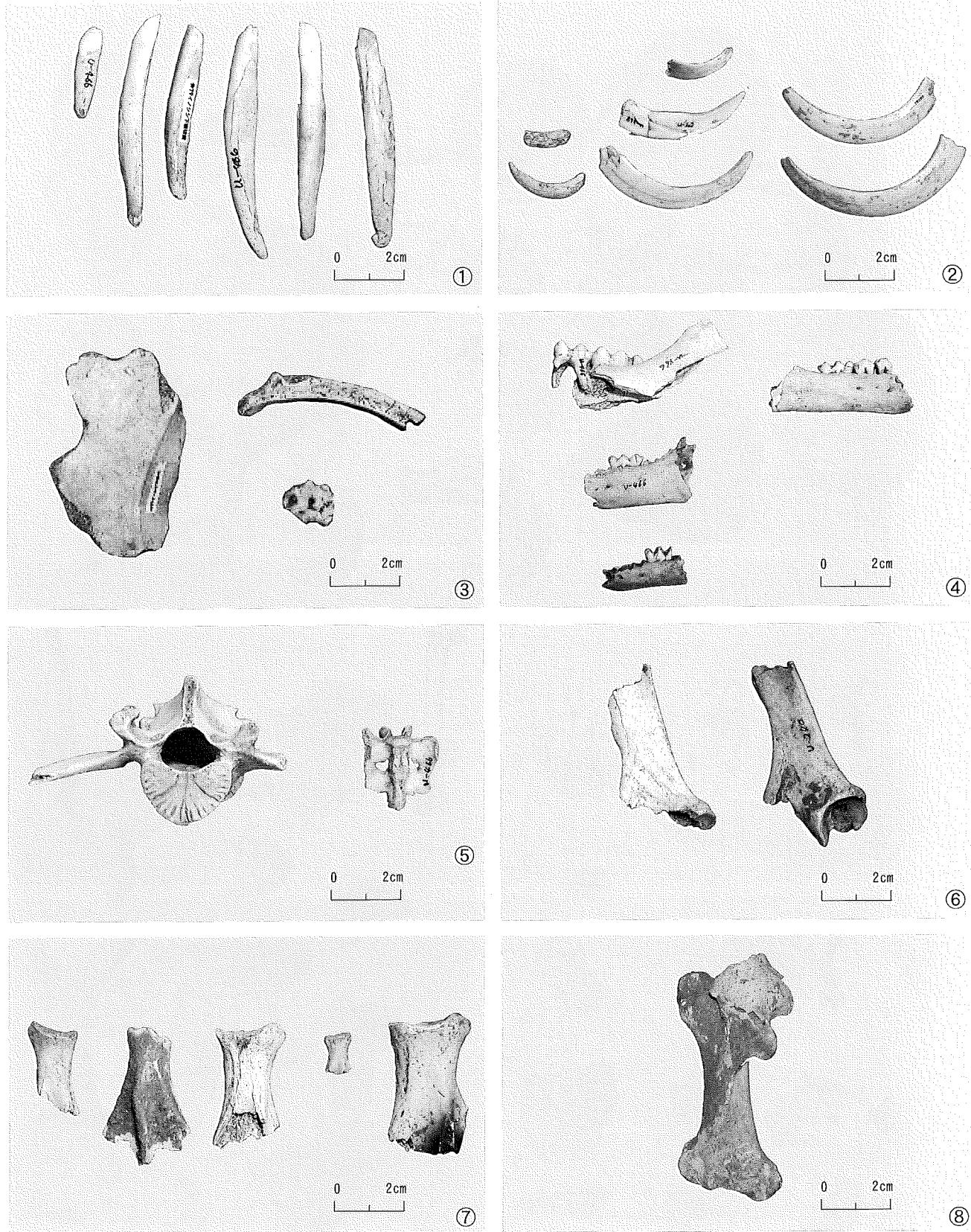
④



⑤

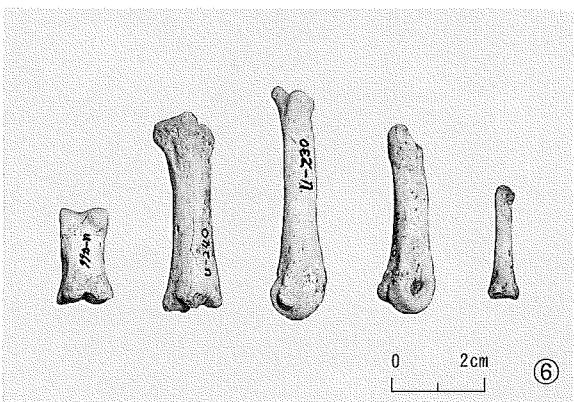
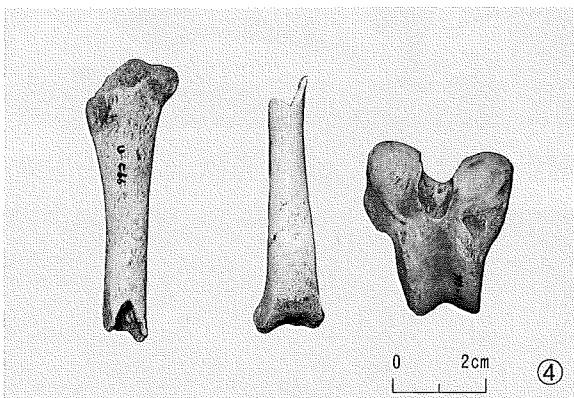
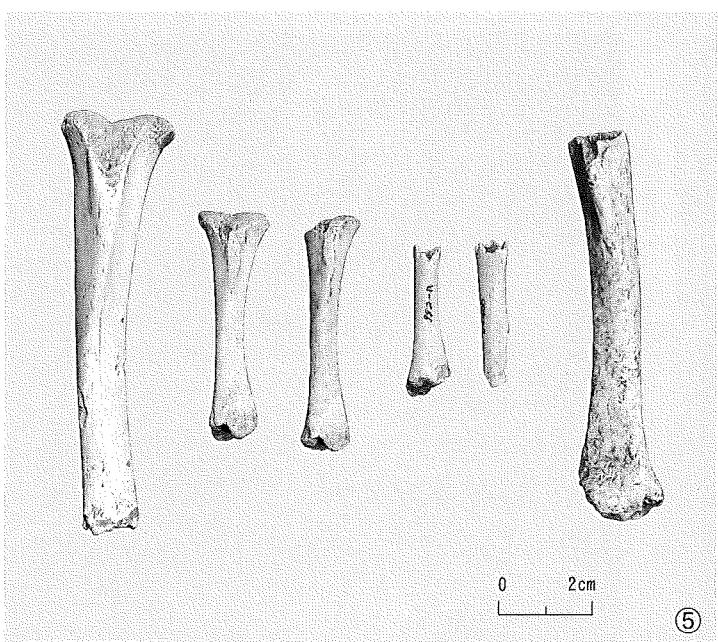
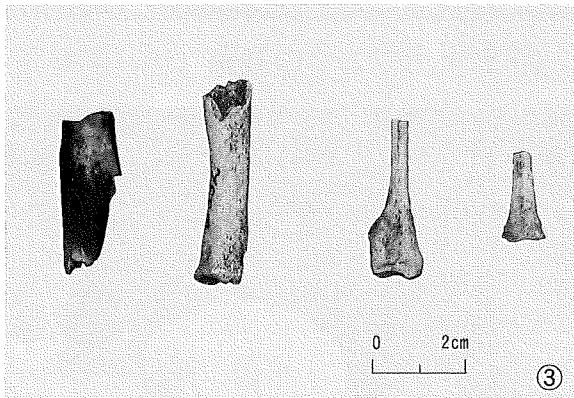
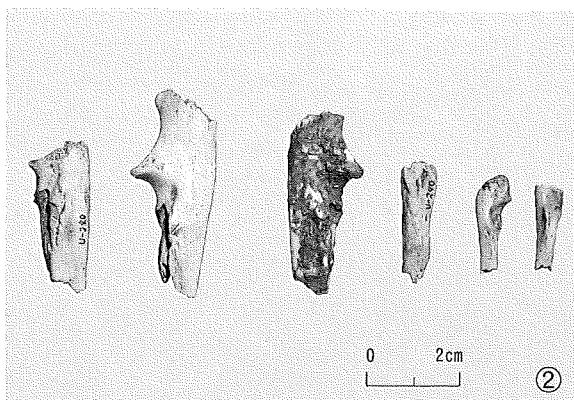
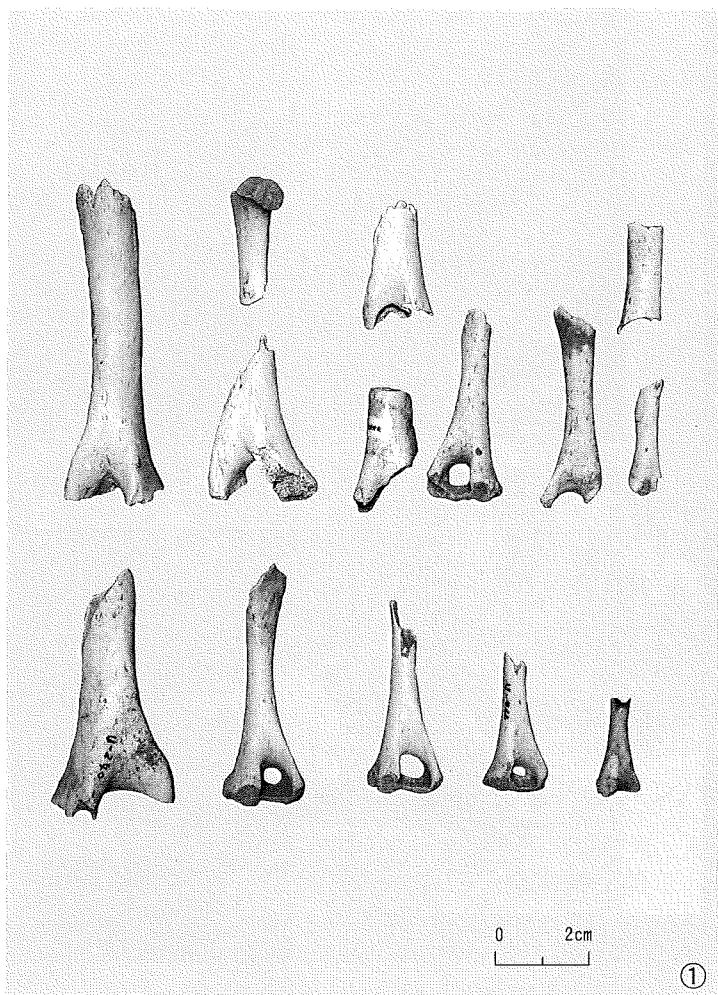
図版11 動物遺体(1)

①サカナ類、②ネズミ・ヘビ・イヌ、③トリ、④ウミガメ・リクガメ、⑤ジュゴン・クジラ



図版12 動物遺体(2)

イノシシ：①下顎切歯、②下顎犬歯、③頭骨・助骨・耳骨、④下顎骨、⑤椎体・尾椎、⑥寛骨、⑦肩甲骨
ジユゴン：⑧左上腕骨

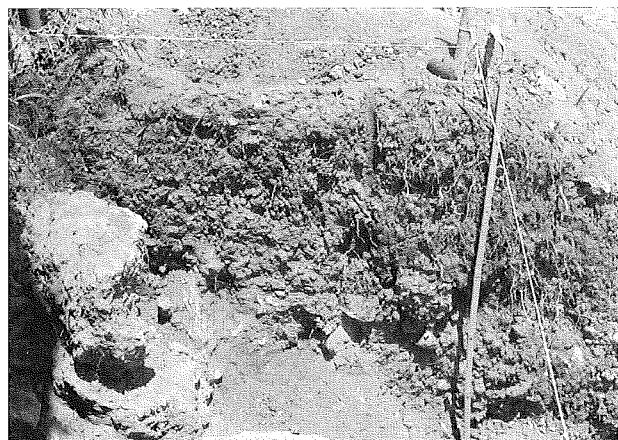


図版13 動物遺体(3)

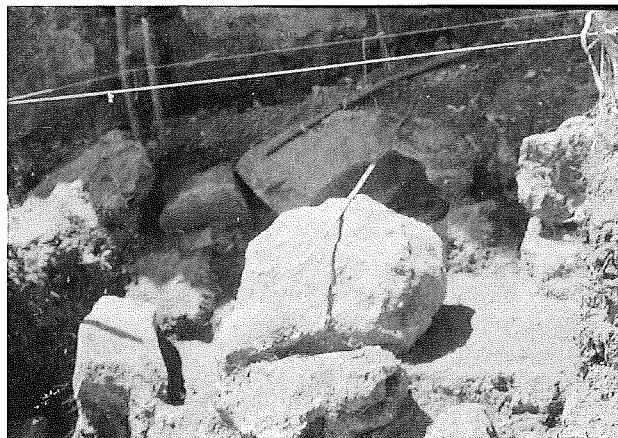
イノシシ：①上腕骨、②尺骨、③橈骨・腓骨、④大腿骨、⑤脛骨、⑥指骨・中手（足）骨



図版14 カワニナの凝集（1971年撮影）



図版15 第1・1'ピット東壁土層堆積状況（第一次調査）



図版16 第1・2ピット検査状況（第一次調査）



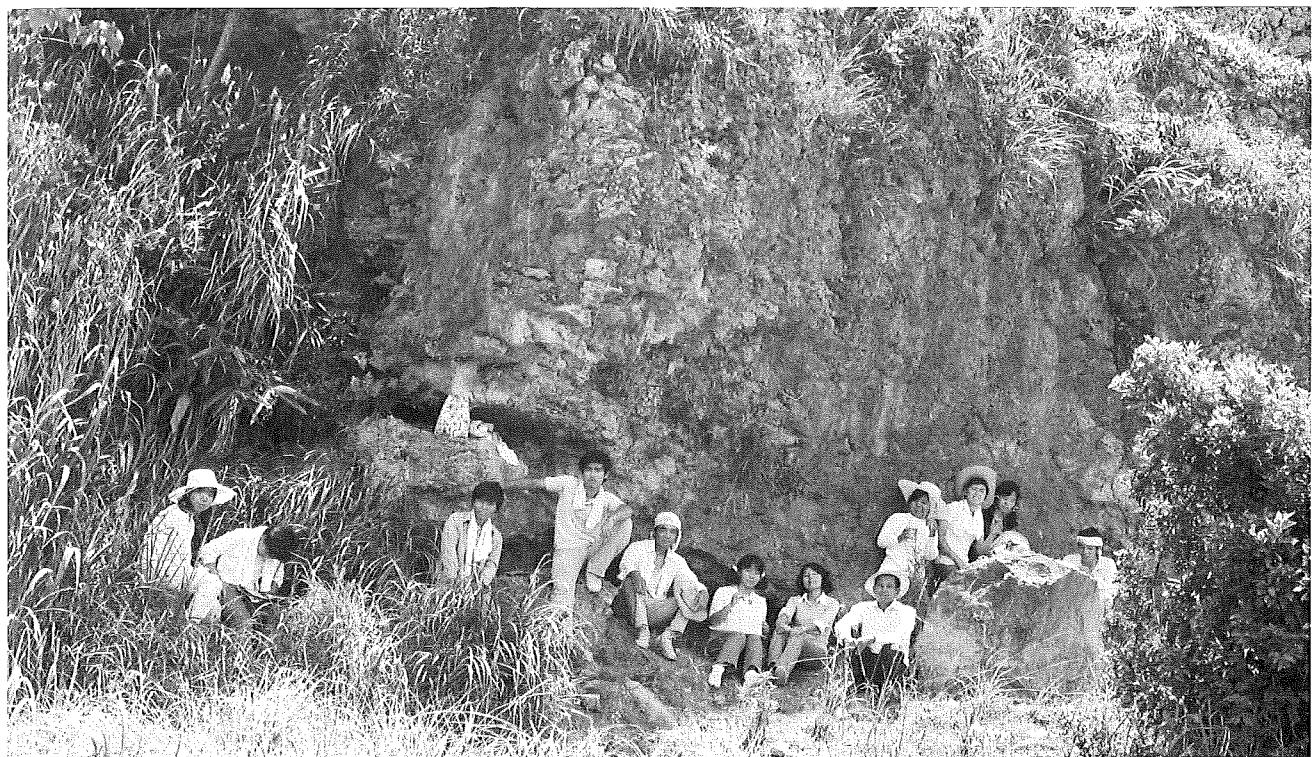
図版17 調査状況（第一次調査）



図版18 調査状況（第二次調査）



図版19 調査状況（第二次調査）



図版20 浦添高校郷土史研究クラブのメンバー（浦添貝塚補足調査・1971年撮影）

左から 栗森菊枝、識名久美子、比嘉春美、宮城朝光、古波藏一成、比嘉サヨ子、与座清子、新田重清先生、砂辺節子、外間恵美子、1人おいて棚原正助



図版21 伊祖公民館を使用した合宿の状況（第二次調査・1970年撮影）

左から 喜屋武元伸、津波古聰、新田敦、棚原正助、大嶺政子、新田尚、潮平寛一



図版22 トンネル工法により保存された浦添貝塚（写真右上・1973年撮影）



図版23 工事中の国道330号線（浦添貝塚から東を望む・1973年撮影）

資料紹介 琉球王国における染織注文書

平川 信幸*

Notes on Historical Materials for the Order Form of Dyed in the Ryukyu Kingdom

Nobuyuki HIRAKAWA

はじめに

納殿関係資料とは、「大台所より納殿宛の染紙注文書」(以下「染紙注文書」と略記する)、「納殿より知念筑登之親雲上宛の発注書」(以下「知念宛発注書」と略記する)、「澤崎家旧蔵の納殿発注仕分帳」(以下「澤崎家仕分帳」と略記する)と題された3件の資料で、いずれも染色に関するものである。これらの資料は断片的であるが、多くの資料と組み合わせることによって近世琉球期における、王府と職人の関係など少しでも解明できる手立てになるのではないかと思われる。

まず、語彙の説明として「納殿」というのは、『琉球国由来記』によると、国王の私生活の場であった御内原の薬やお茶、煙草などの日用品を扱う部署とあり、これらのもの以外に染物や紺屋を管理したようである¹。

また、「知念宛発注書」、「澤崎家仕分帳」の2件には家名がついており、紺屋にどの様な人々が携わっていたわかる。さらに、知念家のものには、宛名が「知念筑登之親雲上」とあって、紅型を染めていた職人が王府内で位階をもつ役人であったことが確認できる。余談になるが、「知念家」・「澤崎家」の両家に「城間家」を加えると、王朝時代から紅型を担ってきた三宗家となる²。

最後に、資料の旧所蔵者についても1964(昭和39)年に出版された鎌倉芳太郎氏解説の紅型の写真集『古琉球型紙の研究』(以下『型紙研究』と略記する)³に資料収集の様子が記載されており、明らかになっている。

『古琉球型紙の研究』の中の納殿資料

「染紙注文書」、「知念宛発注書」、「澤崎家仕分帳」の三件の資料は、1964(昭和39)年に型紙の写真集として出版された先の『型紙研究』に収録されている、鎌倉芳太郎氏の小論「古琉球型紙」の中でそれぞれ、紺屋の職種や「びんがた」の語源を考察する上で資料としてあげられている。

以下に『型紙研究』の中で納殿資料がどの様に活用されたか見ていきたい。

まず紺屋の仕事内容について鎌倉氏は、紅型を染めていた紺屋が紅型や藍型だけでなく紙の加工も生業としていたことに対する論考において、唐型紙と呼ばれる技法とそれを伝承していた知念家の家伝を説明し、「染紙注文書」の写真図版を掲載している。

型染めを家伝とする知念家の始祖の父である唐紙知念が中国へ渡り、唐型紙の技法を学んだが、当時、技法を伝承すべき実子がいなかったため、妻とその前夫の間に生まれた子を養子とした。しかし、その後、実子に恵まれたため、養子には紅型と藍型を、実子には唐型紙を伝えたとある。

鎌倉氏は、もともと染色に携わっていた唐紙知念が二人の子供に伝承した唐型紙、紅型、藍型の技法から、唐紙の技術を習得したことにより、紙に関わる加工も行ったのではないかと推察し、知念家旧蔵の大台所から納殿へ出された「染紙注文書」を資料の一つとして引用し、知念家が紙染の仕事も請け負っていたと説明している。ただ「染紙注文書」の掲載については、写真のみの引用である。

次に、「びんがた」の語源を考察する上で「染紙

* 〒903-0823 那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館

Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan

注文書」「知念宛発注書」の2件が用いられている。

1923(大正14)年9月、琉球芸術に関する展覧会および講演会が財団法人啓明会の主催で東京美術学校において開催された。ここで鎌倉氏は初めて「紅型」という言葉を使っている¹⁴。

その5年後の1928(昭和3)年1月、銀座松屋において有尾江臥堂・石原求龍堂が主催した上里參治氏の企画による展覧会が開催された。この時発行された「古琉球『紅型』衣裳展覧会目録」に掲載された伊波普猷氏の解説文に「紅型」の語を「ベンガル」を由来とした論が展開されている。

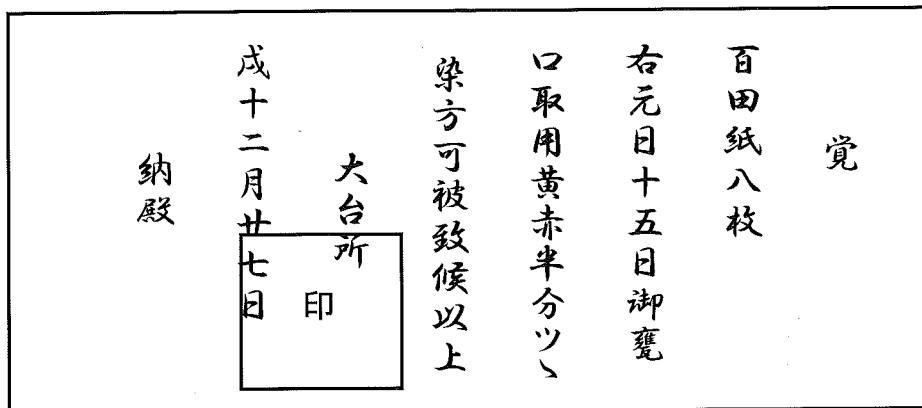
さらに同年出版された『紅型』(巧藝社版)でも同様の記述がある。¹⁵

鎌倉氏は伊波普猷氏の論を謬論とし、多くの資料

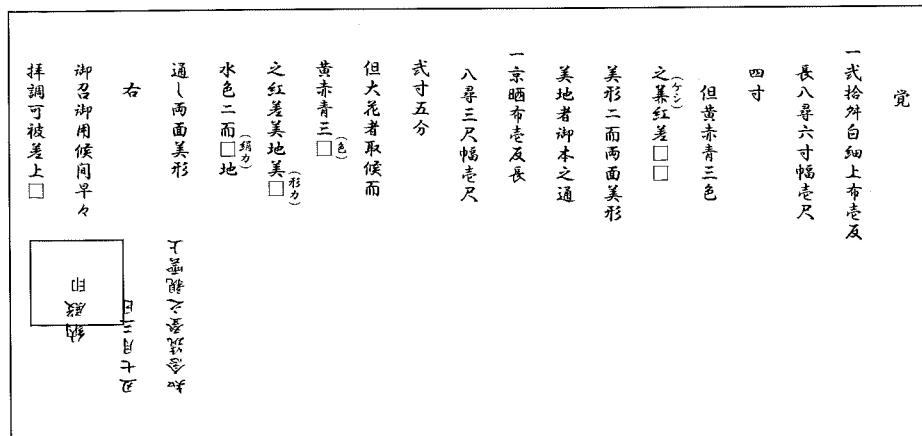
とともに上記の2件の資料を用いて「紅型」の由来を説明し、反論している。ここで氏は、型置き染めのことを沖縄では「形付(かたちき)」、染料を用いたものを「ビンガタ」、藍染めのものを「藍型(ええがた)」と(説明)しており、「ビンガタ」が「ビン」と「カタ」の二つの言葉からできていることから、「ベンガル」とは言葉の性格が違うとしている。

その論拠として氏は、2件それぞれを王府から知念家と澤垣家に出された注文書として提示し、テキストとともに図版を掲載しており、知念家のものには「紅差」、澤垣家のものは「紅入」とある。「紅」すなわち「ビン」とは、狭義では生臍脂の「紅」だが、広義には色によって隈を施すことであると結論づけているのである。

資料1 大台所より納殿宛の染め紙発注書



資料2 納殿より知念筑登之親雲上宛の発注書



このように鎌倉芳太郎氏はこの3件の資料を、紺屋の職種や「紅型」の語源を示す貴重なツールとしてその論考に用いている。

資料の旧蔵者について

鎌倉氏は『型紙研究』中で、「染紙注文書」及び「知念宛発注書」は知念績清氏、「澤底家仕分帳」は澤底仁王氏の旧蔵としており、型紙を含めた紅型に関する資料を誰から、どのように収集したかを記録している。また、これらの資料の入手経緯、及び入手時期についても明らかになっている。なお、調査の詳細については鎌倉氏の著作に詳しいのでここでは特にふれない¹⁶。

鎌倉氏の年譜については原田あゆみ、久貝典子両氏¹⁷の優れた仕事があり、両氏の年譜より沖縄での美術工芸品の調査の時期をまとめると前期・中期・後期の3回にわたって行われていることが分かる。

その3回とは

前期

- ・沖縄県女子師範学校美術教員期
1921（大正10）年～1923（大正12）年
- ・第1回琉球芸術調査期
1924（大正13）年5月初旬

～1925（大正14）年5月

中期

- ・第2回琉球芸術調査期

1926（大正15）年～1927（昭和2）年9月

後期

- ・「歴代宝案」調査期 1933（昭和8）年8月
 - ・城跡発掘調査期 1937（昭和12）年1月
- である。

以上のことから、鎌倉氏は第1回琉球芸術調査期と第2回琉球芸術調査期の間に紅型に関する資料を収集していると諒することができる。ただし、資料収集の時期について『型紙研究』の記載には若干のズレがあり、氏のその他の記述や年譜などで確認する必要がある。

たとえば澤底家の資料収集について『型紙研究』の中で氏は、1940（昭和15）年に両澤底家に訪れて資料の収集を行っていることになっているが、原田・久貝両氏の研究やその当時の状況などから、1926年（大正15）第2回琉球芸術調査期の収集されたものと思われる。後年に発行された『沖縄文化の遺宝』¹⁸（以下『遺宝』と略記する）では大正15年に改められている。

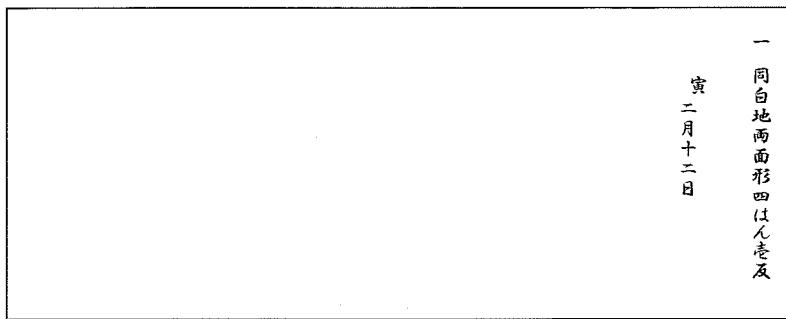
資料3-1 澤底家旧蔵の納殿発注仕分帳

一五色紅入り壹方白地中模様	九外木綿布四はん五及	基 ^{カシ} 本 ^ヒ
一同五はん壹及	一同五はん壹及	一同五はん壹及
一同色形二はん壹及	一同色形二はん壹及	一同色形二はん壹及
一同小模様白地形九外木綿	一同小模様白地形九外木綿	一同小模様白地形九外木綿
布四はん三及	布四はん三及	布四はん三及
一同毛はん武及	一同毛はん武及	一同毛はん武及
一同五はん武及	一同五はん武及	一同五はん武及
一同拾參肆白木綿布壹卷	一同拾參肆白木綿布壹卷	一同拾參肆白木綿布壹卷
壹及	壹及	壹及
一同色彩拾八舛細上布	一同色彩拾八舛細上布	一同色彩拾八舛細上布
三はん壹及	三はん壹及	三はん壹及
一大模様壹方紅入色彩	一大模様壹方紅入色彩	一大模様壹方紅入色彩
九外木綿布四はん四及	九外木綿布四はん四及	九外木綿布四はん四及
一同白地形四はん壹及	一同白地形四はん壹及	一同白地形四はん壹及

資料3-1

寅	正月廿七日	六及	一赤染本綿布武拾	右同	一同三拾七及	赤染	兔正月十三日渡り澤底にや
			一黄染本綿布武拾	玉色染			

資料 3-3



このように調査の時期を確認する作業を進めながら、資料収集の経緯を『型紙研究』より追っていくと下記の【表】の通りとなる。

以上のことから、鎌倉氏の資料集は1924（大正13）と1926（大正15）年の2期にわたり、澤垣仁王氏をはじめとして計7人を対象に行っていることが分かる。また、被調査者の中には鎌倉氏が直接聞き取り調査を行ったのではなく、知念積秀氏のように間接的に話を聞いただけの対象者もいるようである。

さて、三点の資料収集の時期をまとめると、「染紙注文書」及び「知念宛発注書」の旧所蔵者である知念績清氏には、1924（大正13）年、「澤垣家仕分帳」を所蔵していた澤垣仁王氏には、1926（大正15）年に調査を行っており、この時にこれらの資料入手したと考えるのが妥当であろう。

高級士族の衣装であった紅型は、琉球処分による王国の解体とともにその基盤を失った。その後の日清・日露戦争の戦勝は「風俗改良運動」のきっかけとなり、大和から入ってくる大量生産された着物により時代遅れと見なされる。そのような中、多くの紺屋が廃業し、一部の染屋が職を求め首里から那覇に移り、風呂敷（うちゅくい）などを染めて、細々と命脈を保っている状態で、近代は紅型にとって決して幸福な時代ではなかった。さらに、鎌倉氏が調査に入っていた大正末期から昭和初期とは第一次世界大戦による好景気がかけりを見せ、「ソテツ地獄」よばれる凄惨な状況が始り、紅型を染めた紺屋だけでなく、沖縄の社会全体が疲弊していた時期である。

また文化的には、沖縄の伝統文化が県外の研究者に評価されるが、県内では近代化による急速な社会

調査年	資料提供者	提供者屋号	年齢	地 番	備 考
大正15	澤垣仁王	大澤垣	61	那覇市久茂地町77番地	資料を購入
大正15	澤垣 亀	澤垣小	—	那覇市松山町型紙を購入	型紙を購入
大正13	知念績昌	知念ミーハギーの弟の次男の子孫	68	那覇市西新町2-14	下儀保知念の5代目、型紙を譲り受ける
—	知念積秀	知念ミーハギーの弟の次男の次男（寿庵）の次男の子孫	不明	那覇市久米町2-21	上儀保知念
大正13	績清	知念ミーハギーの弟の三男の子孫	71	那覇市若狭町	全て譲り受ける
大正13	松	首里当藏城間家	71	那覇市久米町2-25	
	栄幸		51	那覇市久米町2-25	

変化の中で多く有形・無形文化財が廃棄されようとしていた。このような社会状況の中で3件の資料は鎌倉氏によって収集されたのである⁹。

資料の状態 形態と料紙

納殿資料は大きく分けて知念家旧蔵の「染紙注文書」、「知念宛発注書」と澤垣家旧蔵の「澤垣家仕分帳」の二つにその性質を分類できるのではないかと思う。この事と同様に形態と料紙も二つに分けられる。

知念家旧蔵「染紙注文書」、「知念宛発注書」の二件はそれぞれ、一枚の書状になっており、購入した時点では台紙にセロファンのようなもので貼り付けられていた。

「染紙注文書」（図版1）の状態を記録したものが（図版2）であるが、大きさは縦11.9cm、横が20cmであった。また、縦に六本、約3cm毎に亀裂が入っており、折りたたまれていたことが分かる。

「知念宛発注書」（図版6）は、縦23.8cm、横32.5cmとなっており「染紙注文書」より大きいものになっている。折り跡は縦に10本、横に1本入っている。さらに、文字列が横の折り跡を境に向かい合っており、袋とじにして使用されたことが分かる。状態は、「染紙注文書」がやや良好で、「知念宛発注書」は劣化が進んでいる。両方の文書は墨印が押されていることから、公文書であると考えられる（図版3 図版7）。墨印については、貢納布の見本である沖縄県立博物館蔵の「御絵図」や、京都大学蔵の『琉球資料』に所収されている「貝摺奉行所文書」¹⁰等に捺印されており、これらと比べることによって、王府内でやり取りされた文書の書式や紙の規格を推察する一つの手がかりになると思われる。また、これまで、県の報告書等で朱印が押された辞令書と家譜等についてはまとまった形で報告されているが、王府内でやり取りされた文書については管見の限りにおいて、このような形での報告はなされていない。

今後、各役所から出された文書、その中で特に貝摺・小細・瓦・鍛冶工奉行など職人を統括した部署の資料類を網羅することは、モノの流通や仕事の内容などを把握する上で、重要になってくるのではないだろうか。次に「澤垣家仕分帳」（図版12）だが、「仕分帳」とあるように先の知念旧蔵二つとは形態が違っている。縦11.9cm、横38cmで3枚の紙が縦

に袋に閉じられ、いわゆる大福帳のようになっている。三枚を綴じているものは堅い帶状のもので、左端の横二カ所でつないでいる（図版14）。澤垣家のものは、その内容を詳しく読み解いて分析していく必要があるが、目録の区切りだと考えられるところに、それぞれ、「寅正月十三日」、「寅正月廿七日」、「寅二月十二日」とある。また、ページが日付ごとに区切られるように工夫しており、「寅二月十二日」は三行程度で埋められただけで後は余白となっている。

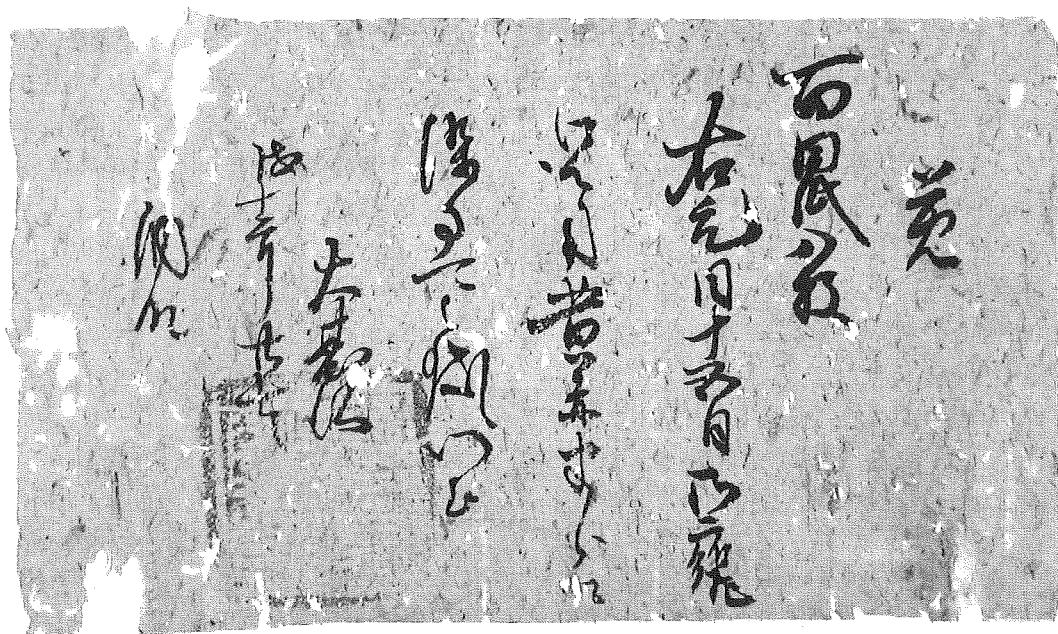
これは題名や内容などから、納殿の注文を記録した仕訳帳であることが分かる。

これまで見てきたように文書の内容や形式は知念家のものと澤垣家のものとの二つに分かれる。これと同じく、紙の性質も二つに分類することができる。

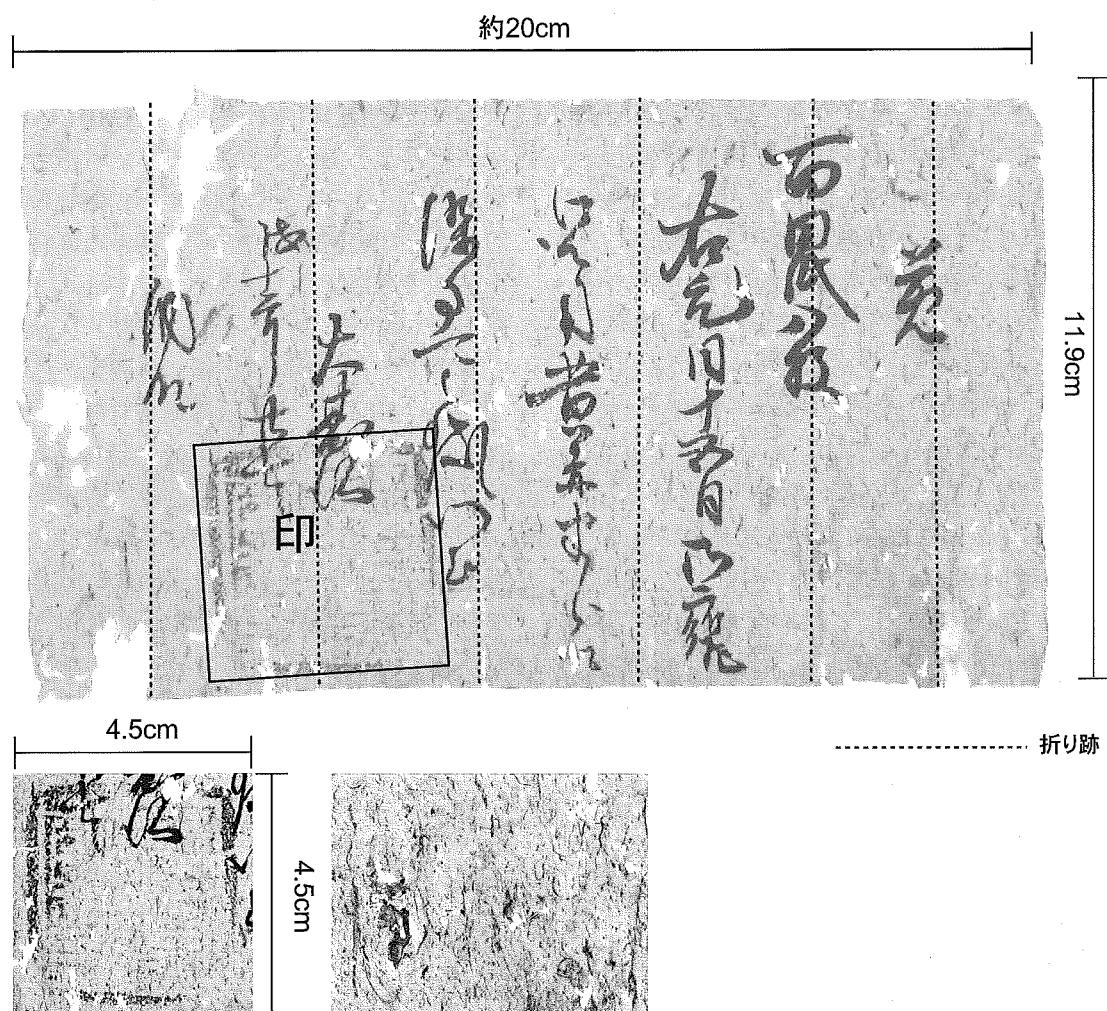
沖縄の場合、紙を大まかに分けると、輸入品である唐紙と国産紙の二つに分けられる。唐紙は中国を中心に日本などからものであり、主に中国福建省で漉かれた紙が用いられたと考えられている¹¹。また、唐紙に書かれているとされる『おもろさうし』などの料紙から鑑みると、竹紙や韌皮纖維の紙が厳選されることなく使われており、様々な素材と質の料紙が舶来されたようである¹²。国産紙は多くの種類の紙が漉かれたようであるが、現在、文献と伝世品より確認できるものは百田紙、杉原紙、芭蕉紙の三つである。杉原紙、百田紙は楮を原料とした和紙で、杉原紙はさらに米粉を加えたようである¹³。芭蕉紙は文字通り芭蕉を原料とし、紙不足を解消するために、王府の命によって開発された沖縄独自の紙で、百田紙など比べると非纖維素が多く混入しており、紙質は荒く、楮紙などの代用として漉かれた¹⁴。それぞれの用途について、杉原紙は現在その実物が確認されていないので述べることは出来ないが、百田紙は公文書用に、芭蕉紙は多くの場合、王府内や間切内でのメモ、または私用に使われたと考えられている。

上記で述べたように、知念旧蔵のものについては公印らしきものが押されており、その内容から公文書だと推察できる。同じように、公文書である辞令書の料紙について、唐紙の竹紙、藁紙と報告されており、その傾向を確認できる¹⁵。さて今回、収集された納殿資料は日常的にやり取りされたもので、近

図版 1



図版 2

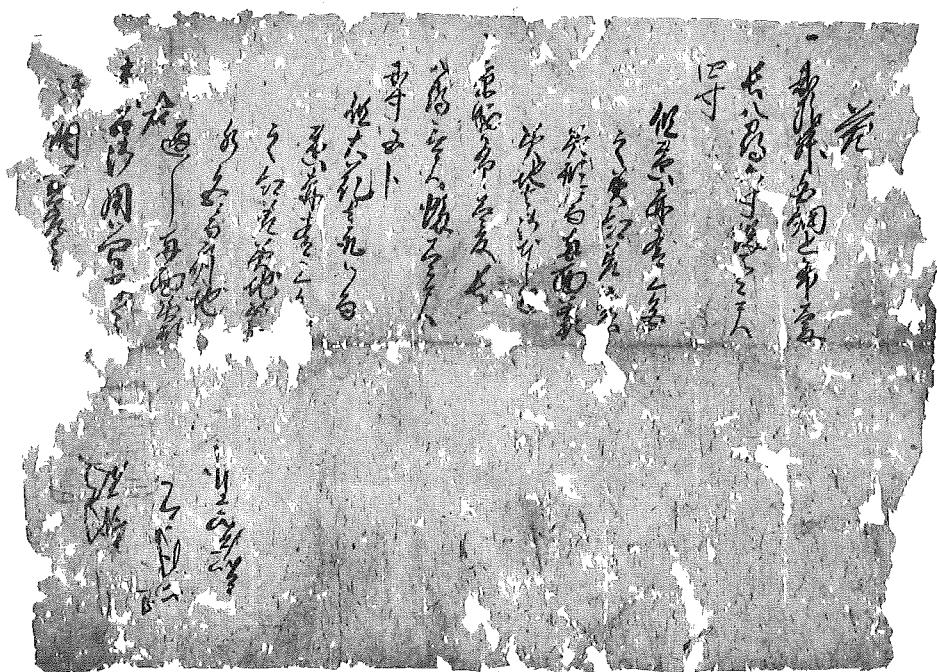


図版 3 印の寸法

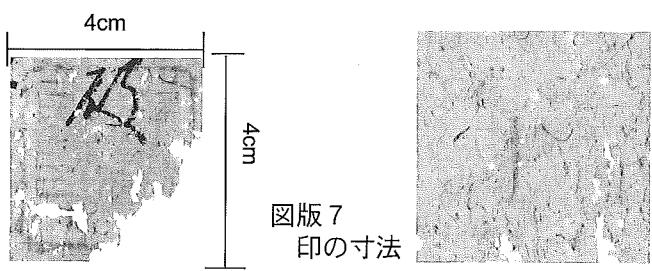
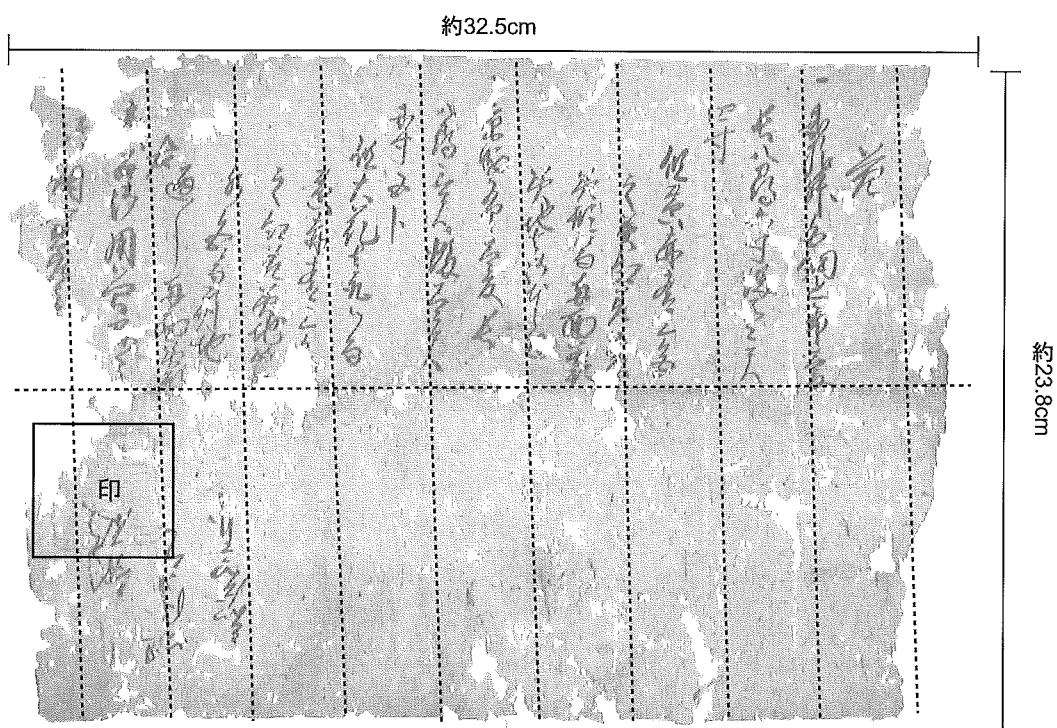
図版 4 料紙拡大部分

納殿より知念筑登之親雲上宛の発注

図版 5



図版 6



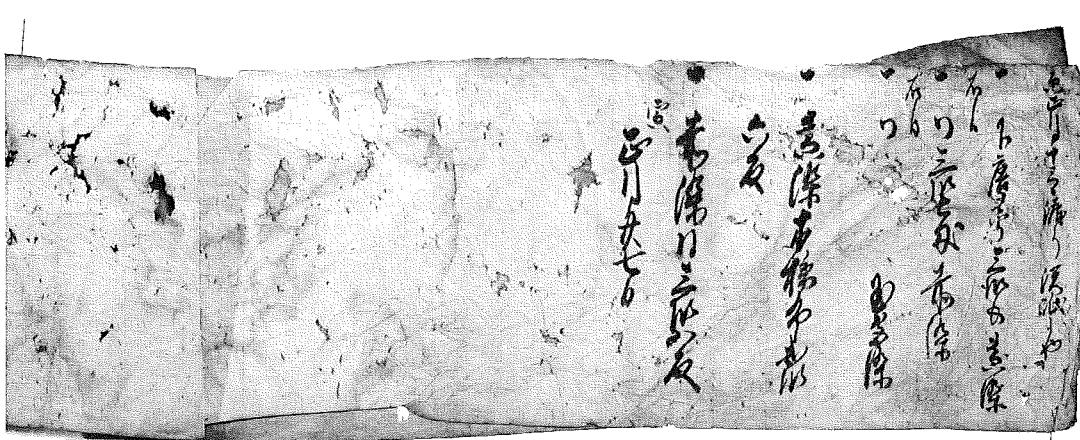
図版 7
印の寸法

図版 8
料紙拡大部分

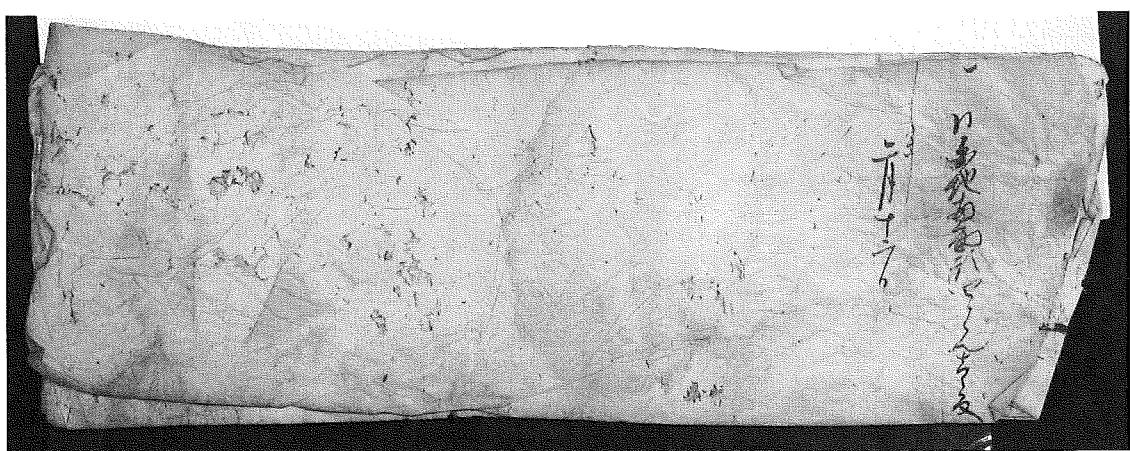
図版9



図版10

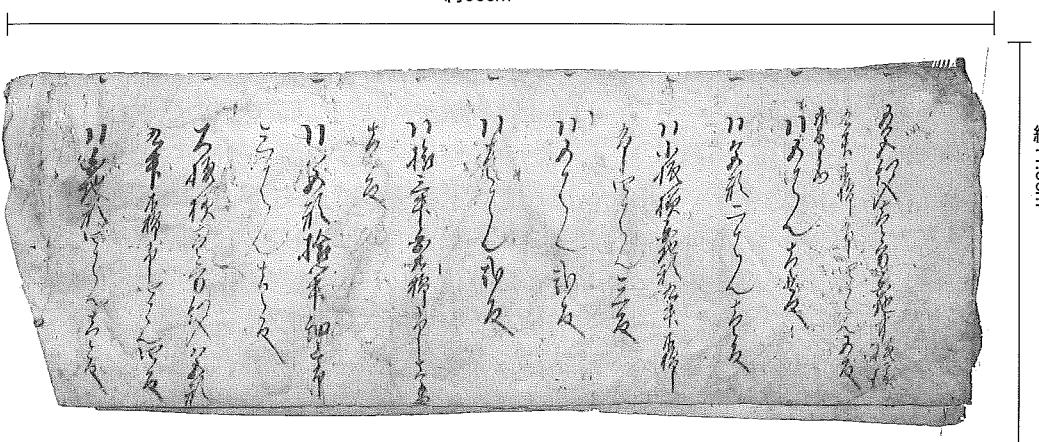


図版11

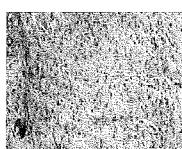


図版12

約38cm

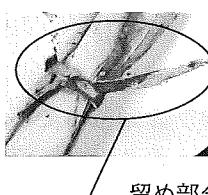


図版13



料紙拡大部分

図版14



留め部分

世以降、高官の就任のみに発行された辞令書とはやや性質の違うものである¹⁶。このことは今後、王府内で使用された紙の品質や流通を再考する上でも重要であると思われる。

では、まず知念家旧蔵のものの拡大部分（図版4 図版8）を見てみると、纖維分が不純物として滲き込まっているのが分かる。特に（図版8）の場合はっきりと纖維群を確認すること出来る。この纖維群は芭蕉の内側の茎の組織となっている部分と外側の茶色に変色した表皮の部分で、芭蕉紙であることが確認できる。

次に澤嶽家のものだが、知念家のものより纖維が細かく、異物などが見られない【資料13】。また、杉原紙の場合はさらに、光沢を出すため餅粉などを混ぜて光沢を出しているよう、この紙にはそういう様子は見られない。このことからも百田紙だということがわかる。

先にも述べたが、一般的に、王府内で漉かれた紙は、百田紙を公文書用、芭蕉紙を記録用としてある程度使い分けがなされていたようである¹⁷。しかし、今回の知念家、澤嶽家の両資料は、公文書と思われる知念家のものは二つとも芭蕉紙で逆に澤嶽家のものは百田紙であった。鎌倉氏によると、これらの資料は、1924（大正13）年、1926（大正15）年の収集時においてすでに120から130年は経過していると述べている¹⁸。料紙についてはおそらく知念家・澤嶽家の資料が書かれた210年前当時、王府内よりも商品や道具として紙を扱う頻度が高かった工房の方が紙を裁量できた可能性が指摘できるのではないだろうか。

おわりに

ここで紹介した3件の納殿関係の資料は、王府が工房にどの様な仕事をどの様な形で依頼していたか、また、どの様にこれら工房を掌握していたかを示す資料ある。さらに今回は、資料の状態や纖維を図版資料として掲載した。そのことによって今後は文字情報からだけでなく紙質や資料の形態など、ものとしての側面からも新たな情報が出てくるのではないだろうか。

末筆ながら、翻刻の掲載を承諾していただいた小野まさ子氏をはじめ、料紙について多くの情報を下さった上江洲敏夫氏には、記して感謝の意を表す次第である。

- 1 琉球王府編 伊波普猷. 1987. 東恩納寛惇 横山重 共編『琉球国由来記』 風土社 58頁
- 2 岡村吉右衛門. 1978. 編輯及解説『琉球古紅型』有秀堂 9頁
- 3 鎌倉芳太郎. 1953. 『古琉球型紙』 株式会社 京都書院
- 4 鎌倉芳太郎. 1953. 19頁 原田あゆみ. 1999. 「鎌倉芳太郎の前期琉球芸術調査と美術観の変遷」『沖縄芸術の科学』 第11号 沖縄県立芸術大学付属研究所紀要』 沖縄県立芸術大学付属研究所 90頁
- 5 伊波普猷. 1928. 『古琉球紅型』解題 巧藝社 5頁
- 6 鎌倉芳太郎. 1953. 鎌倉芳太郎. 1982. 『沖縄文化の遺宝』 岩波書店 242-248頁
- 7 原田あゆみ. 1999.

- 久貝典子. 2003. 「鎌倉芳太郎の芸術調査（上）」
『沖縄文化 第三十八卷二号』
沖縄県立芸術大学付属研究所 波照間永吉研究
室気付
- 久貝典子. 2004. 「鎌倉芳太郎の芸術調査（下）」
『沖縄文化 第三十九卷一号』
沖縄県立芸術大学付属研究所 波照間永吉研究
室気付
- 8 鎌倉芳太郎. 1982 : 243頁.
- 9 企画都市史編集室. 1974. 「那覇市史 通史編
第2巻」那覇市役所 227-229頁
- 渡名喜明. 1980. 『琉球紅型』 京都書院 260頁
- 金城正篤・上原兼善・秋山勝・仲地哲夫・
大城将保. 2005.
- 『沖縄の百年』 山川出版 114-116頁
- 10 沖縄県史料編集室. 1981. 『沖縄県史料 前近
代1』 沖縄県教育委員会 319-426頁
- 11 上江洲敏夫. 1978. 「辞令書の古文書学的考察」
沖縄県教育庁文化課『辞令書等古文書調査報告
書』沖縄県教育委員会 24頁
- 12 上江洲敏夫. 1982. 「琉球紙の歴史」
阿部栄四郎 豊平良頼 柳橋眞 上江洲敏夫
勝公彦『沖縄の紙』 沖縄タイムス社 92-96頁
- 13 上江洲敏夫. 1982 : 128・129頁. 『沖縄の紙』
- 14 糸数兼治. 1976. 「琉球の抄造紙」 法政大学沖
縄文化研究所『沖縄文化研究 3』
法政大学出版局 180・181頁
- 上江洲敏夫. 1982 : 122・123頁. 『沖縄の紙』
- 15 上江洲敏夫. 1978 : 21・24頁. 『辞令書等古文
書調査報告書』
- 16 鎌倉芳太郎. 1953 : 20頁. 『古琉球型紙』
- 17 上江洲敏夫. 1982 : 121・122頁.
『沖縄の紙』
- 18 高良倉吉. 1987. 『琉球王国の構造』
吉川弘文館 51・52頁

猪と人々のくらしー大宜味村を事例にしてー

松川 聖子*

Ryukyu Wild Boar and the Life of People in Ogimi Village

Seiko MATSUKAWA

はじめに

沖縄本島の北部に位置する大宜味村は、自然環境の豊かな、まさに山原（ヤンバル）と呼ぶに相応しい地域である。村に住む人々は、昔から山や海などの自然環境を大いに利用して生活してきた。特に各集落の背後にある山は、人々の日常生活と密接している場であり、生計維持（燃料/飼料/肥料/生活用具）・衣食住・儀礼・薬・遊びなどにおいて、非常に重要な役割を果たしてきた。

生活の様子が大きく様変わりした今日では、農業に従事している人々が山を畠地として利用し、畠に行く以外で山に入る機会は少なくなった。しかしながら、いまだに自然環境に関する人々の民俗知識は驚くほど豊富である。

人々の暮らしと自然の関係に注目した筆者は、大宜味村における猪猟を本稿のテーマとし、調査を行った。後に詳述するが大宜味村では、猪は畠の作物を荒らす害獣であり、猪と人間の攻防の中には、たくさんの民俗知識といえるものが含まれていた。自然と人間の結びつきが薄れつつある現在もなお続いている猪猟は、従来民俗学でなされてきた狩猟民俗の研究においてはもちろん、「自然と人々の生活のかかわり」という観点からも大変興味深いテーマであると考えている。

本稿では聞き取り調査で得られた情報を中心に「猪と人々の生活」について記述し、考察していく。また以下では猪を指して、基本的には「猪」と記述するが、文脈によっては単純に種を意味するイノシシ、または和名のリュウキュウイノシシ、ま

たは方言名のヤマシシと使い分けることとする。

序 章

第一節 研究史

1. 狩猟民俗に関する研究

民俗学において、「狩猟」というテーマは早い段階で注目されており、主な著書としては柳田国男が『後狩詞記』で狩猟伝承の聞き書きを行なったのを始めに、早川孝太郎の『猪・鹿・狸』や、全国各地における調査から千葉徳爾の一連の著書『狩猟伝承研究』などが刊行された。それらには現在では調査が困難になりつつある狩猟伝承が多く記され、今後の狩猟民俗研究における基礎資料・参考資料としても非常に価値が高いものだといえる。以後にも多くの研究者が著した著書や論文などによって、これまでに蓄積された全国の狩猟民俗に関する資料は膨大なものになっている。

2. 沖縄における猪猟に関する研究

沖縄においては、もともと狩猟民俗に関する研究は少なく、猪猟に関する研究も多くない。先行研究資料の中で、沖縄の猪猟を民俗学、或いは人類学的な観点から考察した一番古いものは、千葉徳爾の「南西諸島のいのししとその狩猟」という論考であつた（千葉, 1971）。その中で千葉氏は奄美以南に生息するリュウキュウイノシシとその狩猟について述べ、猪の生態・獵の実際・猪の処理や消費・猪狩りの目的それぞれについて南西諸島各地で聞き取った

*〒903-0823 那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館

Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan

例を挙げながら考察している。

そして本稿の調査地でもある沖縄本島北部の猪獣について書かれているものには、平敷令治の論文「山原の猪垣・猪狩・猪狩儀礼」や（平敷, 1991）、山原猪研究会の会報である『ウーガチ 奥特集』などがある（山原猪研究会, 1994）。この2つは猪獣に関する考察がなされているというよりも、聞き取り調査の成果を記してある「調査報告書」の性格が強いという印象を持つ。これらの情報は、猪狩りを行なう人が減少している上、聞き取り調査によっては伝統的な狩猟伝承の調査が困難になりつつある現在で、狩猟民俗研究を行なうための資料として大変貴重である。

しかしこれまでに挙げた千葉氏の論考・平敷氏の論文・山原猪研究会の会報が、猪の生態・獣の目的・獣の実際やその技術・猪の処理や消費に主眼が据えられたものであった中、今井一郎の「八重山群島西表島におけるイノシシ獣の生態人類学的研究」はこれらの項目も含めた上、人の生活環境にも焦点を当てていた（今井, 1980）。「とくに陸上の自然と人間との結びつきに注目した」（今井, 1980: 3）という今井氏は論文中で、調査地である西表島の自然環境や人々の生業などについても触れ、猪獣について総合的に考察している。

今井氏の研究目的は「現在みられる獣活動の具体的な記載を行ない、獣の歴史や社会的背景に注意をはらいながら、それを時間的、空間的に分析し、考察を加え」ることであり（今井, 1980: 3）、彼は長期にわたり島に滞在して自然環境・人々の生活環境の把握をした上で、獣活動の参与観察を行なっている。論文では、聞き取り調査によって得られた情報は多くないのか、方言名などの民俗語彙があまり出てこない。また、狩猟免許など獣をめぐる制度的な記述も特に記されていない。しかしながら報告は詳細であり、臨場感がある。調査者自らの参与観察によって、民俗学において主とされる調査方法「聞き取り調査」だけでは表現しきれないところをうまく伝えていると考えられる。

第二節 研究目的と方法

沖縄においてこれまでになされてきた狩猟民俗の研究は第一節で述べたとおりだが、本稿の目的は単

に狩猟民俗知識の収集・記述をするのではなく、主として大宜味村における「猪と人々の生活の全体的な関係」を考察することにある。そのためには猪そのものや猪獣の実際にに関する民俗知識を聞き書きする事以外に、人々と猪を結びつける農業や猪に対する人々の認識についての聞き取り調査を行うことも重要である（注1）。調査は、実際に猪獣を行う獣師の方だけではなく、獣は行わないが猪の被害に遭ったり、猪を目撃した事のある農家の方もその対象にし、さらに大宜味村の人々が猪をどのように認識しているかを知るために農業を行っていない方にも話を伺った。調査中はできるだけ年代を意識した聞き取りを心がけ、民俗変化の過程を整理し、相対的な流れを把握することに努めた。

また猪と人間の関係を全体的に論述していくとき、人々からの聞き取りによる情報のみならず、猪と猪をめぐる自然環境に対する自然科学的なアプローチからその生態を記述することや、野生生物を捕らえる際の行政的な取り決めを記述することも必要である。

本稿ではまず第一章「猪と人間」で、猪とそれに関わる人々の生活環境や、猪が農作物へ与えている被害の状況について触れ、猪と農家の農作物をめぐる攻防を述べる。そして第二章「猪獣」で猪獣の実際を記述し、獣師が猪を捕らえ、それを処理するまでの過程を記録する。さらに第三章「ヤマシシに対する人々の認識」では、さまざまな立場の人々がヤマシシをどのように捉えているのかについて考察する。

第一章 猪と人間

第一節 大宜味村の農業

現在の大宜味村において、農業は総生産額の50%を超える基幹産業である。以下では、猪と人間の関係を述べる上で最も重要である大宜味村の農業について取り上げ、紹介していきたい。

1. 耕種について

大宜味村では現在、村外・県外への出荷用としてサトウキビやパインアップルやウンシュウミカン・タンカン・シークヮーサーなどの柑橘類が栽培されている。サトウキビは戦前、パインアップルと柑橘類は

戦後直後から栽培されている換金作物であるが、近年ではアイリス・電照キクなどの花卉栽培や観葉植物の栽培も行なわれるようになり、耕種が多様になっている。

また出荷用とは別に、村内の商店・共同売店・「道の駅おおぎみ」などの観光地で販売する農作物も作っている。この場合の耕種は、出荷用ではないので多岐に渡っているが、例えばダイコン・イモ・マメ・キャベツなど日常生活において食べる頻度の高い作物が多い。大宜味村内において農作物を生産・販売することによって輸送コストの低減、鮮度の保持、地域経済への貢献などのメリットが挙げられ、小さな「地産地消システム」が成立している。

さらに、販売用ではなく自家消費用として小規模に農作物を作る人もおり、この場合も普段よく食べるものを作ることが多い。自家用だけでなく、離れたところに住む家族・親戚等に渡る場合も多い。

2. 畑について

古来から農業が盛んな大宜味村には、しかしながら、はじめから農業を行なうに適した肥沃な土壌が多くあったわけではない。

村の総面積の76%は山林で、そのほぼ中央には標高300m内外の山々が連なっている。それらは海岸の近くまでせり出しているため低地・平坦地は極めて少ない。集落は狭い谷底平野や海岸平野に集中しているが、海岸に接する急傾斜地の奥に標高150mから200mの広い段丘面が発達しており、ここに開墾地を求めているため家から畠までには少々の距離がある。また土壌は、ph（酸性度）4前後の強酸性土壌の赤土で、農作物の耕種を限定する要因となっている。

しかし、一部地質が古生期石灰岩からなる地域の畠や、海岸沿いの集落近く、或いは集落内にある畠の土壌はphが比較的高く砂地もあるので、イモ・マメ・ニンジン・ダイコンなどを育てている人もいる。特に集落内や屋敷内の中規模な畠はアタイグワーと呼ばれ、そこで自家消費用の作物を作っている人が多い。

第二節 大宜味村の猪

1. リュウキュウイノシシ

ここでは、文献資料などから現在明らかにされているリュウキュウイノシシの生態を紹介する。

現在沖縄に生息しているリュウキュウイノシシは1924年、黒田長礼によって新亜種として記載された。リュウキュウイノシシは奄美大島・徳之島・沖縄本島・石垣島・西表島に分布する小型の猪で、沖縄における野生生物の中では最大の哺乳類である。またその食性は雑食性で、昆虫類・ミミズ・カタツムリ・カニ・ハブなどの動物や、シイの実・タケノコ・サツマイモ・サトウキビ・パイン・ミカンなどもよく食べる（池原ほか、1984：65）。

そして『日本の絶滅のおそれのある野生生物』によれば、「徳之島のリュウキュウイノシシ個体群は個体群としての維持が危ぶまれる水準まで減少していると推測され」ており（環境庁自然保護局野生生物課、1991：84）、環境省カテゴリーでは「絶滅のおそれのある地域個体群」に認定されているが、その他の地域のリュウキュウイノシシについては情報不足に相当する「未決定種」となっている。沖縄においてはリュウキュウイノシシに関する自然科学的な研究が未だ進んでおらず、その生態や個体数など、明らかになっていないところは多くあるようだ。

2. ヤマシシ

ここでは聞き取りによって得られたリュウキュウイノシシの生態を紹介する。特に猪の行動などについては文献資料に記されていることよりも情報が多く、人々が長い間猪を注意深く観察してきたことが分かる。

(1) 呼称について

大宜味村では、リュウキュウイノシシを方言でヤマシシと呼んでいる。ヤマシシは子供がいる場合群れをなして歩き、それがよく見られるのは春と秋の、年に2度である。普通子供の猪はウリンボーとかアカラグワー（赤毛であることから）と呼ばれるが、春（4月から5月）生まれの仔猪はイチユビグワー、秋（9月から10月）生まれの仔猪はシイグワーと呼ばれたりもする。ふつう「イチユビ」はナワシロイチゴを指し、「シイ」はイタジイを指すが、春や秋に現れ、その季節にシイの実やイチゴの実に類する

ものを食べて育っていると思われる仔猪を指して、それぞれイチュビグワー、シイグワーと呼ぶのである。

(2) ヤマシシの行動

ヤマシシは決まった巣を持たずにエサを探して移動を繰り返すというが、子供を産む時は巣らしきものを作ることもあるようだ。それは木切れなどを使って非常に丈夫に作られるといわれ、上から人が押さえつけたりしても少々のことでは壊れないという。

ヤマシシは成獣で40kgから50kgになり、その中でも赤毛のものと黒毛のものがいるが、それは種類が違うのではなく、年齢が違う。毛色は年を経るにつれてだんだん黒くなってくるもので、大型（といつても50kg前後だが）のヤマシシの毛色は黒い。ヤマシシの年齢は、毛色・牙・足の爪で大体判断でき、牙や足の爪は、その発達の程度で年齢が分かる。また成獣に関して、特に肩から前足にかけてはヤマワイ（山割り）と呼ばれ、ヤマシシの一番かたい部分である。そこは名の通り、山を突き進んだり土を掘り返したりすることが可能で、その強さは銃弾も貫通させないほどだという。そのため銃による獵の際は、ヤマワイを狙わない。この部分に心臓を守られて仕留められずに、逃げられたり反撃されてしまったりする恐れがあるからだ。

そして彼らは、半径約10kmであるといわれる生活範囲の中でエサを探して食べる。食性は雑食で、山野にある草木の実やミミズ・カニ・ハブなどの動物はもちろん、人の植えた作物や花も食べる。実際に怪我をしたという例は、今回の調査では聞けなかつたが、雑食性のヤマシシの糞にはハブの毒牙が入っている恐れがあるので、人が裸足で踏んではいけないといわれているほどである。しかし彼らは非常に警戒心が強く、鼻の利く動物であり、人間には決して近づかない。そのためヤマシシが糞に現れるのは、あまり人間のいない朝方や夕方が多い。ヤマシシは一般的に夜行性だと言われているが、そのすぐれた嗅覚で人間を避けているだけなのだとしたら、その限りではない。実際、昼間に複数頭で人間の運転する重機の側までやってきて、重機が掘り起こした土中のミミズを食べることがあったと話す人もおり、彼が重機から降りると逃げていったそうだ。

また、一般的に猪の習性としてよく知られている

のが「前進、それも曲がったりせずまっすぐ進むことのみ可能」というものであるが、ヤマシシも同様である。身の危険を感じて走って逃げる際、例えば大木など何らかの障害物に突き当たってはじめて方向転換をする。獵をするためにヤマシシを追いかけた経験のある男性は「山の中でも、自分〔ヤマシシのこと－引用者注〕が体当たりして倒せるものは全部突き倒してでもまっすぐ進む。小さい木ぐらいまでは何て事はないだろう」と話す。しかし、後進や頭から山を駆け下ることは不可能で、その習性を利用して獵を行う方法もある（後述）。

さらに、ヤマシシには決まった通り道があり、そのようなけものの道はウジと呼ばれる（写真1・写真2参照）。それは一見分かりにくいが、よく見ると



写真1 ウジの写真。山肌が現れている部分がウジ。



写真2 ウジの写真。分かりにくいが、写真中央の開いている部分がウジ。草が少し倒れている。

確かにヤマシシの足跡があつたり、周囲よりも山肌が少し現れていたり、低草木が倒されていたりしている。ヤマシシの被害に遭つたり、獵を行つたりしている人々はウジをすぐに見つけ、残された足跡などから何日前のものか判断することができる。また、ヤマシシが泥浴びをする場所をヌタバ（写真3参照）



写真3 ヌタバの写真。ヤマシシが自ら土を掘って、泥浴びをした跡。

といい、自ら土を掘ってヌタバを作ることもある。ウジやヌタバに人間が近づき、そこにヒトの匂いの残っている間はヤマシシは決して現れない。1週間から2週間の時間をおくか、雨が降ったりなどすれば再び姿を見せるが、このようなところでもいかにヤマシシの嗅覚がすぐれ、警戒心が強いかが分かる。

現在では、昔ほどヤマシシの姿を見かけなくなつたと話す人は多いが、今なお畑に現れては農作物を食い荒らし、農家に被害を与えていた。

以上のように大宜味村の人々は、ヤマシシについてたくさんの知識を持っている。これは人々の生活とヤマシシが深くかかわっており、人がヤマシシに対して大いに関心を寄せているということに他ならない。次節では、人の生活とヤマシシがどのように深く関わっているのかを述べたい。

第三節 ヤマシシによる獣害

1. ヤマシシによる農作物への被害

大宜味村の人々の生活とヤマシシは、農作物をめぐって深く関わっており、畑への被害は現在でも後を絶たない。ヤマシシは、山野の中よりも畠のほうが食べ物は豊富にあるので、人間に出会う危険を冒しても畠へ出ていく。彼らが特に好むのはイモで、主食が米に成り代わった現在では、アタイグワー（家庭菜園）などで小規模にしか植えられなくなつたが、それを目当てにヤマシシは集落内に現れ、人の屋敷内まで入ってくることさえあるという。

ヤマシシは非常にすぐれた嗅覚を持つ上、頭が良い動物である。サトウキビや柑橘類やイモは、成熟して収穫間近な頃に食べられてしまう（写真4・写真5参照）というが、これは嗅覚によって食べ頃か

否かを判断しているのではないかといわれている。サトウキビについては畠の外側からかじっていくのではなく、畠の真ん中に入つてから食い荒らす。外見からは畠が荒らされているのかどうか判断が付きにくいので、農家のによれば「収穫の時になつて気が付いたら畠の真ん中は運動場〔状態ー引用者注〕だった、ということもある」という。また柑橘類も人間が食べるようきれいに皮をむいて食べ、「それ〔ヤマシシの仕業であることー引用者注〕を知らない人はミカン泥棒かと思うほど」であるそうだ。さらにパイナップルならば新芽のうちに食べられ、パパイヤや芭蕉ならばその根っこを掘り起こして食べられてしまうのである。しかしそれだけではなく、ヤマシシはこれらの農作物を食い荒らす時、少しの作物を最後まで食べきるのではなく、たくさんの作物を少しづつかじり、広範囲にわたって畠を荒らしてしまうので、農家にとってヤマシシによる獣害は大変深刻な問題である。

農家の方も農作物を守るために、畠に柵を設けたりネットを張り巡らせたりなどとさまざまな防御策を練るが、柵は1m未満のものであれば飛び越えられ、ネットは噛み千切られたりすることもある。しかし本章第一節で述べたとおり、家から畠までには少しの距離があり、特に夜間などはヤマシシが現れてもなかなか目が行き届かないという現実がある。どうやら農作物を食べるためにはヤマシシを、畠にて「防御する」のみでは、農作物を十分に守ることは困難であるようだ。

しかしながら、このように農家にとって生活を脅かす存在であるヤマシシは、なぜかジャガイモとダイコンには手を出さないといわれている。これは獣害とは直接関係ないが、興味深い昔話があるので以下に紹介したい。筆者が情報として得たのは、宇賀名城の女性から実際聞いた話を基にして、塩屋保育所が2000年に発行した絵本『ヤマシシとだいこん』（大宜味村立塩屋保育所、2000）である。おおまかにあらすじを紹介すると、「イモ畠の獣害に悩む人たちに追いかけられ、危うくヤマシシ汁にされるところのヤマシシを、優しいダイコンはその葉にヤマシシの身を隠してやった。それ以来ヤマシシは、命の恩人であるダイコンを食べなくなった」というものである。

ヤマシシはダイコンを食べずにその身を人間から守ってもらい、ダイコンはヤマシシに食べられずに大きく育つ。昔話においても、ヤマシシは農家にとっての害獣だとされており、共生・共存の関係にはないようだ。



写真4 荒らされたイモ畠。土が掘り起こされている。



写真5 荒らされたタンカン畠。夜間撮影されたので分かりにくいが、タンカンの皮はきれいに剥かれ食べられている。

2. 大宜味村の猪垣

猪垣は、ヤマシシが耕地へ侵入するのを防ぐ目的で1770年代から作り始められた。それは国頭村から名護市まで何集落にもわたって張り巡らされており、かつてその長さが31000m余りあったことから「十里の長城」とも表現された。大宜味村では猪垣をして方言でシシガキとかヤマシシガキと呼んでおり、

現在では山の開拓などによる破壊を免れた部分が遺構として残っているだけで、本来の役割を果たすというよりも「村の文化財」としての位置付けが強い。

戦前までは実際に猪垣は機能しており、各集落単位で区間を分担してシシガキを管理していたという。分担区域のシシガキが壊れ、そこからヤマシシが侵入すると大変なさわぎになったといい、共同責任によって集落に罰金が科せられてしまうこともあった。それを避けるため、シシガキブーといってシシガキを補修・改修する賦役が行われていたが、字屋古に住む話者によれば、終戦後1度だけシシガキブーがあったのを最後に、以降は手入れをしていないという。

シシガキは場所によって造りに違いがあり、石墨・土墨・切り土・堀切・岸壁などがある。それらは各々の地域の地形や地質や植生など、自然をうまく活かして造られたもので、海岸近くのシシガキの中には、切り土の上縁部にテーブルサンゴを軒状に差し込んでヤマシシが垣を越えられないようにしたものもある。

村の人に案内して頂いて筆者が実際に歩いたのは、字押川にある石墨のシシガキで、リゾート「サンセットビュインシャーベイ」跡地から入る散策道（村の予算で4～5年前に造られたという）に沿つてあるものだった（図参照）。石墨は、もともと周辺にあった石を人が積み上げたもので、その場所は石灰岩地帯であることが窺える（写真6・写真7参照）。その付近には自然の大岩がそのままシシガキの役割を果たしている箇所もあった。

ヤマシシから農作物を守るために造られたシシガキが使われなくなったのは、戦後の混乱や人口の減少や山の開発による破壊もあったが、もともとその管理の困難さも大きな理由だったと考えられる。戦後になって「ヤマシシを侵入させた集落の共同責任を問う」ことがなくなつてからは、それまではしっかりととなっていたシシガキの手入れや管理がなされなくなり、獣害対策の方法は各々の農家に委ねられていったと思われ、またその方法の一つとして行われる猪猟の様子も、次章で詳述するように変化していったと考えられる。

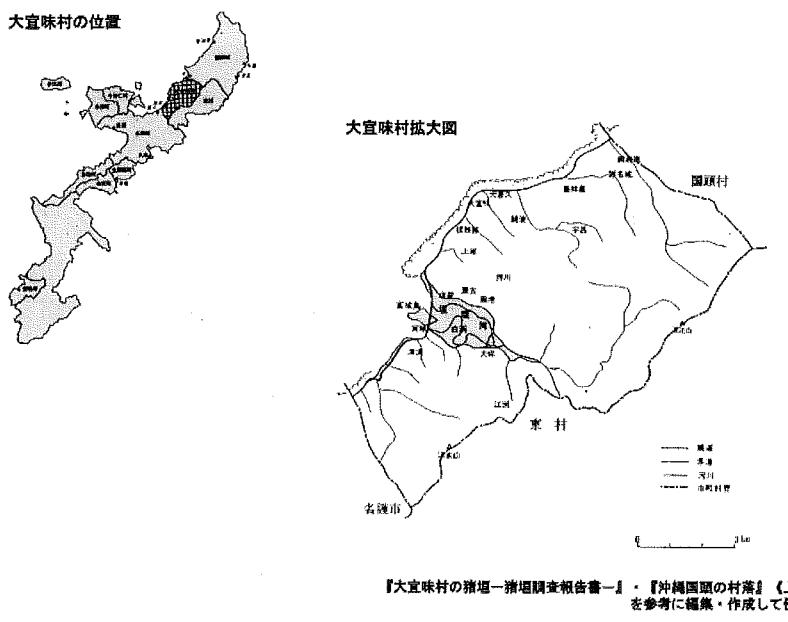


図1 「大宜味村の位置・拡大図」



写真6 猪垣



写真7 猪垣

第二章 猪猟

第一節 猪の目的

猪猟は、人々が農耕を行う以前から行われており、『大宜味村の猪垣—猪垣調査報告書一』によれば、「四面海に囲まれ魚介類・海藻類にめぐまれているとはいえ、海の荒れる日がつづくときはもっぱら陸上の動植物に依存しなければならなかつた。大型動物の棲息しない沖縄では猪は最大の獲物であり、猪狩りは貝塚人の生活がかかつた狩猟であった」という（大宜味村教育委員会、1994：33）。人々にとってヤマシシは、肉を食べる機会があまりなかった頃までは貴重なタンパク源であり、その当時を知る人は、日本復帰前くらいまでは食料として盛んにヤマ

シシが捕られていたと話す。特に戦前や終戦直後は、肉などの以前に食料自体が不足状態にあつたため、積極的に山に入って猪を仕留めてくる人も多くいた。しかしながら戦後になって、食糧増産を奨励するため硝酸アンモニアなどの金肥が配給されると、それまでよりも換金農業に力を入れるようになつた。そのためそれ以来、ヤマシシを狩る目的は「食料の確保」よりも「害獣駆除」に重きがおかれるようになつたのは明白である。

もちろん現在でも捕ったヤマシシは人々に好んで食されるが、ヤマシシの肉を「食べるためには捕る」のではなく、畑を荒らす害獣であるヤマシシが「捕れたから食べる」のである。猪猟の目的の変化は、

人々の食糧事情の変化によってもたらされたと考えられる。

第二節 猿法の変遷

1. 猿師について

猪猿を行う猿師を、大宜味村ではヤマシトゥヤー（ヤマシシを捕る人）と呼ぶ。ヤマシトゥヤーは専業の猿師ではなく、農業や林業を行う一般の人である。そのため彼らにとっても、ヤマシシによる獣害は決して他人事ではない。

本土の狩猟民俗研究においては、狩猟を行う猿師について、彼らが「狩猟民」か否かという議論が今後の課題の一つであるという。永松氏は「農耕専従者にはない独特的神観念や習俗、宗教性を有する狩人たちを、農耕民俗の一部とする捉えかたでは、なかなかうまく説明がつかない」（永松、1997：131）としながらも、「農業を営みながら、ある一定の期間、猿に専従することが狩猟民といえるかどうか、慎重に考える必要がある」と指摘している（同前：131）。また千葉氏によれば、国頭村においては猿師の山の神に対する信仰があるといい、海神祭のときにうたわれる神女のウムイ〔神歌のこと－引用者注〕の中にも猪が出てくる（千葉、1971）という。しかし筆者が話を伺った大宜味村のヤマシトゥヤーの方々からは、特に独特的神観念や習俗などは見られず、狩猟に関する儀礼などの話も聞かれなかつた（注2）。

少なくとも大宜味村におけるヤマシトゥヤーは「狩猟民」というカテゴリに当てはまるとは言えず、彼らは戦前から「日常生活の中で必要に駆られて」猿を行ってきたように思える。それではここから、ヤマシトゥヤーの姿が戦前からどのように変わつていったかを整理していきたい。

戦前まではシシガキによって、耕地がヤマシシによる獣害から守られていたため、ヤマシトゥヤーといえば特殊な人であったという。当時からヤマシシは農作物を荒らす害獣ではあったが、わざわざシシガキを越え、外山まで出かけていって猪狩りを行う人は「相当ヤマシシの肉が好きな人」であったのだそうだ。

しかし戦後になってシシガキがその役割を果たさなくなると、ヤマシシによる農作物への被害は拡大

していく。そのため一部のヤマシトゥヤーだけではヤマシシの退治が追いつかなくなつたと考えられ、実際畠に罠を仕掛け、独自にヤマシシを捕っていた農家が多かった時期もあったという。この場合の猿は、猿師によって行われるものではないので、これらの農家が特にヤマシトゥヤーと呼ばれるることはなかった。だがその後、猪狩りを行うためには狩猟免許が必要だという規制が一般に浸透し、ヤマシシを捕る人が再び減つてからは、免許を持って猪猿を行う人を指してヤマシトゥヤーと呼ぶようになつた。以上のような変化を経て、彼らにヤマシシの退治を依頼するという現在の形がとられ始めたと考えられる。

現在猿を行うためには、罠を使用した猿でも銃を使用した猿でも資格免許が必要となる。「狩猟免許」には、甲種・乙種・丙種（平成14年度現在）があり、甲種は網・わな、乙種は銃器、丙種は空気銃・ガス銃を使用する狩猟の免許である。また狩猟免許の他に、実際に狩猟を行う時は「狩猟者登録証」がなければならない。これは、狩猟を行う都道府県ごとに入猟税と狩猟者登録税を支払って申請するものであり、登録されると狩猟者登録証と記章（バッジ）が交付され、猿が可能になる。さらに、銃器を使用する猿ならば「銃砲所持許可証」も必要である。これは住所地を管轄する警察署で、猿銃に関する試験に合格した後に申請をするものである。銃砲所持許可証を受け取れば、銃砲店で銃を購入することができる。

狩猟を行うということは様々な危険が伴うため、書類の申請などの手続きは非常に多い。「狩猟免許」は3年に一度、「狩猟者登録証」は毎年、名護市にある北部林業事務所で更新しなければならないし、「銃砲所持許可証」も3年に一度警察署での更新が必要である。特に銃器に関してはそれだけではなく、所持する銃弾の数を報告したり、警察が要求すれば所持する銃器の検査に応じたりする義務もある。現在大宜味村では銃器による猪猿が多いが、「手続きが面倒だから」と銃を手放し、猿をやめてしまった人もいる。

このようなことから、現在のヤマシトゥヤーの数は少ない。実際猿を行なっていた人の話によれば、村全体で10人に満たないほどではないかという。少

数のヤマシシトゥヤーによる害獣駆除が行われているため一人あたりの駆除頭数は多く、年間約20頭のヤマシシが一人によって駆除されている。過去には、2ヶ月間で24頭ものヤマシシを捕つたという人もいる。

2. 猿活動の実際

(1) 猿を行う際のさまざまな規約

現在猿を行う際には、「鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律」で定められたさまざまな規約があり、害獣駆除をするためであっても、自由に猿を行ったりヤマシシを乱獲したりしてはならないとされている。

まず基本的に猿を行える期間は決まっている。猿の解禁日は11月15日から2月15日までの3ヶ月間であり、その他の期間は「禁猿期」となる。また、猿が行える場所にも制限があり、狩猟者登録をした人には毎年「禁猿区」に関する地図が配布される。禁猿区に指定された場所は、その中に耕地があつてもそこで猿を行うことは出来ない。

しかし村役場に「有害鳥獣駆除の申請」をし、県からの許可が下りれば禁猿期でも特別に猿を行うことが出来る（注3）。

禁猿期間の有害鳥獣駆除に関する手順は、まず1ヶ月内で駆除する予定の猪の頭数を申請し、「鳥獣捕獲許可証」を交付してもらう。このときは、村役場に猪による害の証拠を提出しなければならない。証拠とは、被害を受けた畑の写真と、害獣駆除の依頼者によって書かれた「有害鳥獣駆除依頼書」である。そして許可が下り、捕獲した後は、再び村役場へ行って実際の捕獲頭数を報告するのである。

書類上では、始めに申請した頭数以上の猪は駆除しないことになっており、報告頭数が申請頭数を上回ることはない。しかしそれらの数字はあくまで「禁猿期に害獣駆除をするものとして大宜味村役場に申請された頭数・報告された頭数」であって、役場の人の話によれば、実際に駆除された数や猿が解禁されている期間に捕られた数など、報告されていないものを合わせれば、実のところはこれ以上に捕獲されているかも知れないという（注4）。

(2) 猿の方法

沖縄本島北部における猿について、これまでに

いくつかの報告がなされてきたが、今回の調査では伝統的な猿の方法に関する情報は十分に得られなかつた。以下では、今回の調査で聞き取ることが出来た猿法を主として述べることにする。

①戦前における猿

まだヤマシシトゥヤーが特殊な人であったとされる戦前の頃は、畑に罠を仕掛けたり、現在のように銃を使ったりする猿は行われていなく、原始的な方法による猿が主となっていた。それはインビキ（犬引き）とかインビカーと呼ばれる猿法で、その名の通り猿犬を従えての猿である。現在でも猿犬を使った猿は行われているが、戦前当時は猪を仕留める道具がヤリやハンマーであった。後進や頭から山を駆け下ることのできないヤマシシを、猿犬を使って谷間や岩穴などこれ以上逃げられない場所に追い込み、ヤリやハンマーで仕留めるのである。しかし、ヤマシシに接近して直接手で仕留めるこの方法は危険が伴い、手負いのヤマシシに反撃されることもあった。

また猿犬について、猿の際に連れて行く猿犬は複数頭いるといい、その中でも一番賢く力のあるものが中心となってヤマシシを追う。その犬種にはこだわらないとされるが、一般的にはトゥラーという種類の琉球犬が良いといわれている。そして猿が成功し獲物が得られると、猿の中心を担った犬には一番最初に褒美の肉や内臓が与えられた。



写真8 畑で発見されたヤマシシの足跡

②罠による猪獣

次に、農家の人々も独自に行っており、畑に仕掛けた罠による猪獣について述べたい。伝統的な猪獣の方法においては罠の中にもいろいろな種類があり、例えばサギヤイ（下げ槍）や据え銃などといった罠があったようだが、今回の調査で主に聞かれたのはワイヤーを使った罠で猪獣を行う方法であった。それはワイヤーがヤリや銃よりも比較的簡単に入手できることによるものだったと思われ、広く行われていたようだ。

農作物がヤマシシによる被害を受けているかどうかは畑についた足跡から判断でき（写真8・写真9参照）、罠を仕掛けるときは、まずウジを探すことから始める。ヤマシシがどこから畑に入り、出ていくのかを把握してから罠を仕掛ける場所を決めるのである。実際に罠を仕掛けた経験のある男性によれば、罠は畑に入ってくる場所よりも、畑から出て山に帰る道だと思われる場所に仕掛けたほうが捕獲率が上がるのだという。それは、人間の匂いがついた畑に入る前のヤマシシは非常に警戒している状態であるためで、農作物を食い荒らして満腹になった状



写真9 畑で発見されたヤマシシの足跡



写真10 ワイヤー罠

態だと、ヤマシシの気は少し緩んでいるのだそうだ。

そうして罠を仕掛ける場所を決めたら、実際に罠を作る。ワイヤー罠にもまた複数の種類があるというが、今回の調査で聞かれたのは、ワイヤーで締め輪を作つて一端を固定し、ヤマシシが逃げられないようにするという仕掛けである。

ワイヤーで作る輪は基本的に直径25cmから30cmのもので、それはヤマシシの頭部が入る大きさである（写真10参照）。その輪はヤマシシが逃げようと引っ張ると、次第に締まっていく仕掛けである（写真11参照）。そしてそのワイヤーで作った締め輪の先は、弾力性があって折れにくい木、またはススキや竹を束にして地面から抜けないようにしたものなどにくくりつけられ、固定される。しかし、罠を仕掛けたい場所にそれらのような植物が必ずしも生えているとは限らないので、その場合は2m位の長くて非常に丈夫な棒の中間辺りに固定する（写真12参照）。こうすれば、ヤマシシが逃げようとしても長い棒がどこかに引っ掛かってしまい、遠くまで行けないのである。

大体、締め輪を地面につけて置いた場合は足が、地面から5cm以上の高さに置いた場合は首がかかることが多い、ヤマシシは自分の足をちぎってでも逃げようとするので、首がかかるように狙つて罠をしかける方がよいという。しかしそうすると、ヤマシシは死んだ状態で罠にかかっているのを発見されることが多いので、その肉は腐敗し始めてしまい、発見が遅れると食べられないことがある。また罠を仕掛ける際は、ワイヤー自体についた人間の匂いでヤマシシが罠に近づかないと困るので、あらかじめワイヤーを湯で洗つて風雨にさらすといったような

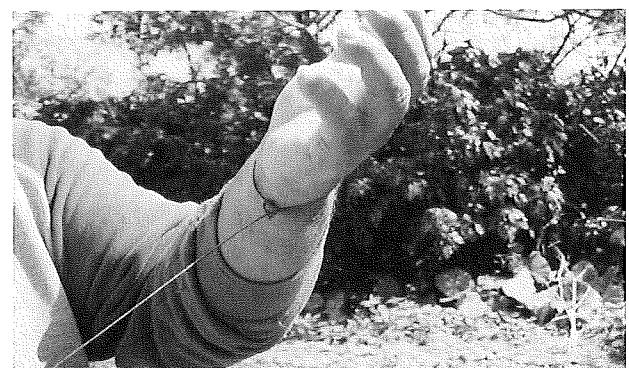


写真11 ワイヤー罠の写真。逃げようと引っ張ると、ワイヤーが締まる仕組み。

用意をすることもある。それでも罠を仕掛けてからヤマシシが掛かるまでには、1週間以上も後になるという。



写真12 フイヤー罠の写真。人物の横にある棒は、約2mある。

③銃による猪猟

最後に、大宜味村において現在主に行なわれている、銃を使った猟法について述べたい。かつては「据え銃」などといった、銃を使った罠もあったそうだが、現在では禁止されており行なわれていない。銃を使った罠で実際に猟を行った例は、今回の調査では直接聞くことが出来なかった。

ヤマシシトゥヤーは、彼自身が自らの畑に残されたヤマシシの足跡を見たり、人からヤマシシを目撃したという情報を得たりして獣害に遭ったと判断し、猟を行う。罠を使った猟同様、銃による猪猟においても最初に行なうべきことはウジの確認である。銃による猪猟は罠とは違い、動いているヤマシシをその場で撃つというものであるため、ヤマシシが出現する場所は勿論、そこに現れる時間などもあらかじめ下調べしておき、ヤマシシに出会わなければならない。その点においては罠による猟よりもかなり計画的に行なわれる猟である。ウジは一定時間（2時間など）おきに見回り、ヤマシシがそこを通過する時間を特定するという。ヤマシシは毎日決まった時間にウジを通る習性があり、時間ぴったりに現れるそうだ。現在も猟を行なっている人の話によれば、ヤマシシがウジを通る時間は「(前の日の差と)引

用者注) 5分も狂わない」らしい。

ヤマシシがウジを通る時間が特定できると、ヤマシシトゥヤーはその時間に合わせてウジや畑にヤマシシが現れるのを、身を隠して静かに待ち伏せる。その場所は草木の茂みか木の上など見つかりにくい所がよいとされる。そして獲物が現れるとゆっくりと接近して銃を構え、狙い澄ませる。ヤマシシは人間が風上にいると、その匂いで数百メートル先からでも感づいてしまうので、風下から接近しなければならないが、そうすればヤマシシは目が悪いのか、それとも食べるのに一所懸命なのかは分からぬといふが、3mから4mまでは近づけるという。

また銃を撃った後は、獲物が絶命したと確認できるまで直ちに近づいてはならない。手負いのヤマシシは大変凶暴で、襲いかかってくる恐れがあるからだ。あるヤマシシトゥヤーは、実際それによって体当たりされた上、鋭い牙で傷つけられて何針も縫う怪我を負ったと話す。

銃について、使用する銃は散弾銃であり、それを撃つことができるのは日の出から日の入りまでと規定されている。以上のように銃を使った猟は、さまざまな規制や技術が伴うため非常に計画的に行なわれる。

前節で述べた通り、現在大宜味村で行われている猪猟は専ら「害獣駆除」が目的である。大宜味村においては現在、猟銃でもって大型の動物を捕殺しているものの、「防御的狩猟（注5）」が行なわれている。このような猟は、ヤマシシの棲息場所まで赴いて行なうのではなく、畑やその付近で行なわれ、さらに獲物に特別な経済価値を見出すことはない。シシガキが機能し、ヤマシシトゥヤーが積極的に深山へ入って、肉を得るための猪狩りを行っていた頃と比較し、「攻撃的狩猟」から「防御的狩猟」へと変化していったものだと思われる。

しかしながら次節で述べるとおり、猟の獲物となつたヤマシシは「経済価値」とまではいかないが、人々によって独自に解体され、消費される。次節では、その詳細を述べていきたい。

第三節 捕らえたヤマシシの処理・消費

1. 捕らえたヤマシシの解体・消費

捕らえたヤマシシ（写真13参照）は猟場から家に

持ち帰り、解体をする。猪は家畜ではないため食肉センターに持つていて解体させる必要はなく、独自で行うものである。ここでは、ヤマシシの解体の手順と肉の消費について述べたい。

獲物が捕れると、その解体は数人が手伝って行なわれる。罠にかかってまだ生きているヤマシシならば、まず首を切って血を抜くことから始めるが、銃による獵などで既に絶命しているヤマシシは首を切つても血は流れないのでそのままにしておく。この場合は、後でヤマシシの腹を割いたときに胃の辺りに溜まっている血の固まりを取り出す。これはウブサーと呼ばれ、以前はチーイリチー（血の炒め物）などにしたというが、現在では衛生上の理由からあまり口にしないそうだ。

1960年代に行われていたという解体方法の手順では、まずシンメーナビという大きな鉄製の鍋の中に湯を沸かし、その湯をヤマシシの体にかけてその上から毛布やカマスを被せる。これは毛と皮を蒸らしてふやかせ、後で剥ぎ取りやすくするためである。次に、ふやかせたヤマシシの体に藁をかけ、藁を燃やす。そうするとヤマシシの毛が燃え落ちて体は蒸し焼きの状態になり、その後はタワシなどで擦って皮ごと毛を刮ぎ取る。藁で体を燃やし、タワシで毛を剥ぎ取るという行程を、毛がきれいになくなるまで繰り返すと、豚のように真っ白になるという。これらが終わると首を落とし、腹を割いて内臓やウブサーを取り出し、包丁やナタで肉を切り分ける。

対して現在行なわれている解体方法は、最初からバーナーで真っ黒になるまで毛と皮を焼き、タワシで皮を擦って毛を刮ぎ取るというものである。その後は以前と同様で、首を落とし、腹を割いて内臓や



写真13 仕留められたヤマシシ

ウブサーを取り出し、包丁やナタで肉を切り分ける。バーナーを使うことによって、現在の解体方法はより簡単になっているが、それで毛と皮を焼くと、皮が茶色くなり、刺身にしたとき肉が焦げ臭くなつておいしくないという。また刺身にする場合は、獲物を生け捕りにした時など肉が新鮮であれば可能だが、現在では新鮮でも生肉につく菌を恐れて刺身にすることはあまりないという。

解体後の肉は隣近所の人々を呼んで食べる。呼ばれた人達は酒やビールを持って訪ね、ヤマシシ料理を振舞つてもらう。ヤマシシ肉の料理は、汁か焼き肉にすることが殆どで、汁にはフーチバー（よもぎ）を入れるとおいしい。ヤマシシの肉には独特の風味があり、それを好んで食べる人は多い。人によって好みはあるが、一般にボージシ（背中あたりの肉）が一番おいしいといわれる。以前は内臓も食べていたという話だが、内臓には回虫などの虫やその他の菌などがいる恐れがあり、衛生的によくないと分かつてからは食べずに畑の肥料にしているという。しかし特に胆のうはイと呼ばれ、あるヤマシシトウヤーの話によれば、イを乾燥させて泡盛に漬け込むと、とても良い胃薬になるそうだ。実際、これで潰瘍を治した人もいるといい、非常に効果があると話す。

ヤマシシの肉を振舞わされた人は、ヤマシシトウヤーに対し「クワッチャサビタン（ごちそうさま）」ではなく「タラジサビタン（不足しました）」または「タラジしました」と言う。これは次の獲物が捕れるようにとの縁起だとしたり、ヤマシシトウヤー本人が「ヤマシシの肉はもう満足なのか」と思い、捕らなくなってしまうのを避けるためだという。

これは現在でも使われている言葉で、村の人々にとってヤマシシの肉を食べることは非常に楽しみであるということを知ることができる。現在ではヤマシシの肉を冷凍保存しておいて小規模に販売を行っている人や、ヤマシシ牧場を持っている人もいる。その肉を買うのは販売している人の知り合いなどが多く、口づてで買いに来る。

2. ヤマシシの処理

前節で述べたとおり、大宜味村には昭和60年から有害鳥獣駆除事業に対し、村の予算内で補助金を交付するという規定がある。この規定によって、駆除

したヤマシシの下顎と「有害鳥獣駆除事業補助金交付申請書」を村役場に提出すると、1頭あたり2600円が申請者に補助金として交付される。しかし、害獣駆除に対する補助金が支払われるという制度自体は昭和60年以前にもあったようで、「一九六五年から琉球政府は積極的に猪駆除対策にのりだし、関係市町村に猪垣修築補助金および猪捕獲補助金を交付」していたという（平敷 1991：226）。しかし、改めて昭和60年から「大宜味村有害鳥獣駆除事業補助金交付規定」が施行されたということは、恐らく1965年以後、山林の開発等で猪垣の修築が殆ど意味をなさなくなってしまい、ヤマシシによる被害を被った農家が独自に駆除を行う中で、害獣駆除事業が各市町村に委ねられ、そのレベルで補助金が交付されるようになったのではないかと思われる。

現在は、予算が許す以上の駆除頭数に対する補助金は交付されないことになっている。平成14年度は、猪に関しては10頭分までが交付の対象となったが、予算次第では年によってその頭数が増減する。

また、補助金交付の申請ができるのは狩猟免許保持者、すなわちヤマシシトゥヤーである。現在村内には10名未満のヤマシシトゥヤーがいるが、毎回同じ人が補助金をもらうのは不公平であるため、「今回は誰が補助金をもらうか」ということを全員で集まって話し合いで決めるのだという。そしてもらう人が決定すると、その人は村の狩猟者の代表として10頭分の交付金を受け取るのである。このようなところをみれば、大宜味村においては狩猟者同士の交流があるようだ。彼らの間では猟銃の譲り合いやヤマシシに関する情報の交換も行われている。残念ながら今回はその全員に会ってお話を伺うことはできなかったが、10名未満という少ない人数が交流を可能にしていると思われ、彼らの相互関係も非常に興味深い。

第三章 ヤマシシに対する人々の認識

第一節 農家

近年になって山の開発は進み、ヤンバルの森は徐々に野生生物が住みにくい環境になっている。ヤマシシもその影響を少なからず受けているはずであり、正確な調査は未だなされていないが、個体数は減少の傾向にあると考えられる。

実際「昔ほどはヤマシシの姿を見かけなくなった」と話す人は多く、ヤマシシの減少を認めている。かつて畠に侵入してくるヤマシシを罠でもって自ら捕え、食べていた人も「今はかわいそうだと思うし、自分では捕らない」という。さらに、リュウキュウイノシシが貴重な野生生物だとみなされ、それらを保護しようとする動きについても農家は寛容である。

ヤマシシに対して可哀想だという気持ちが生じたのは、まず環境保護の視点から重要視されている「ヤンバルの森」を村にすむ人々も意識し始めたことと、主食が自家栽培のイモから販売されている米に成り代わり、ヤマシシやその他の動物による獣害が、家庭の食卓に直接的な打撃を与えるものではなくなつた事によるものだと考える。

しかしながら農家の人々は、かわいそうだと思う一方で、畠に害を与えるヤマシシを狩ることについては「畠を荒らすから仕方のないことだ」とも言う。それはヤマシシによる農作物への被害が現在でも後を絶たないからであり、これまでにも述べたとおり農家にとっては、生活を脅かす存在なのである。

第二節 ヤマシシトゥヤー

現在大宜味村に住む人々の中で、ヤマシシと一番密接なのはヤマシシトゥヤーの方々である。農家の人に依頼されて少人数で村内のヤマシシの駆除を請け負う彼らは、他の誰よりもヤマシシのことについて知識があり、現在ヤマシシを取り巻く状況も敏感に感じ取っているのではないだろうか。かつては、一人で2ヶ月の間に24頭ものヤマシシを仕留めることもできた時期もあったのに対し、現在では1年で約20頭しか捕れなくなった。その点からもヤマシシは明らかに減少していることに気付いている。

しかしヤマシシトゥヤーは狩猟専従者ではなく、農業や林業を兼業している。そのため猪による害は他人事ではなく、ヤマシシに対する認識は農家の人々と同様であると思われる。一時期、リュウキュウイノシシを保護するものとして害獣駆除が制限されようとしたことがあったそうだが、「猪が好きでヤマシシの乱獲をしているわけではない。もし制限されても、畠に来て荒らすものに対しては捕る。と言って反対した」と話す方もいた。

第三節 農業を行わない人々・塩屋保育所

前節までは、農作物をめぐって攻防戦を繰り広げ、害獣ヤマシシと深く関わりを持ってきた農業従事者について述べたが、ここで最後に、農業に携わらない村の人々が、ヤマシシをどのように認識しているのかを考察したい。その例として「塩屋保育所」を以下に紹介する。

大宜味村には、喜如嘉保育所・塩屋保育所の2カ所の村立保育所がある。各保育所では、1996年より「地域に根ざした保育」を目指すものとして喜如嘉保育所で「ぶながや（木の精）」、塩屋保育所で「ヤマシシ」を保育テーマにしている。

塩屋保育所では普段の保育活動からヤマシシをテーマに取り入れ、例えば子どもを誉めるときも叱る時も「ヤマシシみたい」という言葉をかける。それはヤマシシの生態や行動がヒントになっており、ヤマシシの好ましい点に似た子どもの行動が誉める対象、そして好ましくない点に似た子どもの行動が叱る対象となっているわけである。

その他にもヤマシシをテーマにした遊戯・劇を運動会や地域のイベントで披露したり、第一章第三節で紹介した絵本『ヤマシシとだいこん』などを独自に作成して読み聞かせたりと、農家にとっては害となっているはずのヤマシシが、可愛らしくキャラクター化されている。ヤマシシは「暴れん坊だが、とても元気で頭が良い」動物だというイメージがあるのだという。

塩屋保育所のヤマシシに対する認識は、農業従事者ではない人々にも通ずるものがあると思われる。ヤマシシが農家に被害をもたらす害獣であるとは知っているが、農業や林業に従事していない人々にとっては、ヤマシシは恐るべき、または憎むべき存在ではない。どちらかといえば、減少しつつあるヤマシシに同情し、野生生物と人間の共存を理想としている。

ヤマシシを「害獣」と見るか「貴重な野生生物」として捉えるかは、少しばかり皮肉なことではあるが、ヤマシシとの関わりの多寡による気がしてならない。彼らとの距離が近く、互いに生活が掛かっているという点で非常に密接な関係を持つ農家の人々と、それらを認知していくながら自らの実生活にはあまり影響しない人々の間には、ヤマシシに対する認

識に少々の差があると思われる。

注 釈

〈注1〉

篠原徹は、新しい民俗学の分野である環境民俗学を提唱し、それについて「[人の一引用者注] 生活世界と生物的世界に代表される環境との、トータルな関係性の歴史と現在を追究すること」だとした（篠原、1997：16）。この分野は、本稿の目的に近いものだと考えられ、実際そのようなものを目指した。

〈注2〉

本来ならば、宗教的・儀礼的な側面からもヤマシシを捉え、例えば集落の神女などにヤマシシが関わる行事の有無やその意味などの話を伺うべきであつたが、本稿のテーマである「猪と人々の生活の全体的な関係」を述べる中、今回は日常生活に主眼を据えた調査を行った。しかし、宗教的・儀礼的観点から猪と人の関係を考察することも非常に重要なことで、猪獣や猪そのものに対する宗教的意味づけが可能だとすれば、それを今後の課題としたいと思う。

〈注3〉

これは大宜味村が有害鳥獣駆除事業に対し、村の予算内で補助金を交付するという規定に基づくもので、昭和60年4月1日から施行されているものである。

〈注4〉

ちなみに、平成14年度の年間を通しての猪駆除報告頭数は、申請数が24頭だったのに対し、報告数は17頭であった。報告数が申請数を上回っていないところから、猪の個体数は減少の傾向にあると伺えるが、獵前後の煩雑とも言える手続きや、決して単純ではない猪獣の実際も、その原因の一つだと考えられる。

〈注5〉

萩原氏は「農作物を鳥獣から守るために狩猟と獲物に積極的な価値を求める狩猟とでは、動物に対する態度に違いがみられる」とし、狩猟は防御的狩猟と攻撃的狩猟に分ける見方があると述べた（萩原、1996：196）。さらにこの2つの分類については、「防御的狩猟は耕地に侵入しようとする動物を罠などで待ち受けて捕殺する消極的な狩猟である。これに対して攻撃的狩猟は、人間の側から動物の棲息領

域に進出して捕獲する積極的な狩猟であり、獲物のもつ経済的価値を目的とする場合が多い」としている（萩原、1996：197）。

参考文献

- 池原貞雄・宮城邦治・与那城義春・当山昌直. 1984. 琉球列島動物図鑑(1)陸の脊椎動物. 新星図書出版
- 池原直樹. 1979. 沖縄植物野外活用図鑑－第6巻 山地の植物－. 新星図書出版
- 今井一郎. 1980. 「八重山群島西表島におけるイノシシ猟の生態人類学的研究」. 民族学研究45(1). 日本民族学会
- 大宜味村教育委員会. 1994. 大宜味村の猪垣 一猪垣調査報告書－. 大宜味村文化財調査報告書第3集. 大宜味村教育委員会.
- 大宜味村史編集委員会. 1978. 大宜味村史(資料編)
- 大宜見村. 1979. 大宜味村史(通史編). 大宜味村史編集委員会.
- 大宜味村立塩屋保育所. 1997. ヤマシシ(絵本). 大宜味村立塩屋保育所.
- 大宜味村立塩屋保育所. 2000. ヤマシシとだいこん(絵本).
- 沖縄県環境保健部自然保護課. 1996. 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物－レッドデータおきなわ－. 沖縄県環境保健部自然保護課
- 沖縄大百科事典刊行事務局(編). 1983. 沖縄大百科事典上巻・下巻. 沖縄タイムス社
- 「角川日本地名大辞典」編纂委員会. 1986. 角川日本地名大辞典47(沖縄県). 角川書店
- 環境庁自然保護局野生生物課. 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物－レッドデータブック－(脊椎動物編). 日本野生生物研究センター
- 篠原徹. 1990(初出1988). 「自然・生態・民俗」自然と民俗 心意のなかの動植物. 日本エディタースクール出版部.

篠原徹. 2001(初版1997). 「12のアプローチ 環境民俗学」. アエラムック(民俗学がわかる.). 朝日新聞社

新谷尚紀編著. 2000(初出1999). 民俗学がわかる事典. 日本実業出版社

大日本猟友会. 1992. 獣猟読本. 社団法人大日本猟友会

千葉徳爾. 1971. 「南西諸島のいのししとその狩猟」. 続 獣猟伝承研究. 風間書房

永松敦. 1997. 「狩猟」. 野本寛一・香月洋一郎編.

講座日本の民俗学5〈生業の民俗〉. 雄山閣

萩原左人. 1996. 「暮らしと動物」. 野本寛一・福田アジオ編. 講座日本の民俗学4〈環境の民俗〉. 雄山閣

平敷令治. 1991. 「山原の猪垣・猪狩・猪狩儀礼」. 神・村・人 琉球弧論叢. 第一書房

山原猪研究会. 1994. 「ウーガチ 奥特集」. 山原猪研究会 会報(1). 山原猪研究会

平凡社地方資料センター. 2002. 日本歴史地名大系 第四十八巻. 沖縄県の地名. 平凡社

参考資料

- 大宜味村役場企画財政課. 1999. 平成11年度 离島・過疎地域ふるさと活性化推進事業 小冊子. 長寿の里・芭蕉布の里・シークワーサーの里・ぶながやの里. 大宜味村

大宜味村立塩屋保育所. 1996～1999.

「自主研究レポート」. 大宜味村立塩屋保育所.

津波高志他. 1982. 沖縄国頭の村落(上巻). 新星図書出版

参考WEB SITE

大宜味村 WEBSITE.

<http://www.vill.ogimi.okinawa.jp/>

沖縄県立博物館紀要

第31号（2005年12月21日発行）

編集・発行 沖縄県立博物館

〒903-0823 那覇市首里大名町1-1

T E L (098) 884-2243

F A X (098) 886-4353

印 刷 株式会社国際印刷

BULLETIN
OF THE
OKINAWA PREFECTURAL MUSEUM

NO.31 (2005)

ARCHAEOLOGY

- Archaeological Studies on Ironware in Okinawa ······ 1
Shiichi TOMA

- Report on the Excavation of Urasoe Shell Mound ······ 13
Jyusei NITTA, Yoshimori HIGA, Harumi SHIMABUKURO and Hisayoshi NAKAZA

ARTS AND CRAFTS

- Notes on Historical Materials for Order Form of Dyed in the Ryukyu Kingdom ······ 55
Nobuyuki HIRAKAWA

FOLKLORE

- Ryukyu Wild Boar and the Life of People in Ogimi Village ······ 65
Seiko MATSUKAWA